豊橋市埋蔵文化財調査報告書第85集

吉田城址(VI)

2006年3月

豊橋市教育委員会

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第85集

吉田城址（VI）

よしだじょうし

2006年3月

豊橋市教育委員会

例　言

1．本書は、豊橋市今橋町３番地他において豊橋公園整備工事（給排水設備）に伴い事前に実施した吉田城址の発掘調査報告書である。調査期間は平成 16 年 1 月 23 日～3 月 29 日で、調査面積は 939 ㎡である。吉田城址の発掘調査は、今回が 20 次となる。

2．発掘調査については、豊橋市役所都市計画部公園緑地課から依頼を受けて豊橋市教育委員会が行い、小林久彦（教育部美術博物館）が担当した。

3．発掘調査に際して、公園緑地課や多くの方々のご理解・ご協力を頂いた。また、出土遺物については藤澤良祐氏（愛知学院大学）・鈴木正貴氏（(財) 愛知県埋蔵文化財センター）に、また石材の同定については家田健吾氏（豊橋市地下資源館）に、それぞれご教示を頂いた。記して感謝の意を表す次第である。

4．報告書の作成については、岩本佳子(豊橋市教育委員会嘱託員)・河合厚子・補永亨代・大谷孝世・安田明己・原田祥子の援助を受けた。写真撮影については小林が行った。

5．本書の執筆及び編集は小林が行った。

6．調査区に使用した座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、これを示した。本書に使用した方位はこの座標系に沿うものである。遺構・遺物のスケールについてはそれぞれに明示した。写真の縮尺は任意である。

7．調査にあたって作成した写真・カラースライド・実測図等の記録や出土遺物は、豊橋市教育委員会において保管・管理している。

目　次

第１章　遺跡の立地と歴史的環境
１．遺跡の立地 …… 1
２．歴史的環境 …… 2

第２章　調査の目的と経過
１．調査に至る経過 …… 4
２．調査の経過と方法 …… 5

第３章　Ａ区の遺構と遺物
１．遺構 …… 8
２．遺物 …… 21

第４章　Ｂ区の遺構と遺物
１．遺構 …… 40
２．遺物 …… 52

第５章　総括
１．近世以前の吉田城 …… 78
２．まとめにかえて …… 81

報告書抄録 …… 82

挿　図　目　次

第１図　吉田城址周辺地形図（１／40,000） …… 1
第２図　吉田城址周辺の遺跡分布図（１／25,000） …… 3
第３図　調査区位置図（１／2,500） …… 4
第４図　調査区配置図（１／750） …… 6
第５図　Ａ区遺構実測図－１（１／200・１／80） …… 10
第６図　Ａ区遺構実測図－２（１／200・１／80） …… 13
第７図　Ａ区遺構実測図－３（１／200・１／80） …… 16
第８図　Ａ区遺構実測図－４（１／200・１／80） …… 18
第９図　Ａ区・Ｂ区遺構実測図（１／80） …… 20
第10図　Ａ区出土遺物実測図－１（１／３） …… 22

第11図　A区出土遺物実測図－2（1／3・1／4）…… 24
第12図　A区出土遺物実測図－3（1／3・1／4）…… 26
第13図　A区出土遺物実測図－4（1／3・1／4）…… 28
第14図　A区出土遺物実測図－5（1／3・1／4）…… 30
第15図　A区出土遺物実測図－6（1／3・1／4）…… 32
第16図　A区出土遺物実測図－7（1／3・1／4）…… 34
第17図　A区出土遺物実測図－8（1／3・1／4）…… 36
第18図　B区遺構実測図－1（1／200・1／100・1／30）…… 42
第19図　B区遺構実測図－2（1／200・1／80）…… 45
第20図　B区遺構実測図－3（1／200・1／80）…… 48
第21図　B区遺構実測図－4（1／80）…… 50
第22図　B区出土遺物実測図－1（1／3・1／4）…… 53
第23図　B区出土遺物実測図－2（1／3・1／4）…… 55
第24図　B区出土遺物実測図－3（1／3）…… 57
第25図　B区出土遺物実測図－4（1／3）…… 59
第26図　B区出土遺物実測図－5（1／3・1／4）…… 61
第27図　B区出土遺物実測図－6（1／3・1／4）…… 63
第28図　B区出土遺物実測図－7（1／3・1／4）…… 64
第29図　B区出土遺物実測図－8（1／3・1／4）…… 66
第30図　B区出土遺物実測図－9（1／3・1／4）…… 68
第31図　B区出土遺物実測図－10（1／3・1／4）…… 70
第32図　B区出土遺物実測図－11（1／3・1／4・1／6）…… 71
第33図　B区出土遺物実測図－12（1／3）…… 72
第34図　近世以前の主要遺構（1／800）…… 79

表　目　次

第1表　A区出土遺物観察表 …… 37
第2表　B区出土遺物観察表 …… 74

写真図版目次

1-1 A1－1・2区全景(北から)　2 A1－1・2区ＳＫ－11断面(西から)　3 A1－1区ＳＤ－０２断面(東から)
4 A2－3～1区全景(北東から)　5 A2－1～3区全景(南西から)
2-1 A2－2～4区全景(南西から)　2 A2－4～1区全景(北東から)　3 A2－2・3区ＳＢ－０１柱穴他(北から)

4 A2－4区ＳＫ－5遺物出土状況(北東から)　5 A2－4区ＳＤ－０８断面(南東から)

3-1 A6－２・１区全景(南東から)　2 A6－１区柱穴等(北西から)　3 A6－１・２区ＳＫ－4断面(南から)

4 A7－３～１区全景(北から)　5 A7－３区ＳＫ－６断面(南から)

4-1 A3－１～３区全景(北から)　2 A3－３・２区全景(南から)　3 A3～A4区ＳＤ－０８(北から)

4 A4－１区ＳＤ－０８断面(西から)　5 A4－２区ＳＤ－１３(北西から)

5-1 A4－３～１区全景(北から)　2 A4－１～３区全景(南から)　3 A5－１・２区全景(南から)

4 A5－２・１区全景(北から)

6-1 A8－１区ＳＤ－０８石垣(北東から)　2 A8～A5区ＳＤ－０８石垣(南から)

3 A5－１区ＳＤ－０８石垣(西から)　4 A8－１～３区全景(東から)　5 A8－３～１区全景(西から)

7-1 A9－１・２区全景(北東から)　2 A9－２～４区全景(北東から)　3 A9－２・３区ＳＤ－０８(南から)

4 A11－３～１区全景(北から)　5 A12－３区全景(西から)

8-1 A11－１～３区全景(南から)　2 A12－３～１区全景(西から)　3 A12－１～３区全景(東から)

4 A13－１・２区全景(西から)　5 A13－１区ＳＤ－０８(南西から)

9-1 B15－１～３区全景(南から)　2 B15－３・２区全景(北から)

3 B15－２区ＳＫ－20(西から)　4 B15－１区西壁土層(東から)

5 B15－２・１区ＳＤ－０５(北から)　6 B15－２区ＳＫ－19断面(東から)

10-1 B16－１～３区全景(北から)　2 B16－３・２区全景(南から)　3 B16－１区SD－０４断面(南から)

4 B17－２・１区全景(西から)　5 B17－２区ＳＫ－４遺物出土状況(西から)

11-1 B17－１・２区全景(東から)　2 B18－２・１区全景(西から)　3 B18－１区全景(東から)

4 B18－２区ＳＤ－０８(西から)　5 B18－２区ＳＤ－０８断面(南から)

12-1 B19－１・２区全景(北西から)　2 B19－２・１区全景(南東から)　3 B20－２・１区全景(西から)

4 B20－１・２区ＳＫ－18断面(南から)　5 B20－２区北壁土層(南から)

13-1 B20－１・２区全景(東から)　2 B21－１～３区全景(東から)　3 B21－３～１区全景(西から)

4 B21－３区下層全景(西から)　5 B21－２区ＳＤ－０３断面(南から)

14-1 B22－３～１区全景(北東から)　2 B22－１～３区全景(南西から)　3 B22－３区土塁検出状況(南西から)

4 B22－１区ＳＤ－０２・ＳＫ－２断面(南東から)　5 B23－３～１区全景(南東から)

15-1 B23－１～３区全景(北西から)　2 B23－２・１区下層全景(南東か)

3 B23－２区ＳＫ－１・２(東から)　4 B23－２区ＳＫ－31・32(北東から)

5 B23－２・３区ＳＤ－０３(南から)　6 B23－２・３区ＳＤ－０３断面(南西から)

16　A区出土遺物－１

17　A区出土遺物－２

18　A区出土遺物－３

19　B区出土遺物－１

20　B区出土遺物－２

21　B区出土遺物－３

22　B区出土遺物－４

23　B区出土遺物－５

第１章　遺跡の立地と歴史的環境

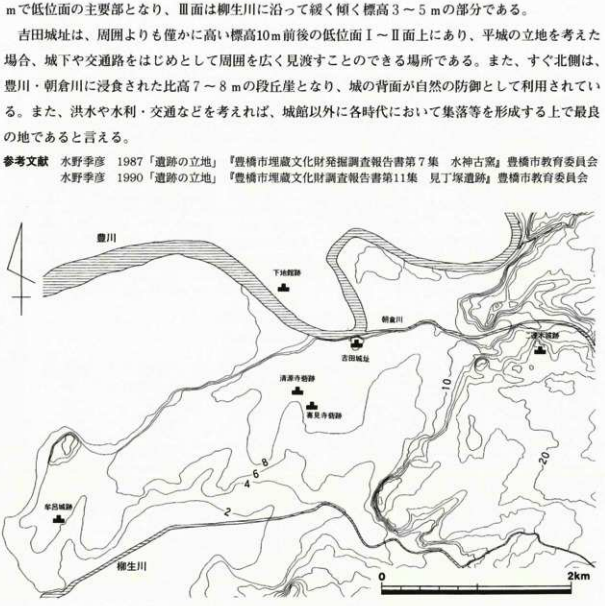
１．遺跡の立地（第１図）

豊橋市域は、大きく見ていくと東側が弓張山地に、南側が太平洋に、西側が三河湾に、北側が豊川にそれぞれ限られており、そのほぼ中心に吉田城址は位置していると言える。

東部の山地や北西部の沖積低地を除くと、市域の多くは豊川と旧天竜川によって形成された河岸段丘上にある。この河岸段丘は、高位面（天伯原面・標高30～60ｍ）、中位面（高師原面～豊橋上位面・標高15～30ｍ）、低位面（豊橋面・標高４～10ｍ）の３面に分けることができ、吉田城址の立地する河岸段丘はこのうちの低位面である。この低位面は、他の段丘に比べて形成年代が新しいため浸食は進んでおらず比較的平坦であるが、その面の連続性からさらにⅠ～Ⅲ面の３面に分けられる。Ⅰ面は、吉田城址付近及び牟呂町坂津付近にあり、周囲より１～２ｍ程高い小山状となる。Ⅱ面は標高４～８ｍで低位面の主要部となり、Ⅲ面は柳生川に沿って緩く傾く標高３～５ｍの部分である。

吉田城址は、周囲よりも僅かに高い標高10ｍ前後の低位面Ⅰ～Ⅱ面上にあり、平城の立地を考えた場合、城下や交通路をはじめとして周囲を広く見渡すことのできる場所である。また、すぐ北側は、豊川・朝倉川に浸食された比高７～８ｍの段丘崖となり、城の背面が自然の防御として利用されている。また、洪水や水利・交通などを考えれば、城館以外に各時代において集落等を形成する上で最良の地であると言える。

参考文献　水野季彦　1987「遺跡の立地」『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第７集　水神古窯』豊橋市教育委員会
水野季彦　1990「遺跡の立地」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第11集　見丁塚遺跡』豊橋市教育委員会



第１図　吉田城址周辺地形図（１／40,000）

2．歴史的環境（第2図）

吉田城址は、豊橋市今橋町他に所在し、城館以外にも縄文時代晩期から近世・近代の遺構・遺物が確認されている複合遺跡である。この吉田城址が立地する河岸段丘の縁辺部や北側に広がる沖積低地には、縄文時代から近世にかけての遺跡が多く分布している。なお、南側に続く段丘上に遺跡はほとんど確認されていない。ここでは、周辺に広がる遺跡の概要について時代毎に述べていく。

縄文時代

縄文時代では、段丘上に形成された石塚貝塚(5)や自然堤防上に形成された五貫森貝塚(7)・大蚊里貝塚(8)等がある。石塚貝塚はハイガイを主体とした前期中葉の貝塚、五貫森貝塚や大蚊里貝塚はヤマトシジミを主体とした晩期の貝塚である。この他には、牛川町の眼鏡下池北遺跡や洗島遺跡(15)、おいほて遺跡などで早期や中期の土器が出土している。

弥生時代

吉田城址から北西に2.5km程の沖積低地には、中期から後期の拠点的集落と考えられる瓜郷遺跡が見られる。また段丘上では、西側遺跡(14)や熊野遺跡(13)、西先原遺跡(17)、牛川町浪ノ上遺跡などがある。このうち西側遺跡では竪穴住居や環濠・方形周溝墓などが確認されており、比較的規模の大きな中期から後期にかけての集落と考えられる。

古墳時代

古墳では段丘縁辺部に、東田古墳(20)や稲荷山古墳群等が見られる。東田古墳は、全長40mを測る中期の前方後円墳で、後円部からは鳥文鏡・大刀が、墳丘上からは円筒・形象埴輪がそれぞれ出土している。稲荷山古墳群は、方墳を主体とした初期群集墳と考えられている。

集落では、熊野遺跡で前期の竪穴住居、西側遺跡では中期の竪穴住居や後期の竪穴住居・掘立柱建物、東田遺跡(18)では後期の竪穴住居等がそれぞれ確認されている。なお、これまでの吉田城址の調査では、銅鏃・円筒埴輪等の遺物や後期の竪穴住居等が検出されているため、付近には古墳や集落の存在が想定され、飽海遺跡(2)としている。また、沖積低地上の下河原遺跡(11)や為河原郷遺跡(12)等では、当期以降の遺物が採集されており、集落の存在を推測させる。

古代

吉田城址17次調査地点で規格性の高い総柱建物や溝などが検出され、周辺調査区では緑釉陶器が比較的多く出土するなどしており、飽海遺跡(2)に古代官衙が存在する可能性が高い。

中世～近世

今回調査地周辺は、伊勢神宮領の飽海神戸・吉田御園があったとされるが、これに関連した遺構などは未だ発見されていない。但し、周辺の調査では、灰釉系陶器を伴う土壙や掘立柱建物が確認されている。また、西側遺跡で検出された幅6.5m、深さ最大2.8mの大溝には多量の灰釉系陶器碗などが廃棄されており、豪族居館の存在を推測させた。

戦国期では、戸田氏の築いた二連木城址(19)、松平家康が吉田城攻めの際に築いたとされる喜見寺砦址(3)、清源寺砦址(4)等がある。このうち二連木城址は、段丘の縁辺に築かれており、主郭付近には土塁・堀などが比較的残っている。

江戸時代には、吉田城以外では小規模な集落と考えられる西側遺跡や中郷遺跡等が見られる。また、東海道の宿場である吉田宿が吉田城に沿うようにして置かれた。更に江戸後期になると、吉田藩のお庭焼きとされる牛川焼窯址(16)が、城の北東1.5㎞程の段丘縁辺部に築かれる。なお、この窯址に隣接して吉田藩御用石灰窯も築かれ、石灰生産が行われていた。

近代

明治時代以降には、吉田城内に旧日本陸軍歩兵第十八聯隊が設置されているが、この時点で吉田城は大きく改修を受け、特に二の丸の多くの土塁が壊され堀が埋められている。

1 吉田城址	2 飽海遺跡	3 喜見寺砦址	4 清源寺砦址	5 石塚貝塚
6 下地館址	7 五貫森貝塚	8 大蚊里貝塚	9 袋小路遺跡	10 上ノ畑遺跡
11 下河原遺跡	12 為河原郷遺跡	13 熊野遺跡	14 西側遺跡	15 洗島遺跡
16 牛川焼窯址	17 西先原遺跡	18 東田遺跡	19 二連木城址	20 東田古墳

第2図　吉田城址周辺の遺跡分布図（1／25,000）

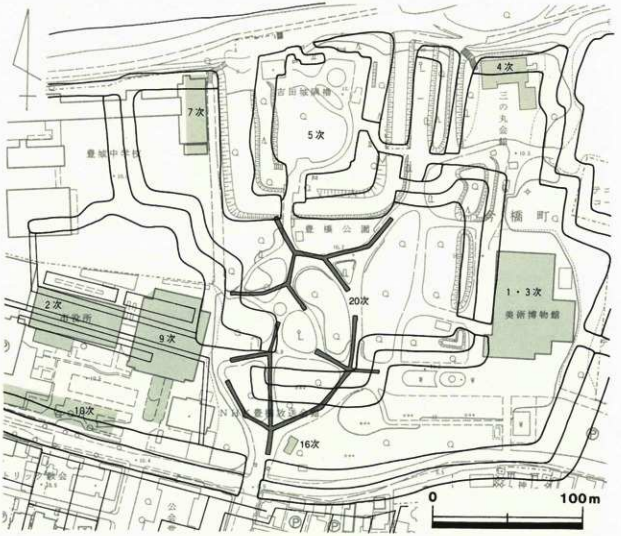
第２章　調査の目的と経過

１．調査に至る経過（第３図）

吉田城址は、豊橋市教育委員会をはじめとして愛知県教育委員会や(財)愛知県埋蔵文化財センターによって、これまでに19次に及ぶ発掘調査が行われている。

今回行われた20次発掘調査は、平成15年12月22日付けで豊橋市公園緑地課から文化財保護法第57条の３(現第94条)に基づく埋蔵文化財発掘の通知が提出されたことに始まる。これは、豊橋公園内での雨水の排水が悪いことによる排水管の付け替え工事等を主に行うもので、対象地は吉田城の二の丸から三の丸にかけての広い範囲に及んでいる(第３図ー注１)。周辺のこれまでの調査状況を見ると、すぐ西側では豊橋市役所東庁舎建設に伴う調査(９次)、東150ｍでは美術博物館建設に伴う調査(１・３次)、北東200ｍでは三の丸会館建設に伴う調査(４次)等があり、それぞれ大きな成果を得ている。

当教育委員会ではこうした周辺の状況を踏まえ、対象地での遺構は良好に遺存しているものと判断し、給排水管埋設予定地の939㎡について発掘調査を実施することとした。



第３図　調査区位置図（１／2,500）

２．調査の経過と方法（第４図）

調査地は、現況では公園内の通路に当たる部分がほとんどで、標高10ｍ程の平坦な地形となっている。しかしながら、明治期には歩兵第十八聯隊本部の建物等があったり、また江戸期には吉田城二の丸・三の丸にあたり土塁や堀が絵図などから推測される場所である。

今回の調査は主に排水管理設に伴って行われるため、調査区の幅は1.5～２ｍ程と狭く、長さは総延長で500ｍを越えている。公園内に敷設する排水管は二系統あり、これに合わせて調査区を設定していくため、座標は後から示す方法で行った。南側に排水する管路をＡ区、北側に排水する管路をＢ区として、それぞれの支線をA1～A13、B15～B23で表し、更に各支線は10ｍ毎に区切ったため、各調査区はA1－１区、A1－２区、B15－１区、B15－２区等と表示することにした。

調査は、公園の機能をできるだけ停止させることなく進めるため、各支線毎に調査区をフェンスで囲い、表土剥ぎ→地区設定→遺構検出→遺構掘り下げ→写真撮影・遺構図作製→埋め戻しの順で繰り返し作業を行った。

基本的な層序は、表土(盛土・造成土)や撹乱土が20～40cm程堆積し、その下が地山(黄褐色砂質土～砂礫土)となっているが、部分的には包含層や整地層と考えられる堆積等も見られた。このため、基本的には地山面や整地層上面まで重機で剥ぎ、その後の遺構検出や遺構の掘り下げは全て人力で行った。但し、堀については深く危険性を伴うため、最終的に重機による掘り下げを行っている。

以下、簡単に調査経過を記す。

・１月23日～29日、調査用具の準備。A1－１・２区から調査を開始する。調査区にほぼ沿うように戦国期の溝が検出され、またそれに直交するように別の溝も確認された。

・１月28日～２月６日、A2－１～４区、A9－１～３区の調査。明治期に埋められた江戸期の二の丸堀が、A2－４区～A9－２区で確認される。幅は12ｍ程と推測されたが、底までは確認できない。

・２月５日～３月26日、B21－１～３区、B22－１～３区、B23－１～３区の調査。江戸期の絵図には示されていない位置から堀や残存した土塁の一部が検出される。また、この付近では、包含層や整地層が見られ、中には鉄滓・炉壁などの破片が多く出土している。このため、これらの調査区では最終日近くまで作業を断続的に続けた。

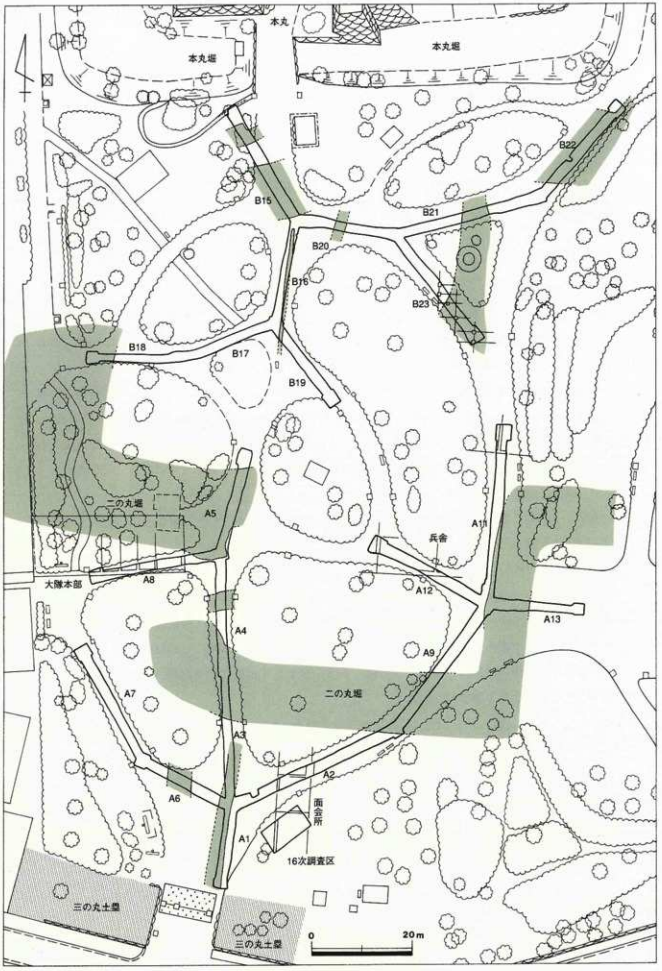
・２月６日～12日、A6－１・２区、A7－１～３区の調査。A7－１～３区では、既に別の排水管による撹乱が目立つが、瓦溜まりなども確認できた。

・２月16日～19日、A13－１・２区の調査。A13－１区のほとんどは江戸期の二の丸堀で、幅は９ｍ程であることが確認できている。

・２月17日～26日、A3－１～３区、A4－１～３区の調査。A3－１区～A4－１区で江戸期の二の丸堀にあたり、幅13ｍ程と推測される。また、A4－２区では戦国期と考えられる堀も見つかっている。

・２月19日～３月４日、B15－１～３区、B16－１・２区の調査。B15－１・２区では江戸期以前の堀が検出され、江戸期の本丸堀に併行する方向に延びる可能性が考えられた。また、この付近では整地層も確認した。

・２月23日～27日、A12－１～３区の調査。明治期の煉瓦建物基礎を検出する。また、戦国期と考え



第4図　調査区配置図（1／750）

られる比較的浅い堀(区画溝か？)が見つかっている。

・３月１日～10日、A5－１・２区、A8－１～３区の調査。A5－１区～A8－１区にかけて二の丸堀が検出され、その下には石材にチャートを主に用いた腰巻き石垣が確認された。また、A8－２・３区では明治期の聯隊本部と考えられる煉瓦建物基礎を検出する。

・３月３日～10日、A11－１～４区の調査。A11－１・２区では江戸期の二の丸堀が検出される。

・３月10日～15日、B17－１・２区、B18－１・２区の調査。江戸期以前の多数の土壙が検出される。また、西端となるB18－２区では二の丸堀が確認された。

・３月15日～25日、B19－１・２区、B20－１・２区の調査。B20－２区では江戸期以前の堀と推測される遺構は調査区に直交するように検出された。またB20－１・２区の全体にわたって鉄滓や炉壁などを伴う土壙が検出されている。

・３月29日、調査用具の撤収を行い、現地での全ての作業を終了する。

注１　第３図は、豊橋市教育委員会他　1994「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第21集　吉田城址(Ⅰ)」第105～108図を基に作製

第３章　Ａ区の遺構と遺物

１．遺構（第４～９図）

Ａ区では、近世の堀以外に戦国期の堀・溝（ＳＤ）が見つかり、また掘立柱建物（ＳＢ）や多数の土壙（ＳＫ）なども検出されているが、全体形の分かるものは少ない。なお、これ以外に第十八聯隊（以下、聯隊と略す）関連の遺構もあり、Ａ８－１～３区では煉瓦基礎による聯隊本部建物、Ａ２－１・２区ではコンクリート基礎による面会所、Ａ12－１～３区では煉瓦基礎による機関銃隊兵舎、Ａ11－４区ではコンクリート基礎による砲隊建物などが確認されている。

溝・堀

ＳＤ－０１（Ａ1－１・２区／Ａ3－２・３区／Ａ6－２区）

溝は南北方向（Ｎ－９°－Ｅ）にほぼ直線的に延び、途中でＳＤ－０２を切っている。

規模は、幅が2.6ｍ程と推測されるが溝の肩の多くは調査区外ではっきりせず、長さは26.5ｍを測る。溝の断面は、西側の肩が段となるが、全体的には溝底がやや広い「Ｕ」字状で、深さは途中の段の部分で30～40㎝、最も深い部分で60㎝程となる。溝の傾斜はＡ1－１・２区の溝底が不明なためはっきりしないが、ＳＤ－０２のすぐ北側が北端に比べて10㎝程低くなっている。埋土は、やや粘質の暗灰色砂質土である。なお、当初土壙としたＡ1－１区ＳＫ－13は、Ａ3－３区からスムーズにつながることからＳＤ－０１が少し深く掘られた部分と考えられる。

出土遺物には陶器碗・皿・擂鉢・甕、土師器半球形鍋・くの字形鍋・小皿、銭貨、鉄滓など（第10図１～13・17～19、第13図80～94、第14図124・125）があり、遺構は16世紀後半であろう。

ＳＤ－０２（Ａ1－１区）

溝は東西方向（Ｎ－80°－Ｗ）にほぼ直線的に延びているが、半分近くはＳＤ－０１に切られている。16次調査区で検出されたＳＤ－２及びＳＤ－３に続く可能性が高い。

規模は、幅が2.1ｍ程で、長さは1.9ｍを測る。溝の断面は掘り直しのためか南側の肩が段となり溝底は幅90㎝程と広く平坦で、深さは途中の段の部分で60㎝程、最も深い部分までは70㎝程となる。東端と西端との高低差はほとんどなく、溝底の傾斜は見られない。埋土は、下層の10㎝程が淡灰色粘質土、それより上層は灰色粘質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗・甕、土師器半球形鍋・くの字形鍋・羽釜・小皿など（第10図14～16）があり、遺構は16世紀前半のものであろう。

ＳＤ－０３（Ａ9－１・２区）

溝は南北方向（Ｎ－１°－Ｅ）にほぼ直線的に延び、ＳＤ－０４～０７とほぼ並行している。

規模は、幅が1.5ｍ程で、長さは4.0ｍを測る。溝の断面は掘り直しのためか西側の肩が段となる浅い「Ｕ」字状で、深さは途中の段の部分で５㎝程、最も深い部分では20㎝程となる。北端と南端との高低差はほとんどなく、溝底は平坦である。埋土は、淡灰色砂質土である。出土した遺物が灰釉系陶器片と土師器くの字形鍋・小皿の小片だけで、遺構の時期ははっきりしない。

ＳＤ－０４（Ａ9－２区）

溝は南北方向(Ｎ－５°－Ｅ)にほぼ直線的に延び、ＳＤ－０５～０７などと並行している。

規模は、幅が0.8ｍ程であるが西側の肩はＳＤ－０５と重複しているためはっきりせず、長さは3.8ｍを測る。溝の断面は浅い皿状で、深さは13㎝程となる。北端と南端との高低差はほとんどなく、溝底は平坦である。埋土は、灰色砂質土である。出土した遺物には陶器小皿、土師器半球形鍋・くの字形鍋・羽釜・小皿など(第15図161～165)があり、遺構は16世紀前半のものであろう。

ＳＤ－０５（A9－２区）

溝は南北方向にほぼ直線的に延び、南側では土壙状となりやや深くなる。ＳＤ－０３・０４やＳＤ－０６・０７とほぼ並行し、南端はＳＤ－０８に切られている。

規模は、幅が0.7～1.0ｍ程で、長さは4.0ｍを測る。溝の断面は、両側の肩がＳＤ－０４やＳＤ－０６と重複しているため現状では浅い皿状となるが本来は「U」字状と考えられる。深さは38㎝程で、北端と南端との高低差はほとんどない。埋土は、灰色砂質土である。出土遺物には灰釉系陶器片、土師器半球形鍋・くの字形鍋・小皿など(第16図166～170)があり、遺構は16世紀前半であろう。

ＳＤ－０６（A9－２区）

溝は南北方向にほぼ直線的に延び、ＳＤ－０５やＳＤ－０７などと並行している。

規模は、幅が0.6ｍ程であるが西側の肩はＳＤ－０７と重複しているためはっきりせず、長さは1.9ｍを測る。溝の断面は、両側の肩がＳＤ－０５やＳＤ－０７と重複しているため浅い皿状となるが本来は「U」字状と考えられる。溝底の深さはＳＤ－０５と同じ38㎝程で、北端と南端との高低差はほとんどない。埋土は、灰色砂質土である。遺物が出土していないため遺構の時期ははっきりしない。

ＳＤ－０７（A9－２区）

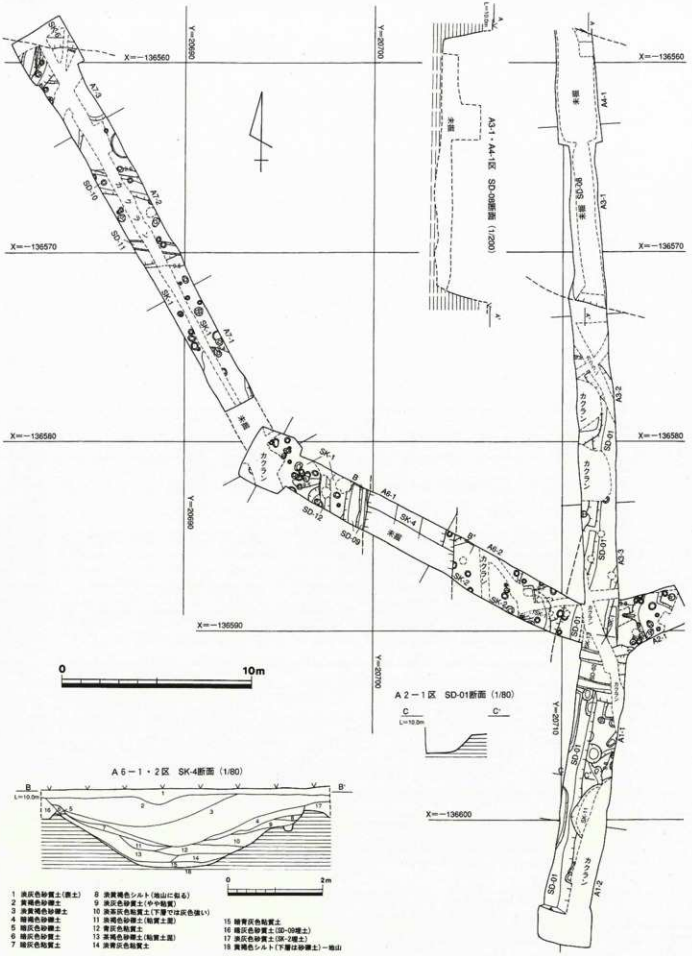
溝は南北方向に延びているが、攪乱などのため全体の形状は不明である。なお、遺構は攪乱を挟んだ西側のA9－２区ＳＫ－１とつながる可能性もある。

規模は、幅が0.5ｍ以上で、長さは0.8ｍを測る。溝の断面は、浅い皿状と推測されるがはっきりしない。深さはＳＤ－０６の溝底より８㎝程さらに深いが、溝底の傾斜はほとんどない。埋土は、灰色砂質土である。出土した遺物は灰釉系陶器碗片と陶器皿片のみで、遺構の時期は不明である。

ＳＤ－０８(A2－４区/A3－１区/A4－１区/A9－３区/A11－１・２区/A13－１区//A5－１・２区/A8－１区)

各調査区で検出された堀はいずれも幅が広く非常に深いため、完全に掘り上げることはできなかったが、それぞれの位置関係を吉田城絵図に重ね合わせたところ「二の丸堀」とほぼ一致した。なお、A5－１・２区～A8－１区で検出されたＳＤ－０８はB18－２区ＳＤ－０８へと続いている。

規模は、A3－１区～A4－１区では幅が約14ｍ、北端近くの深さは検出面より2.1ｍを測る。未掘部分には鉄棒を刺して、深さは現地表より３ｍ前後と一定(堀底標高７ｍ前後)であることが推測され、断面形は底面が広く平坦な箱堀状となろう。この部分の埋土は暗灰色砂質土が主体であるが、土層の締まりは弱く土塁とは異なる土を埋めたようである。A2－４区～A9－３区では幅が12～13ｍ、深さは３ｍ以上と推測されるが確定していない。断面形は底面が広く平坦な箱堀状と推測され、傾斜は北側(二の丸側)が多少緩やかである。この部分の埋土は茶灰色砂礫土や砂礫混じりの黄灰色砂質土などで、土層断面からすると北側にあった土塁がそのまま南側の堀に埋められたようである。A13－１区では幅が約８ｍ、深さは確定できないが、未掘部分は鉄棒を刺し、現地表より2.9ｍ前後(堀底標高7.4



第５図　Ａ区遺構実測図－１（１／２００・１／８０）

ｍ前後）と推測された。断面形は底面が広く平坦な箱堀状であるが、西側（二の丸側）の傾斜はやや緩やかである。この部分の埋土は淡灰色砂質土などが主体であるが、土層の締まりは弱く下層近くには煉瓦も入っていた。聯隊の設置後しばらくしてから、土塁とは異なる土を埋めたようである。なお、堀底近くの埋土を確認する限り、堀内には水が常に漬いていた状況ではない。

一方A5－１・２区～8－１区では、堀の規模はほとんど確認できていないが、二の丸口に近い部分の斜面で石垣が検出された（注１）。石垣は、堀の肩部より１ｍ程下がった部分（石垣上場の標高８～8.5ｍ）で最低２段が確認され、いわゆる「腰巻き石垣」と考えられる。石材はチャートの割石で、裏込めには拳大程の川原石が使われている。また、A5－１・２区の未掘部分では、裏込め用とは異なる拳大から人頭大の川原石が多量に出土している。

出土した遺物には灰釉系陶器片、陶器碗・擂鉢・甕、磁器碗・皿、土師器くの字形鍋・半球形鍋・小皿、瓦類、石臼、煉瓦など（第12図66～68、第13図77～79・95～98・106～109、第16図174～178、第17図206）があるが、これらからでは堀の掘削時期ははっきりしない。堀に使われた石垣の石材がチャートであることからすれば、池田照政による吉田城大改修時の掘削である可能性が高い。なお、堀は明治18（1885）年の聯隊の設置時あるいはしばらくして埋められたと考えられる。

ＳＤ－０９（A6－１区）

溝は南北方向にほぼ直線的に延び、ＳＤ－１２と並行し、A6－１区ＳＫ－４には切られている。

規模は、幅が1.1～1.2ｍ程で、長さは2.1ｍを測る。溝の断面は掘り直しのためか西側の肩が段となる浅い「Ｕ」字状で、深さは途中の段の部分で12㎝程、最も深い部分では17㎝程となる。北端と南端との高低差はほとんどなく、溝底は平坦である。埋土は、貝殻混じりの灰色砂質土である。出土遺物には陶器甕、土師器くの字形鍋・小皿など（第14図114・115）があり、遺構は16世紀代であろう。

ＳＤ－１０（A7－２区）

溝は東西方向（Ｎ－82°－Ｗ）にほぼ直線的に延びている。規模は、幅が1.0～1.1ｍ程で、長さは2.6ｍを測る。溝の断面は浅い「Ｕ」字状で、深さは17㎝程となる。東端と西端との高低差はほとんどなく、溝底は平坦である。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物は陶器皿・擂鉢・甕、土師器半球形鍋・小皿の小片と獣骨片だけであるが、遺構の時期はＳＤ－１１に近い16世紀代であろう。

ＳＤ－１１（A7－２区）

溝は東西方向（Ｎ－84°－Ｗ）にほぼ直線的に延び、ＳＤ－１０と並行している。

規模は、幅が0.5～0.6ｍ程で、長さは2.5ｍを測る。溝の断面は浅い皿状で、深さは10㎝程となる。東端と西端との高低差はほとんどなく、溝底は平坦である。埋土は、炭混じりの灰色砂質土である。出土した遺物には陶器擂鉢・甕、土師器半球形鍋・くの字形鍋・小皿、獣骨片など（第15図147・148）があり、遺構は16世紀前半のものであろう。

ＳＤ－１２（A6－１区）

溝は南北方向にほぼ直線的に延び、ＳＤ－０９と並行し、A6－１区ＳＫ－１とは重複する。

規模は、幅が0.6ｍ程で、長さは1.8ｍを測る。溝の断面は浅い「Ｕ」字状で、深さは10㎝程となり、両端の高低差はほとんどない。埋土は、炭混じりの暗灰色砂質土である。出土遺物は土師器くの字形鍋片と小皿片のみで、遺構の時期ははっきりしないが、A6－１区ＳＫ－１に近い16世紀前半であろう。

ＳＤ－１３（A4－２区）

東西方向（Ｎ－84°－W）に延びた大きな堀と推測され、中央部は近現代の排水管等によって大きく攪乱されている。ＳＤ－１４に切られている。

規模は、幅が3.6ｍ程で、長さは1.9ｍを測る。堀の断面は比較的深い箱堀状と推測され、深さは2.2ｍ以上となる。堀底は一部が確認されたのみで、傾斜ははっきりしない。埋土は地山土や小砂礫混じりの暗褐色砂質土などが主体で、堀に伴う土塁の土が埋まった可能性が高い。出土遺物には陶器擂鉢、輸入磁器碗・皿、土師器くの字形鍋・皿など（第13図99～102）があり、遺構は16世紀後半であろう。

ＳＤ－１４（A4－２区）

溝は南北方向にほぼ直線的に延びているが、西側の肩がすべて調査区外となり両端は攪乱されているため規模等ははっきりしない。ＳＤ－１３を切っている。規模は、幅が 0.7 ｍ以上で、長さは 5.8 ｍを測る。溝の断面は「U」字状と推測され、深さは 57 ㎝以上となるが、溝底は確認されていないため傾斜は不明である。埋土は、茶褐色砂礫土である。出土した遺物には陶器鉢、磁器碗・皿、土師器鍋・焼塩壺蓋・小皿、貝殻など（第 13 図 103）があり、遺構は 18 世紀以降のものであろう。

ＳＤ－１５（A12－１区）

溝は南北方向（Ｎ－11°－Ｅ）にほぼ直線的に延びているが、A9－１区には続かない。

規模は、幅が0.5～0.6ｍ程で、長さは2.2ｍを測る。溝の断面は浅い皿状で、深さは10㎝程となる。北端と南端との高低差は５㎝で、北から南に向かって僅かに低くなる。埋土は、暗茶褐色砂質土である。遺物は土師器鍋・小皿、銭貨、銅製品など（第16図183・184）があり、遺構は16世紀代であろう。

ＳＤ－１６・ＳＤ－１６－２（A12－１区）

溝は北東－南西方向に延びていると考えられるが、聯隊の遺構などに壊されはっきりしない。ＳＤ－１６－２は、ＳＤ－１６を新たに掘り直している。ＳＤ－１６はＳＤ－１７を切っている。

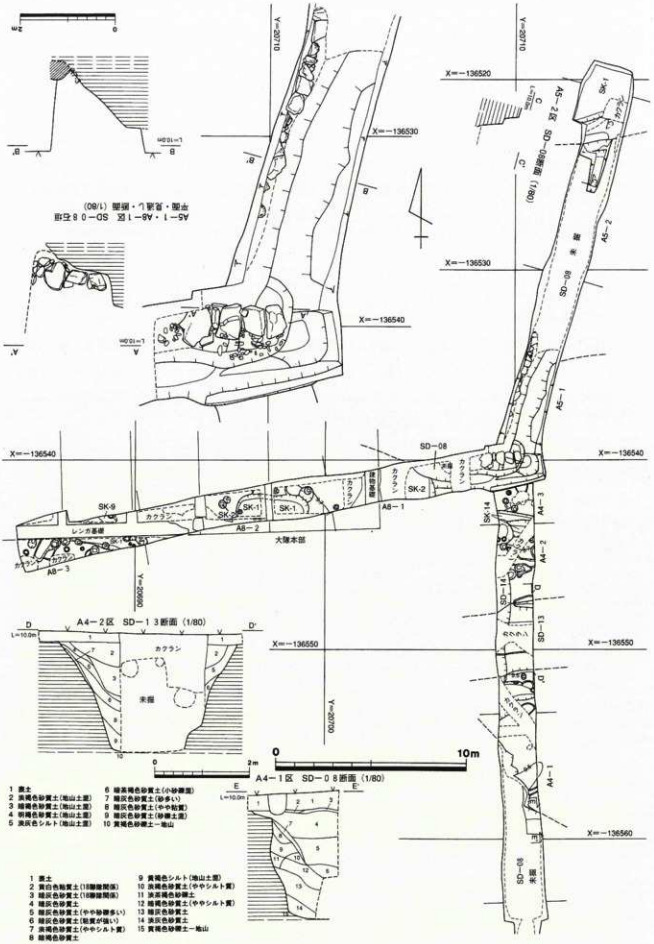
ＳＤ－１６について、規模は幅が5.5ｍ程で、長さは2.1ｍを測る。溝の断面は非常に緩やかな傾斜で、深さは80㎝程となる。溝底の傾斜ははっきりしない。埋土は、淡褐色砂質土や砂礫混じりの暗灰色砂質土などである。出土した遺物には灰釉系陶器片、陶器碗・擂鉢、土師器半球形鍋・くの字形鍋・小皿、鉄滓など（第16・17図185～192）があり、遺構は16世紀中葉のものであろう。

ＳＤ－１６－２は、規模が幅3.5ｍ程で、長さ2.1ｍを測る。溝の断面はやや箱堀状で、深さは94㎝程となるが、溝底の傾斜は不明。埋土は、淡褐色や暗灰色の砂礫土などである。出土遺物には陶器碗・甕、土師器半球形鍋・小皿など（第17図193）があり、遺構は16世紀後半でＳＤ－１６より新しい。

ＳＤ－１７（A12－２区）

溝は北東－南西方向に延びていると考えられるが、聯隊の遺構などに壊されはっきりしない。ＳＤ－１７はＳＤ－１６に切られている。

規模は、幅が4.3ｍ程で、長さは2.1ｍを測る。溝の肩は明確に立ち上がり底面には広く平坦で、深さは55㎝程となる。溝底の傾斜ははっきりしない。埋土は、黄褐色小砂礫土や暗灰色粘質土などである。出土遺物には灰釉系陶器片、陶器皿、土師器半球形鍋・くの字形鍋・小皿など（第17図194～196）があるが、遺構の時期ははっきりせず、切り合い関係から16世紀中葉以前であろう。



1 表土
2 黄褐色砂質土(地山土質)
3 暗褐色砂質土(地山土質)
4 明褐色砂質土(地山土質)
5 淡灰色シルト(地山土質)
6 暗茶褐色砂質土(小砂礫混)
7 暗灰色砂質土(砂多い)
8 暗灰色砂質土(やや粘質)
9 暗灰色砂質土(砂礫土質)
10 黄褐色砂礫土－地山

1 表土
2 黄白色粘質土(18層陸間係)
3 暗灰色砂質土(18層陸間係)
4 暗灰色砂質土
5 暗灰色砂質土(やや砂礫多い)
6 暗灰色砂質土(粘質が強い)
7 赤褐色砂質土(ややシルト質)
8 暗褐色砂質土
9 黄褐色シルト(地山土質)
10 淡褐色砂質土(ややシルト質)
11 淡茶褐色砂礫土
12 暗褐色砂質土(ややシルト質)
13 暗灰色砂質土
14 淡灰色砂質土
15 黄褐色砂礫土－地山

第6図　A区遺構実測図－2（1／200・1／80）

掘立柱建物

ＳＢ－０１（A2－２・３区）

建物は、４間以上×２間以上の掘立柱建物で、A2－３区ＳＫ－８を壊している。主軸方位はＮ－４°－Ｅである。規模は桁行7.9ｍ以上、梁間4.4ｍ以上をそれぞれ測り、柱間は桁行で1.9～2.0ｍと一定であるが、梁間では2.6ｍと推測され桁行に比べてやや長い。柱穴は、径70～80㎝程、深さは45～50㎝程を測り、いずれも比較的同規模である。埋土は、地山土混じりの灰色砂質土や淡灰色砂質土で、柱穴A2－３区ＳＫ－６では炭や焼土が混じる。柱穴からは灰釉系陶器片、陶器甕、土師器半球形鍋・小皿、焼土など(第11図40)が出土しており、建物の時期は16世紀後半と推測される。

土壙

A1－１・２区ＳＫ－11

土壙は、西側がＳＤ－０１に切られ、反対側は攪乱によって壊されている。

平面形は不整な楕円形と推測され、規模は長径3.0ｍ以上×短径0.9ｍ以上を測る。側面は垂直気味で、深さは98㎝以上であるが底までは確認していない。埋土は、ハマグリ・ニシ等の貝殻混じりの暗灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器片・陶器碗・小皿・擂鉢、土師器半球形鍋・小皿、獣骨など(第10図20～23)があり、遺構は16世紀前半のものであろう。

A2－１区ＳＫ－１

ＳＤ－０１が埋められてから掘られたもので、平面形は方形あるいは長方形と推測され、規模は長さ2.2ｍ以上×幅0.5ｍ以上を測る。側面は垂直気味に掘られ、深さは35㎝程で底面は比較的平坦となる。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には陶器擂鉢・燭台、土師器くの字形鍋、鉄片など(第11図26)があり、遺構は19世紀初頭のものであろう。

A2－１・２区ＳＫ－29

多量の瓦類等が捨てられており、廃棄土壙と考えられる。平面形は、攪乱や聯隊建物などに壊されているためはっきりしない。東側はA2－２区ＳＫ－18と接している。規模は長さ4.3ｍ以上×幅2.1ｍ以上を測る。周囲に比べて30㎝程平坦に掘り下げられ、北側はさらに円形に10㎝程掘られている。埋土は、灰色砂質土である。出土した遺物には瓦類、陶器碗・鉢・鍋、磁器碗・皿、土師器半球形鍋・皿など(第11図27～33)があり、遺構は19世紀前半のものであろう。

A2－２区ＳＫ－18

A2－１・２区ＳＫ－29と同様に、瓦類等が捨てられた廃棄土壙である。平面形は不整な楕円形と推測されるが攪乱などで不明。規模は長さ3.2ｍ、幅2.2ｍ以上を測る。周囲に比べて50㎝前後掘り下げられ、最も深い部分では60㎝程となる。埋土は、暗茶褐色砂質土である。出土遺物には瓦類、陶器卸皿・甕、磁器碗、土師器鍋・皿・焼塩壺など(第11図34～39)があり、遺構は18世紀以降であろう。

A2－３区ＳＫ－８

土壙はＳＢ－０１に壊されている。平面形は不整な楕円形と推測され、規模は長径3.1ｍ×短径2.2ｍ以上を測る。側面は緩やかに傾斜し、深さは10～15㎝で底面は比較的平坦となる。埋土は、淡灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗、陶器皿・鉢・甕、土師器小皿など(第11図41～43)が

あり、遺構は16世紀前半のものであろう。

A2－３区ＳＫ－39

平面形は円形で、規模は径0.3ｍ、深さ47㎝程を測る柱穴状の土壙である。埋土は、地山土混じりの暗灰色砂質土である。出土した遺物には土師器鍋・小皿の小片と不明銅製品(第11図44)があり、遺構は16世紀代のものであろう。

A2－３区ＳＫ－46

平面形は不整な楕円形と推測されるが、南側はA2－３・４区ＳＫ－47に壊されているためはっきりしない。規模は長径2.0ｍ以上×短径1.5ｍで、深さは30㎝程を測る。埋土は、淡灰色砂質土である。出土した遺物には陶器碗・甕、土師器くの字形鍋・半球形鍋・小皿、とりべ、焼土など(第11図45～50)があり、遺構は16世紀後半のものであろう。

A2－３・４区ＳＫ－47

平面形は不整な楕円形と推測され、規模は長径2.6ｍ以上×短径1.5ｍ以上を測る。深さは35㎝程で、さらに一部は円形に５㎝程深く掘られている。埋土は、砂礫土混じりの淡茶褐色砂質土である。出土した遺物には陶器碗・皿・擂鉢、中国製磁器皿、土師器くの字形鍋・茶釜形鍋・小皿、瓦質土器など(第12図51～63)があり、遺構は16世紀後半のものであろう。

A2－４区ＳＫ－６

平面形は、攪乱などではっきりしない。規模は長さ1.4ｍ以上、幅0.7ｍ以上で、底面は中心に向かって傾斜し深さは最も深い部分で22㎝を測る。埋土は、砂礫混じりの灰色砂質土である。出土遺物には灰釉系陶器片、土師器半球形鍋・小皿など(第12図64・65)があり、遺構は16世紀代であろう。

A2－４区ＳＫ－５

平面形は不整な楕円形と推測されるが、ＳＤ－０８や攪乱などに壊されはっきりしない。規模は長径2.3ｍ以上×短径1.8ｍ以上で、底面は中心に向かって傾斜し深さは最も深い部分で76㎝を測る。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には陶器碗・皿・擂鉢・甕、土師器くの字形鍋・半球形鍋、石臼、不明銅製品、焼土など(第12図69～76)があり、遺構は16世紀前半のものであろう。

A4－２・３区ＳＫ－14

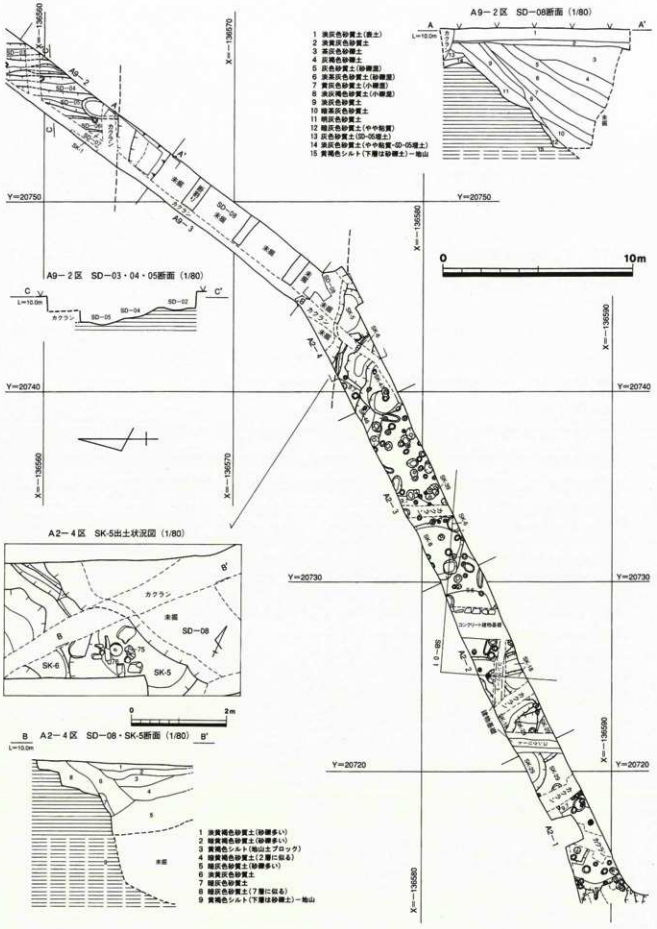
平面形は、細長い溝状となるが全体形ははっきりしない。規模は幅1.3ｍ、長さ2.0ｍ以上で、深さは浅い平坦な部分で６㎝、さらに深くなる部分で17㎝を測る。埋土は、淡灰色砂質土である。出土遺物には灰釉系陶器碗、土師器蓋・皿・鍋など(第13図104・105)があり、遺構は16世紀代であろう。

A5－２区ＳＫ－１

直線的に延びる側壁以外はほとんど調査区外で、平面形は不明である。規模は長さ3.1ｍ以上、幅2.5ｍ以上で、底面は広く平坦となり深さは50㎝程を測る。埋土は、上層が砂礫混じりの暗灰色粘質土、下層は灰色粘質土となる。出土した遺物には須恵器壺、灰釉系陶器片、陶器擂鉢・甕、土師器くの字形鍋・半球形鍋・小皿など(第14図110～113)があり、遺構は16世紀代のものであろう。

A6－１区ＳＫ－４

土壙としたが溝の可能性が高く、南北方向(Ｎ－３°－Ｅ)にほぼ直線的に延び、ＳＤ－０９やA6－２区ＳＫ－２を切っている。規模は、幅が4.8ｍ程で、長さは2.3ｍを測る。溝の側面は緩やかな傾斜で、



第７図　Ａ区遺構実測図－３（１／200・１／80）

深さは1.2ｍ程となる。北端と南端との高低差はほとんどなく、溝底は平坦である。埋土は、上層に砂礫土を含み下層は粘質土が主体となる。出土遺物は混入と考えられる陶器水注(第14図116)以外に、陶器甕や土師器鍋・小皿などの小片があり、遺構の時期は切り合いから16世紀後半であろう。

A6－１区ＳＫ－１

ＳＤ－０９の境からA6－１区西端まで続くが、平面形は不明である。ＳＤ－１２と重複している。規模は長さ4.2ｍ以上、幅2.0ｍ以上で、底面は中心に向かって緩やかに傾斜し最も深い部分で９㎝を測る。埋土は、一部に貝混じりの灰色砂質土である。出土遺物には灰釉系陶器片、陶器皿・擂鉢・甕、土師器くの字形鍋・茶釜形鍋・小皿など(第14図117～123)があり、遺構は16世紀前半であろう。

A6－２区ＳＫ－１

平面形は、攪乱などのためはっきりしない。A6－２区ＳＫ－２に切られる。規模は長さ1.9ｍ以上、幅1.4ｍ以上で、底面は比較的平坦となり深さは８㎝程を測る。さらにこの内側には、深さ８㎝の長方形の落ち込み(長さ1.7ｍ×幅0.5ｍ以上)が見られる。埋土は、暗茶褐色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗・小皿・甕、土師器伊勢型鍋・小皿、巻貝、焼土など(第14図126～130)があり、遺構は13世紀後半のものであろう。

A6－２区ＳＫ－２

部分的に見られる側壁以外はほとんど調査区外で、平面形は不明である。A6－１区ＳＫ－４に切られている。規模は長さ3.9ｍ以上、幅2.2ｍ以上で、底面は広く平坦となり深さは33㎝程を測る。埋土は、地山土混じりの灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗・皿、陶器碗・擂鉢・甕、土師器半球形鍋・小皿など(第14図131～136)があり、遺構は16世紀前半のものであろう。

A7－１区ＳＫ－１

A7－１区のほぼ全部とA7－２区のＳＤ－１１までが範囲で、多量の瓦類が捨てられた廃棄土壙である。規模は長さ8.8ｍ以上、幅1.9ｍ以上、底面は広く平坦となり深さは20㎝程を測る。埋土は、灰色砂質土である。出土した遺物には瓦類、陶器壺・鉢・甕、土師器半球形鍋・小皿など(第14・15図137～146)があり、遺構は19世紀代のものであろう。

A8－１区ＳＫ－２

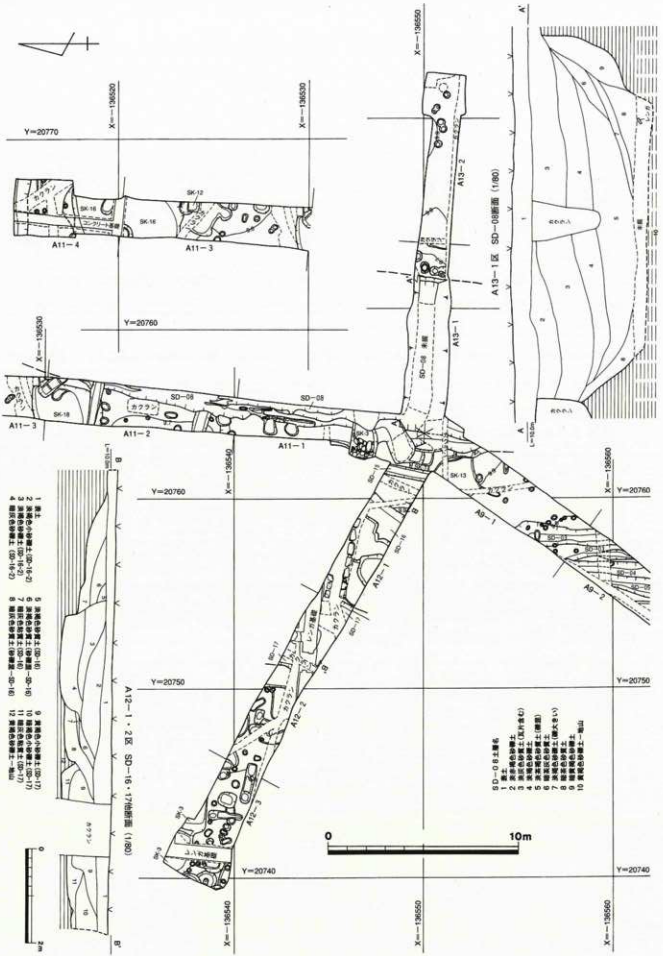
ＳＤ－０８や聯隊本部建物基礎によって壊されており、平面形は不明である。規模は長さ1.7ｍ以上、幅1.6ｍ以上で、底面は広く平坦となり深さは56㎝程を測る。埋土は、灰色砂質土である。出土した遺物には土師器半球形鍋・小皿など(第15図149)があり、遺構は16世紀代のものであろう。

A8－２区ＳＫ－１

平面形は楕円形と推測されるが、聯隊本部建物基礎などのためはっきりしない。規模は長径3.9ｍ×短径1.2ｍ以上で、底面は広く平坦となり深さは23㎝程を測る。また、北側には幅1.8ｍ、深さ10㎝程の浅い部分が張り出す。埋土は、淡灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗、陶器壺・甕、土師器くの字形鍋・小皿など(第15図150～152)があり、遺構は16世紀前半のものであろう。

A8－２区ＳＫ－２

平面形は円形で、規模は径0.5ｍ、深さ51㎝程を測る柱穴状の土壙である。埋土は、灰色砂質土である。出土遺物には陶器小片と土師器皿(第15図153)があり、遺構は16世紀代であろう。



第８図　Ａ区遺構実測図－４（１／200・１／80）

A8－３区ＳＫ－１・A8－３区ＳＫ－９

聯隊本部建物基礎を挟んで両側で検出されたもので、当初別遺構と考えたが同一のものであろう。平面形は基礎などのため不明で、規模は長さ3.7ｍ以上、幅1.9ｍ以上、底面は比較的平坦で深さは13㎝程を測る。埋土は、一部に貝殻混じりの暗灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器片、陶器碗・擂鉢、青磁片、土師器くの字形鍋・半球形鍋・小皿、貝殻など(第15図154・155)があり、遺構は16世紀中葉のものであろう。

A9－１区ＳＫ－13

平面形は不整な方形と推測されるが、攪乱などではっきりしない。規模は長さ2.1ｍ以上、幅1.7ｍ以上で、底面は平坦で深さは12㎝程を測る。埋土は、暗灰色砂質土である。出土遺物には陶器碗・甕、土師器くの字形鍋・半球形鍋・羽釜・小皿、鉄片など(第15図156)があり、遺構は16世紀代であろう。

A9－１区ＳＫ－14

A12－１区やA11－１区に続くもので、ＳＤ－０８を壊している。長さ5.7ｍ以上×幅1.7ｍ程の範囲に、南から北に降りるような階段状に掘り込まれ、高低差は1.2ｍを越える。埋土は、灰色砂質土と赤褐色砂質土が混ざる。出土した遺物には磁器碗・皿、瓦類、鉄釘・カスガイなど(第15図157～160)があり、遺構は明治期と考えられ、A11－１区ＳＫ－３の暗渠につながるものであろう。

A9－２区ＳＫ－１

非常に狭い部分を掘っているため平面形は不明であるが、攪乱を挟んでＳＤ－０７とつながる可能性も考えられる。規模は長さ1.1ｍ以上、幅0.2ｍ以上で底面は僅かに南側に傾斜している。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には混入と考えられる灰釉系陶器碗(第16図173)以外に、陶器擂鉢、土師器くの字形鍋・小皿などがあり、遺構は16世紀代のものであろう。

A11－３区ＳＫ－12

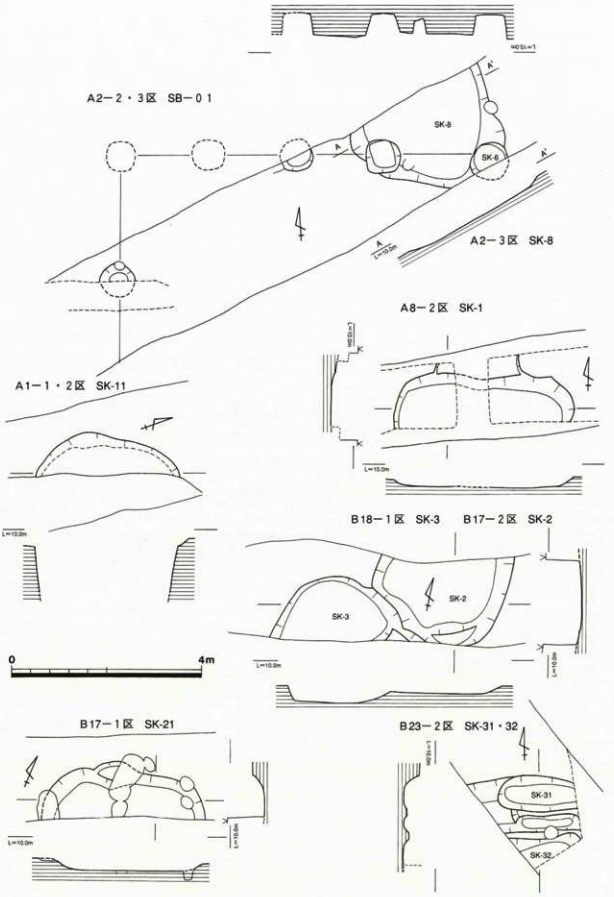
平面形は長方形で、規模は幅0.6ｍ×長さ0.5ｍ以上で、底面は広く平坦となり深さは24㎝程を測る。埋土は、炭混じりの暗灰色砂質土である。出土した遺物には陶器鉢・甕、磁器碗、土師器焼塩壷・鍋、瓦片、貝殻など(第16図179)があり、遺構は18世紀以降のものであろう。

A11－３区ＳＫ－16

平面形は楕円形と推測されるが、聯隊建物基礎などのためはっきりしない。規模は6.4ｍ×2.5ｍ以上で、側面は緩やかに傾斜し底面は広く平坦で深さは29㎝程を測る。埋土は、暗灰色砂質土や淡灰褐色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器片、陶器擂鉢、土師器くの字形鍋・半球形鍋・小皿など(第16図180～182)があり、遺構は16世紀後半のものであろう。

A12－３区ＳＫ－３

多量の瓦類が捨てられた廃棄土壙で、瓦片を取り上げていくと聯隊建物基礎を挟んで楕円形の土壙と方形の土壙がつながるようである。平面形ははっきりしないが、規模は長さ4.2ｍ以上、幅1.4ｍ以上で、底面はいずれも平坦で深さは楕円形の方が50㎝程、方形の方が80㎝程を測る。埋土は、灰色砂質土である。出土した遺物には多数の瓦類、陶器碗、磁器碗、鉄釘など(第17図197～205)があり、遺構は19世紀中葉のものであろう。



第9図　A区・B区遺構実測図（1／80）

2．遺物（第10～17図、第1表）

溝・堀

ＳＤ－０１（１～13・80～94・124・125）・**A1－１区ＳＫ－13**（17～19）

１～６は陶器である。１・２は天目茶碗で、口縁端部が小さく屈曲するもの（１）と大きく屈曲するもの（２）がある。２の高台は内反り高台となる。内外面は鉄釉で、高台付近は錆釉の化粧掛け（２）。３・４は丸皿で、いずれも高台部は削り込みで、全面に鉄釉。５・６は擂鉢で、体部は外反気味に立ち上がる。底部外面糸切りで、全面に錆釉。６は内面の摩耗が著しい。これらは大窯１～３。7～13は土師器である。７は鉢で、底部は平坦で口縁部は内弯気味に立ち上がる。口縁端部は小さく屈曲し、丸く収める。内外面ナデによる調整で、胎土は精良。８・９は小皿で、８は直線的に伸び、９は端部近くで立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。10は皿で、口縁端部は強いヨコナデによって面となる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。11～13は半球形鍋で、体部は内弯気味に伸び端部は平坦面となる。口縁端部ヨコナデ、内面ナデ・板ナデ、外面ナデ・指押さえ。いずれも外面に煤が付着。

17は陶器小天目で、口縁部は内弯気味に立ち上がる。内外面は鉄釉で、高台付近は錆釉の化粧掛け。大窯１。18・19は土師器小皿で、口縁部は小さく立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。

80～85は陶器である。80は小天目で、口縁端部を明瞭に屈曲させる。内外面は鉄釉で、高台付近は露胎。81は稜皿で、口縁端部は外反気味となる。全面に鉄釉。82は端反皿で、高台部は削り出し。内面に印花文。全面に灰釉。83は卸皿で、底部外面糸切り。内面に灰釉。84・85は擂鉢で、内外面に錆釉。84は横方向にも櫛目。80は登第５小期で混入、83は古瀬戸後Ⅰ・Ⅱ、これ以外は大窯３～４。86～90は土師器である。86・87は小皿で、底部は広く平坦で口縁部は緩やかに立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。88は茶釜形鍋で、口縁部は垂直気味に立ち上がり端部は平坦面となる。口縁端部から外面はナデ、内面ナデ・指押さえ。89・90は半球形鍋で、体部は内弯気味に立ち上がり端部は平坦面となる。口縁端部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえで、下半部はヘラケズリ。いずれも外面に煤が付着。91は陶器擂鉢の体部片を利用した加工円盤で、周囲を丸く削る。92～94は銭貨「永樂通寶」で、これ以外にもう１点出土している。天正15(1587)年頃の鋳造とされるものである。

124は土師器小皿で、底部は比較的平坦で口縁部は緩やかに立ち上がる。口縁端部は僅かに面となる。125は同半球形鍋で、体部は内弯気味に立ち上がり端部は広く内傾した面となる。

これらＳＤ－０１出土の遺物は、16世紀後半を主体としたものである（注２）。これら以外には陶器平碗・天目茶碗・擂鉢・瓶子・端反皿などの破片があり、いずれも古瀬戸～大窯３まで。

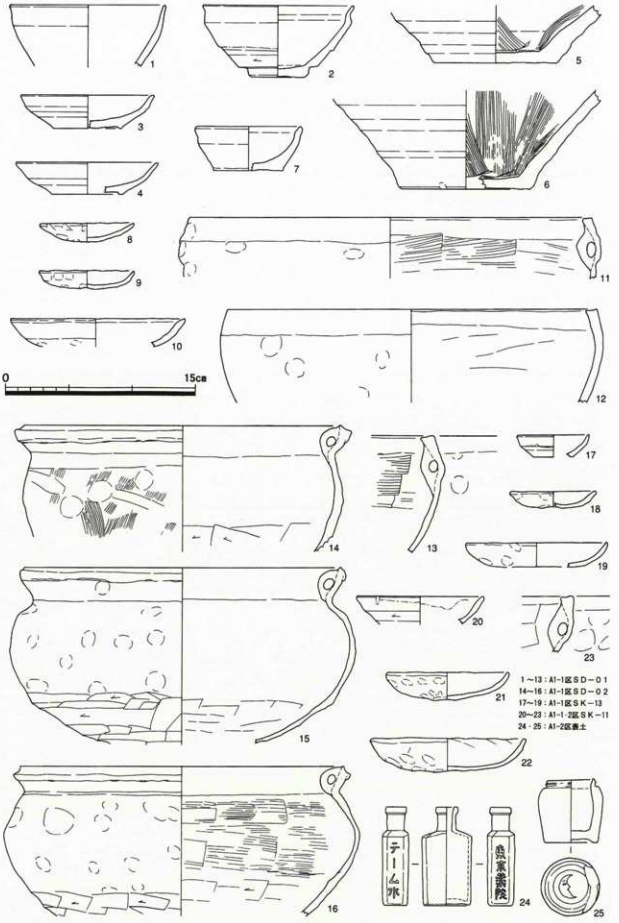
ＳＤ－０２（14～16）

14～16は土師器くの字形鍋である。体部はやや偏平で、頸部は比較的明瞭に屈曲する。口縁部は内弯気味で、端部は上に摘み上げるようになる。14は体部外面にハケメが見られる。これらは、16世紀前半のものであろう。これら以外に陶器天目茶碗片があり、古瀬戸後期。

ＳＤ－０４（161～165）

161は陶器小鉢で、口縁端部は大きく外反する。口縁部は回転ナデで、内外面に灰釉。古瀬戸後Ⅲ。

162～165は土師器である。162・163は皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。口縁部はヨコナデ、内面



第10図　A区出土遺物実測図－1（1／3）

ナデ、外面ナデ・指押さえ。163の口縁端部には油煙が付着し、灯明皿として使用されたのであろう。164はくの字形鍋で、頸部は屈曲し端部は摘み上げたようになる。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面はナデ・指押さえで煤が付着。165は半球形鍋で、口縁部は内弯気味に伸び端部は面となる。口縁端部ヨコナデ、内面板ナデ、外面ナデ・指押さえ。これらは、16世紀前半のものであろう。

ＳＤ－０５（166～170）

166～170は土師器である。166は皿で、口縁部は比較的高く立ち上がる。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。167・168は小皿で、口縁部は小さく立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。169・170はくの字形鍋で、頸部は屈曲し端部は摘み上げるようになる。口縁部ヨコナデ、内面板ナデ、外面はナデ・指押さえで、169にはハケメが施される。いずれも外面には煤が付着する。これらは、16世紀前半のものであろう。

ＳＤ－０５～０７（171・172）

171は土師器半球形鍋で、口縁部は内弯気味に立ち上がり端部は平坦面となる。最大径付近に、ヘラ描きの沈線が施される。口縁端部ヨコナデ、内面板ナデ、外面はナデ・指押さえで下半はヘラケズリ。172は土錘で、ナデ・指押さえによる成形。これらは、16世紀前半のものであろう。

ＳＤ－０８（66～68・77～79・95～98・106～109・174～178・206）

66は陶器天目茶碗と考えられ、高台部は削り出し。高台付近は露胎、これ以外は鉄釉。大窯３～４。67は土師器半球形鍋で、口縁端部は平坦面となる。口縁端部ヨコナデ、内面ナデ、外面はナデ・指押さえで煤が付着。68は軒丸瓦で、左巻の巴文はやや太く短く、珠文も大きく、いずれも低く偏平。

77・78は磁器染付皿で、77の高台は蛇の目高台となる。これらは、19世紀前半のものであろう。79は軒桟瓦の丸瓦部で、右巻の巴文となり、その裏側には「㋔」の刻印が見られる。

95は磁器染付丸皿で、口縁部は内弯気味に立ち上がり端部はやや肥厚して丸く収める。染付は型紙摺絵あるいは銅版転写によるものであろう。19世紀後半。96は陶器桶で、口縁端部は垂直気味に折れ広い平坦面となる。口縁部は回転ナデで、内外面に鉄釉。古瀬戸後Ⅳ。97は軒丸瓦で、右巻の巴文は細く長く、珠文は小さい。98は軒平瓦で、複線による唐草文が見られる。106は軒丸瓦で、右巻の巴文とやや大きな珠文が見られる。107は軒平瓦で、複線の唐草文となる。108は鯱瓦の鱗部で、径７㎜程の穴が２ヶ所に見られる。109は凝灰質砂岩製の上臼で、底部の擂り目はかなり摩耗している。

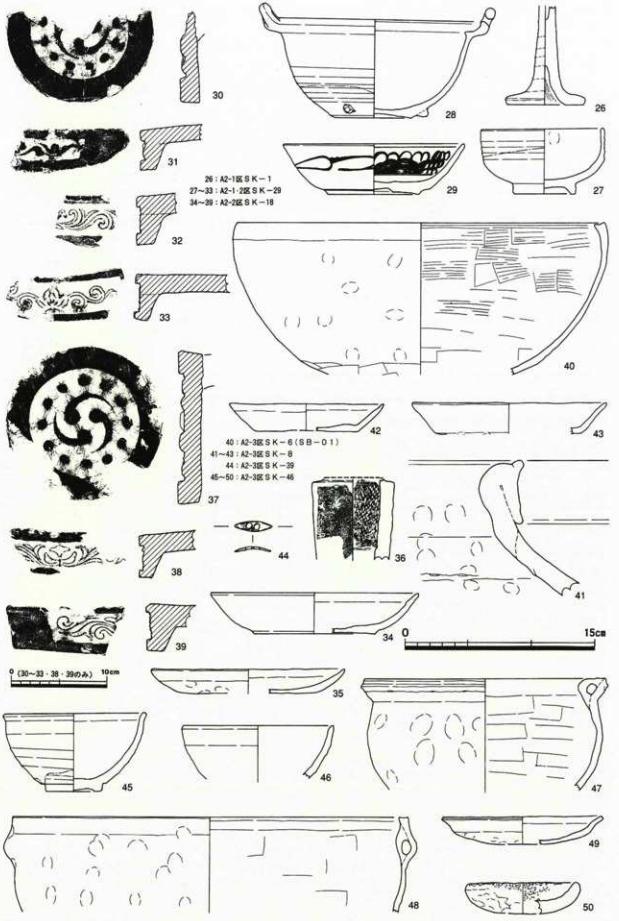
174は磁器染付大碗で、内外面には梅文や笹文の染付。19世紀前半のものであろう。175・176は軒丸瓦で、珠文は少し小さく、巴文は右巻で細く長い。177・178は軒平瓦で、瓦当の中心飾りは３葉で先に珠文で花文様を作る。両側には２反転した複線の唐草文が見られる。206は煉瓦で、平面を斜めに加工している。また、平面に「東洋組西尾士族就産所」の刻印。明治15～18年頃製造。

ＳＤ－０９（114・115）

114は常滑窯産甕で、外面はナデ・指押さえが顕著で底部外面は未調整。115は土師器小皿で、底部はあまり平坦ではない。側面には２ヶ所焼成後の穿孔。これらは、16世紀代のものであろう。

ＳＤ－１１（147・148）

147は土師器小皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。148は同半球形鍋で、体部は比較的丸く口縁端部は広い平坦面となる。口縁端部ヨコナデ、内面板ナデ、外面ナ



第11図　A区出土遺物実測図－2（1／3・1／4）

デ・指押さえで、下半部はヘラケズリ。外面には煤が付着。これらは、16 世紀前半のものであろう。

ＳＤ－１３（99～102）

99・100は中国製磁器である。99は染付端反皿で、器壁は薄く内底面に染付が見られる。16世紀中葉。100は白磁皿で、高台は抉り高台となる。15世紀前半。

101は土師器皿で、口縁部は直線的に立ち上がり端部には沈線が巡るようになる。口縁端部から内面はヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。102は同くの字形鍋で、頸部は大きく屈曲し端部は摘み上げたようになる。口縁部ヨコナデで、外面には煤が付着。これらは、16世紀後半のものであろう。

ＳＤ－１４（103）

103 は土師器焼塩壺蓋で、中央部が窪み、側面への変換点ははっきりせず丸くなる。内面に布目痕が残り、これ以外はナデ。18 世紀以降のものであろう。

ＳＤ－１５（183・184）

183は不明青銅製品で、平面は紡錘形で、断面は弓状となる。中央付近に径４㎜程の穴が２ヶ所開き、全面に金メッキが施されていたようである。184は銭貨で、渡来銭「淳祐元寶」（南宋）であるが、文字はかなり不鮮明となる。

ＳＤ－１６（185～192）

185 は陶器天目茶碗で、口縁部は内弯気味に伸び端部は僅かに屈曲する。内外面は鉄釉で、高台付近は錆釉の化粧掛け。古瀬戸後Ⅳ新。186 は同擂鉢で、口縁端部は上下に肥厚する。片口部は端部を上下に摘んでいる。内外面に錆釉。大窯２。

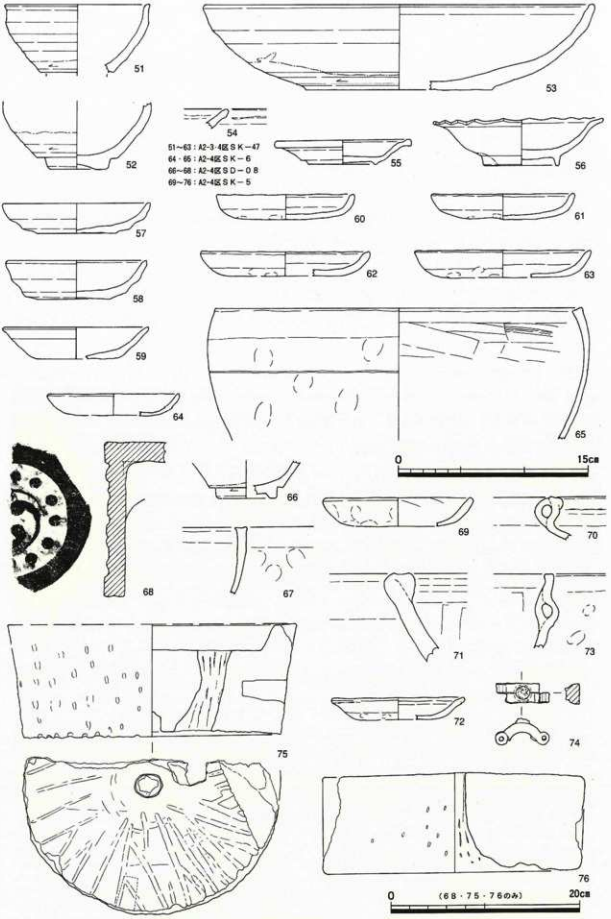
187～192は土師器である。187は小皿で、口縁部は比較的高く立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。188・189・192は皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。端部は強いヨコナデのため外反気味で、面をなすもの(189)もある。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。189・192の内面は黒灰色を呈する。190はくの字形鍋で、頸部は大きく屈曲し端部は摘み上げたようになる。口縁部ヨコナデ、内面板ナデ、外面ナデ。口縁部外面に煤が付着。191は半球形鍋で、口縁部は内弯気味に伸び端部は平坦面となる。体部外面には、ヘラ描きによる沈線が施される。口縁端部ヨコナデ、内面ナデ・板ナデ、外面ナデ・指押さえ。これらは、16世紀中葉のものであろう。

ＳＤ－１６－２（193）

193 は半球形鍋で、口縁部は内弯気味に伸び端部は広い平坦面となる。口縁端部ヨコナデ、内面板ナデ、外面ナデ・指押さえ。16 世紀後半のものであろう。

ＳＤ－１７（194～196）

194～196 は土師器である。194 は小皿で、口縁部は比較的高く立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。195 は皿で、口縁部は緩やかに立ち上がり端部は強いヨコナデのため外反気味となる。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。196 はくの字形鍋で、頸部の屈曲はやや緩やかとなる。口縁部は直立気味で、端部は丸く収める。口縁部ヨコナデ、内面板ナデ、外面はナデ・指押さえで煤が付着。これらは、16 世紀代のものであろう。これら以外に大窯１の皿片あり。



第12図　A区出土遺物実測図－3（1／3・1／4）

掘立柱建物

ＳＢ－０１　柱穴Ａ２－３区ＳＫ－６（40）

40は土師器半球形鍋で、体部は内弯気味に伸び端部は内傾した面となる。口縁端部ヨコナデ、内面板ナデ、外面ナデ･指押さえで、下半部はヘラケズリ。外面に煤が付着。16世紀後半のものであろう。

土壙

Ａ１－１・２区ＳＫ－11（20～23）

20は陶器緑釉小皿で、端部近くは外反気味となる。古瀬戸後Ⅳ古。21・22は土師器小皿で、口縁部は底部より緩やかに立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。21は、口縁端部の一部を打ち欠いているようだ。23は同半球形鍋で、口縁端部は平坦面となる。口縁端部ヨコナデ、内面板ナデ、外面はナデ・指押さえで煤が付着。20は15世紀中葉、これ以外は16世紀前半のものであろう。

Ａ２－１区ＳＫ－１（26）

26は陶器燭台で、脚部は「ハ」字状に開く。脚部外面糸切り、これ以外は回転ナデで、外面に鉄釉。登第９小。19世紀初頭のものであろう。

Ａ２－１・２区ＳＫ－29（27～33）

27は陶器腰錆茶碗で、高台部は削り出し。口縁部外面から内面は灰釉、これ以外は鉄釉が掛かる。登第９小。28は同鍋で、底部は平坦で三方に小さな脚が付く。口縁部は受口状で、二方に把手が付く。底部付近は煤が付着し、これ以外の内外面は柿釉。29は磁器染付丸皿で、蛇の目高台。登第９～10小。これらは、19世紀前半のものであろう。

30は軒丸瓦で、右巻きの巴文は太く短く、珠文は大きめである。31～33は軒平瓦で、31の唐草文は太くシャープさに欠く。32・33は複線による唐草文で、33の中心飾りは三弁の花を表現している。

Ａ２－２区ＳＫ－18（34～39）

34は土師器皿で、底部は平坦で口縁部は緩やかに立ち上がる。いわゆるロクロ成形で、底部外面は糸切り。35は同皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。36は同焼塩壺で、体部は筒状で口縁部には蓋受けのための段が付く。内面に布目痕、外面は丁寧なナデで判読不能な刻印がある。これらは、18世紀以降のものであろう。

37は軒丸瓦で、左巻きの巴文は太く短く、珠文は大きめである。38・39は軒平瓦で、唐草文は複線で、38の中心飾りは先の開いた花文様が表現されている。

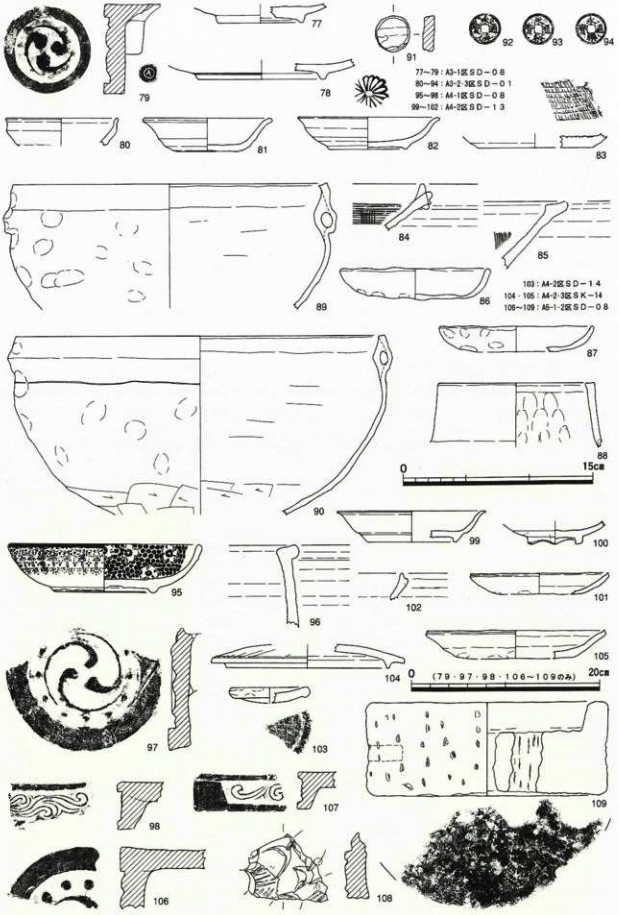
Ａ２－３区ＳＫ－８（41～43）

41は常滑窯産甕で、口縁端部は「Ｎ」字状に大きく折り返す。内面はナデ・指押さえ後、回転ナデ。42・43は土師器皿で、底部は平坦で口縁部は明確に立ち上がり直線的に伸びる。口縁部ヨコナデ、内外面ナデ。これらは、16世紀前半のものであろう。

Ａ２－３区ＳＫ－39（44）

44は不明青銅製品で、平面は紡錘形で、断面は弓状となる。中央付近に径５㎜程の穴が２ヶ所開き、全面に金メッキが施されていたようである。時期ははっきりしない。

Ａ２－３区ＳＫ－46（45～50）



第13図　A区出土遺物実測図－４（１／３・１／４）

45は陶器天目茶碗で、高台部は削り出し。口縁部は内弯気味で、端部は僅かに屈曲する。内外面は鉄釉で、高台付近は錆釉の化粧掛け。古瀬戸後Ⅳ新。46は丸碗で、内外面は灰釉が掛かる。大窯３。

47～49は土師器である。47は小型のくの字形鍋で、体部は丸味を帯び頸部は大きく屈曲する。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面はナデ・指押さえで煤が付着。48は半球形鍋で、口縁部は内弯気味に伸び端部は面となる。口縁端部ヨコナデ、内面ナデ・板ナデ、外面はナデ・指押さえで煤が付着。49は皿で、口縁部は強いヨコナデにより屈曲する。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。これら土師器は、16世紀後半のものであろう。50はとりべで、器壁の厚い小皿状で焼成は灰釉系陶器に近い。端部から内面は、被熱などで発泡・変色し、一部に銅滴が付く。他からの混入であろう。

A2－3・4区ＳＫ－47（51～63）

51～55は陶器である。51・52は天目茶碗で、口縁端部は緩やかに屈曲する(51)。高台は、内反り高台となる(52)。内外面は鉄釉で、高台付近はいずれも露胎。53は大皿で、底部は平坦で口縁部は緩やかに立ち上がる。初山窯。全面に鉄釉。54は縁釉小皿で、端部に灰釉が掛かる。二次焼成を受けている。55は折縁皿で、高台部は削り出し。全面に灰釉が掛かる。これらは、54が古瀬戸後Ⅳ新、これ以外は大窯３～４。56は白磁稜花皿で、口縁部は外反して端部は波状に切ってある。中国製磁器。

57～63は土師器皿である。57～59はいわゆるロクロ成形で、底部外面は糸切り。58の口縁端部には油煙が付着。60～63は、底部が広く平坦で口縁部は屈曲して立ち上がる。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。これらは、16世紀後半のものであろう。

A2－4区ＳＫ－6（64・65）

64は土師器小皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。65は同半球形鍋で、口縁部は内弯気味に立ち上がり端部は内傾した面となる。最大径付近には、ヘラ描きによる沈線が巡る。口縁端部ヨコナデ、内面ナデ・板ナデ、外面はナデ・指押さえで煤が付着。これらは、16世紀代のものであろう。

A2－4区ＳＫ－5（69～76）

69は土師器小皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。内面ナデ・板ナデ、外面ナデ・指押さえ。70は同くの字形鍋で、頸部は大きく屈曲し端部近くは肥厚する。外面に煤が付着。

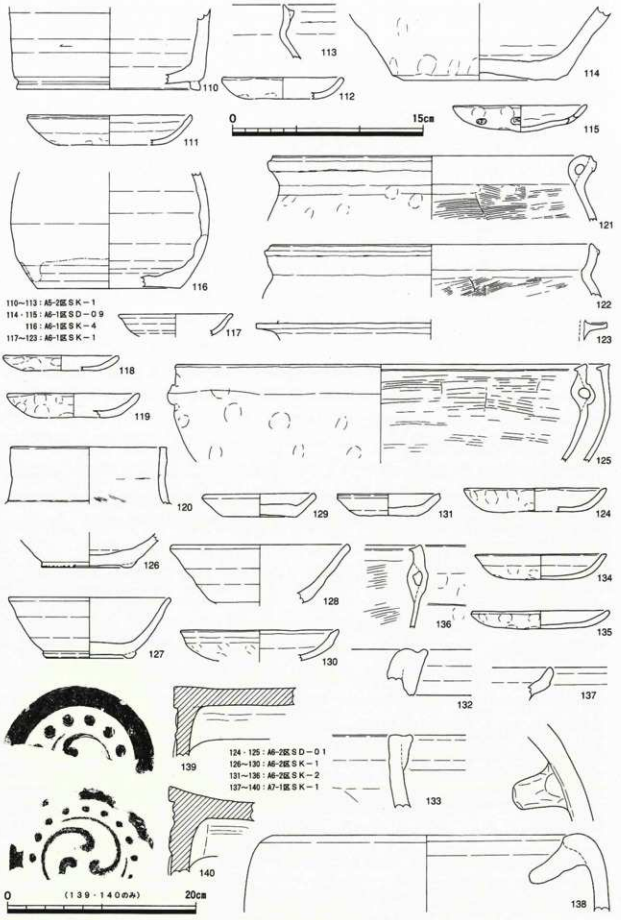
71は常滑窯産甕で、口縁部は内傾気味に伸び端部は丸味を帯びて折り返す。72は土師器皿で、口縁端部は僅かに外反する。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。73は同半球形鍋で、口縁端部は平坦面となる。口縁端部ヨコナデ、内面ナデ・板ナデ、外面はナデ・指押さえで煤が付着。74は青銅製の金具で、蝶番状のものとなろう。75は上臼、76は下臼で、本来はセットになっていたのであろう。石質は凝灰質砂岩で、被熱している。これらは、16世紀前半のものであろう。

A4－2・3区ＳＫ－14（104・105）

104は土師器蓋で、口縁端部のやや内側には断面三角形の返りが付く。いわゆるロクロ成形で、天井部外面はヘラケズリ後ナデ。端部内面には煤が付着。105は同皿で、口縁部は強いヨコナデにより屈曲する。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。16世紀代のものであろう。

A5－2区ＳＫ－1（110～113）

110は須恵器壺と考えられ、底部は平坦で体部は垂直気味に立ち上がる。高台は、断面方形のしっ



第14図　A区出土遺物実測図－5（1／3・1／4）

かりしたものが付く。体部外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデで底部付近に自然釉。９～10世紀のもので混入であろう。111～113は土師器である。111は皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。112は小皿で、口縁部は比較的高く立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。113はくの字形鍋で、頸部の屈曲はやや弱く端部は摘み上げたようになる。口縁部ヨコナデ、これ以外は摩滅のためはっきりしない。これら土師器は、16世紀代のものであろう。

A6－１区ＳＫ－４（116）

116は陶器水注で、底部は平坦で体部はやや丸味を持つ。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。底部外面近くは錆釉、これ以外は鉄釉。古瀬戸後Ⅳ新。15世紀後半のものであろう。

A6－１区ＳＫ－１（117～123）

117は陶器端反皿で、回転ナデによる調整。内外面に灰釉。大窯１。

118～123は土師器である。118・119は小皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。120・123は茶釜形鍋で、口縁部(120)は垂直気味に立ち上がり端部は面となる。ヨコナデによる調整。鍔部(123)は短く水平に伸び、端部は面となる。ヨコナデによる調整で、下半部には煤が付着。121･122はくの字形鍋で、頸部は屈曲し端部は摘み上げたようになる。口縁部ヨコナデ、内面板ナデ、外面ナデ・指押さえ。これら土師器は、16世紀前半のものであろう。

A6－２区ＳＫ－１（126～130）

126～128は灰釉系陶器碗で、底部は平坦で口縁部は直線的に外上方へ伸びる。高台は、低く不整形となる。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。129は同小皿で、底部は広く平坦で口縁部は明確に立ち上がる。底部外面糸切り後ナデ、これ以外は回転ナデ。これらは、13世紀後半のものであろう。

130は土師器皿で、口縁部は緩やかに立ち上がり端部は内傾した面となる。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。126～129に伴う時期のものであろう。

A6－２区ＳＫ－２（131～136）

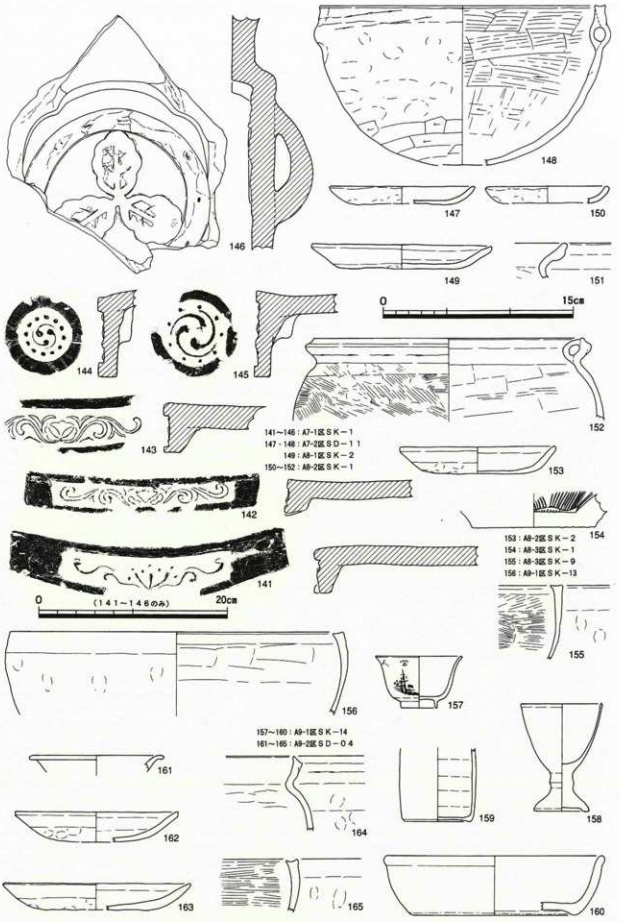
131は灰釉系陶器小皿で、底部は平坦で口縁部は明確に立ち上がる。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。A6－２区ＳＫ－１から混入した可能性が高い。

132・133は常滑窯産甕で、口縁端部は「N」字状に大きく折り返すもの(132)や低く単純に折り返すもの(133)がある。これらは、16世紀前半のものであろう。134～136は土師器である。134は皿で、口縁部は緩やかに立ち上がり端部は面となる。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。135は小皿で、口縁部は僅かに立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。136は半球形鍋で、口縁端部は内傾した面となり体部外面にはヘラ描きの沈線が巡る。口縁端部ヨコナデ、内面ナデ・板ナデ、外面はナデ・指押さえで煤が付着。これらは、132・133に伴う時期のものであろう。

A7－１区ＳＫ－１（137～146）

137は陶器擂鉢で、口縁端部は緩やかに屈曲する。回転ナデによる調整で、内外面は錆釉。大窯２。128は同暖炉で、端部近くには舌状の受けが付くが、口縁端部にかけてはかなり摩耗している。無釉で素焼きに近い。19世紀代のものであろう。

139・140は軒丸瓦で、139は珠文が大きい左巻き巴文。140は珠文は小さく、巴文は右巻で細く長



第15図　A区出土遺物実測図－６（１／３・１／４）

い。141は軒桟瓦で、丸瓦部はなく両側に板状のものが付く。瓦当は、中心飾りと唐草文が単線で示される。142・143は軒平瓦で、いずれも中心飾りは先の開いた花文様で、両側に２反転した複線の唐草文が見られるが、142は一部単線の表現となる。144・145は軒桟瓦の丸瓦部で、144は大きめの珠文と左巻きの巴文、145は数の少ない珠文と右巻で細く長い巴文。146は鬼瓦と考えられ、裏面には把手状のものが付く。瓦当には丸に三葉の文様が表現されているが、意識的に文様を削っているようである。

Ａ８－１区ＳＫ－２（149）

149は土師器皿で、底部は広く平坦となる。口縁部は強いヨコナデで外反気味となり、端部は僅かに面となる。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。16世紀代のものであろう。

Ａ８－２区ＳＫ－１（150～152）

150は土師器小皿で、口縁部は小さく立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。端部には油煙が付着し、灯明皿として使用されたのであろう。151・152は同くの字形鍋で、頸部は大きく屈曲し端部は摘み上げたようになる。口縁部ヨコナデ、内面板ナデ、外面指押さえ・ハケメ。いずれも外面には煤が付着。これらは、16世紀前半のものであろう。

Ａ８－２区ＳＫ－２（153）

153は土師器皿で、底部は広く平坦となり口縁部は緩やかに立ち上がる。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。16世紀代のものであろう。

Ａ８－３区ＳＫ－１（154）・Ａ８－３区ＳＫ－９（155）

154は陶器擂鉢で、底部は平坦で糸切り未調整。内外面に錆釉。大窯２。155は土師器半球形鍋で、端部は広い平坦面となる。口縁端部ヨコナデ、内面板ナデ、外面はナデ・指押さえで煤が付着。これらは、16世紀中葉のものであろう。

Ａ９－１区ＳＫ－13（156）

156は土師器半球形鍋で、口縁部は内弯気味に伸び端部は内傾した面となる。口縁端部ヨコナデ、内面板ナデ、外面はナデ・指押さえで煤が付着。16世紀代のものであろう。

Ａ９－１区ＳＫ－14（157～160）

157～160は白磁である。157は碗で、外面は淡緑色の釉が掛かり、梅樹文などの絵が描かれる。158は坏、159は壺であろうか。160は皿で、端部は玉縁状となる。聯隊に関連した明治期のものであろう。

Ａ９－２区ＳＫ－１（173）

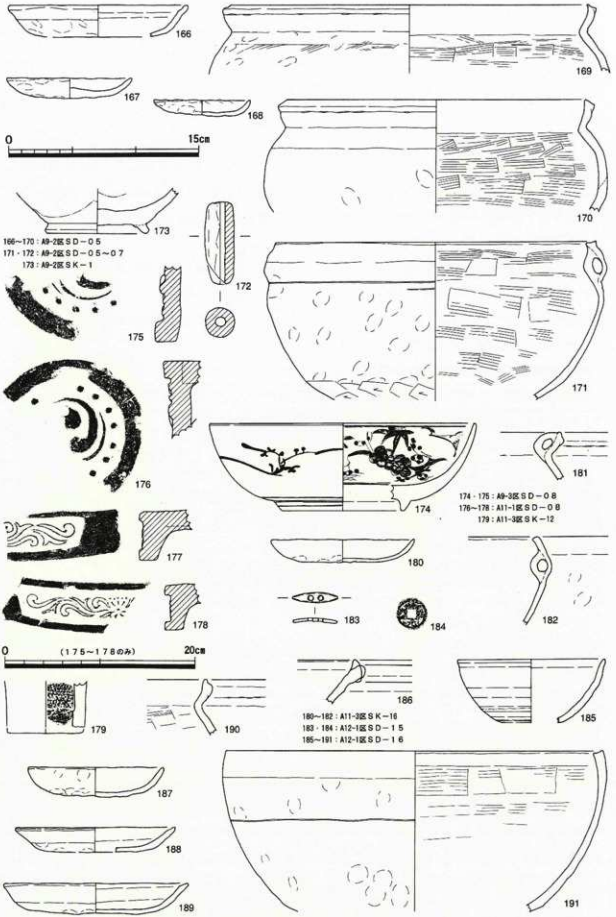
173は灰釉系陶器碗で、高台は高くしっかりしている。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。口縁部に灰釉が漬け掛けされる。12世紀中葉のものであろう。

Ａ11－３区ＳＫ－12（179）

179は土師器焼塩壺で、体部は筒状となる。内面には布目痕が残る。外面は丁寧なナデで、刻印は見られない。18世紀以降のものであろう。

Ａ11－３区ＳＫ－16（180～182）

180～182は土師器である。180は小皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指



第16図　A区出土遺物実測図－７（１／３・１／４）

押さえ。181はくの字形鍋で、頸部は屈曲し端部は丸く収める。口縁部ヨコナデ、これ以外は摩滅のためはっきりしない。182は半球形鍋で、口縁部は内弯気味に伸び端部は面となる。調整は摩滅のためはっきりしないが、外面には煤が付着。これらは、16世紀後半のものであろう。

A12－３区ＳＫ－３（197～205）

197は陶器広東碗で、高台部は比較的高く削り出す。内外面に染付。登第10小。198は同丸碗で、内外面に灰釉。199は磁器端反碗で、内外面に草花文などの染付。登第11小。19世紀中葉のものであろう。

200・202は軒平瓦、201は軒桟瓦で丸瓦部ではなく板状のものが付く。瓦当の中心飾りは、先の開いた花文様となるもの(200)、３葉で先に花文様を付けるもの(201)、細長い５葉と珠文からなるもの(202)があり、両側は複線の２反転した唐草文(200・201)や単線による雲状の表現(202)となる。203～205は軒丸瓦で、珠文は小さく巴文が細く長いもの(203)、珠文は大きく巴文が太く短いもの(204)、またそれぞれの中間的なもの(205)が見られる。

表土地

A1－２区表土（24・25）

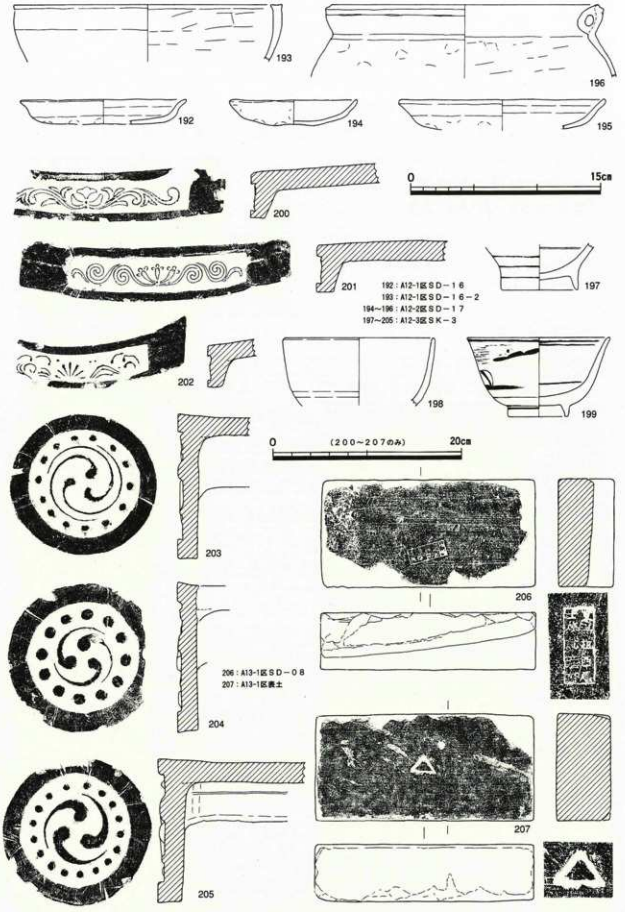
24はガラス製小瓶で、側面に「東京薬院」「テーム水」とある。25は白磁小瓶で、底部外面に「花王」のマークがある。大正14年～昭和10年代のものであろう。

A13－１区表土（207）

207は煉瓦で、両側の平面にいずれも「△」の刻印。聯隊建物の基礎に使用されたものであろう。

注１　豊橋市教育委員会他　1994『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第21集　吉田城址(Ⅰ)』
この石垣は、９次調査区（市役所東庁舎）のＳＤ１の石垣（上場標高4.5ｍ程）につながると考えられる。
但し、ＳＤ－０８とＳＤ１で検出された石垣の上場の高低差は４ｍ程と大きい。

注２　出土遺物の編年的な位置付けについては、次の文献を主に参考にしている。
瀬戸市教育委員会　1990『尾呂』
藤澤良祐　2005「施釉陶器生産技術の伝播」『全国シンポジウム　中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』
中野晴久　2005「常滑・渥美窯」『陶磁器から見る静岡県の中世社会』菊川シンポジウム実行委員会
鈴木正貴　1996「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
菊川町教育委員会　1999『横地城跡　総合調査報告書』
水野信太郎　2001「国内煉瓦刻印集成」『産業遺産研究』第８号　中部産業遺産研究会
豊橋市教育委員会他　1994『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第21集　吉田城址(Ⅰ)』



第17図　A区出土遺物実測図－8（1／3・1／4）

第1表　A区出土遺物観察表

[illegible]～[illegible]	地区	遺構	器種	分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等	備考
10－1	A1-1	SD－01	T	天目茶碗	12,1	(4,8)			密	良好	灰褐色	口縁部回転ナデ	内外面に鉄釉／大窯1
2	A1-1	SD－01	T	天目茶碗	11,7	5,7	4,3		密	良好	淡乳褐色	高台部削り出し	内外面に鉄釉／大窯3後
3	A1-1	SD－01	T	丸皿	10,2	2,7	5,2		密	良好	淡乳褐色	体部外面下半回転ヘラケズリ	全面に鉄釉／大窯3前
4	A1-1	SD－01	T	丸皿	11,0	2,5	5,6		密	良好	淡乳褐色	体部外面下半回転ヘラケズリ	全面に鉄釉／大窯2
5	A1-1	SD－01	T	擂鉢		(4,5)	9,6		密	良好	淡褐色	底部外面糸切り	内外面に鉄釉／古瀬戸後Ⅱ期～大窯1
6	A1-1	SD－01	T	擂鉢		(7,8)	10,0		密	良好	淡褐色	底部外面糸切り	内外面に鉄釉／大窯3
7	A1-1	SD－01	H	鉢	8,0	3,4	5,4		精良	良好	淡褐色	口縁部回転ナデ	
8	A1-1	SD－01	H	小皿	7,3	1,5			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
9	A1-1	SD－01	H	小皿	7,4	1,4			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
10	A1-1	SD－01	H	皿	13,6	(2,2)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
11	A1-1	SD－01	H	鍋	31,6	(4,8)			密	良好	茶褐色	体部内面板ナデ	
12	A1-1	SD－01	H	鍋	28,8	(7,3)			密	良好	淡灰褐色	体部内面ナデ	外面に煤付着
13	A1-1	SD－01	H	鍋		(9,2)			密	良好	淡褐色	体部内面板ナデ	外面に煤付着
14	A1-1	SD－02	H	鍋	24,8	(9,8)			密	良好	淡乳褐色	体部内面下半ヘラケズリ	外面に煤付着
15	A1-1	SD－02	H	鍋	24,8	(13,8)	最大径27,1		密	良好	淡褐色	体部外面下半ヘラケズリ	外面に煤付着
16	A1-1	SD－02	H	鍋	25,2	(11,8)	最大径27,9		密	良好	淡赤褐色	体部内面下半ヘラケズリ	外面に煤付着
17	A1-1	SK-D3B-01	T	小天目	5,6	(1,7)			密	良好	淡乳褐色	体部外面下半回転ヘラケズリ	内外面に鉄釉／大窯1
18	A1-1	SK-D3B-01	H	小皿	6,6	1,3			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
19	A1-1	SK-D3B-01	H	小皿	11,0	(1,9)			やや粗雑	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
20	A1-1-2	SK－11	T	縁釉小皿	9,8	(2,2)			密	良好	淡灰褐色	体部外面下半回転ヘラケズリ	口縁端部に灰釉／古瀬戸後Ⅳ古
21	A1-1-2	SK－11	H	小皿	9,5	2,2			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	口縁端部打ち欠き?
22	A1-1-2	SK－11	H	小皿	11,9	2,6			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
23	A1-1-2	SK－11	H	鍋		(4,4)			やや粗雑	良好	淡褐色	口縁端部ヨコナデ	外面に煤付着
24	A1-2	表土		小瓶	1,5	7,8	幅3,8					ガラス製	側面に「東京薬院」「チーム水」
25	A1-2	表土	Z	小瓶	3,6	5,0	4,0		密	良好	白色		底部外面に「花王」マーク
11－26	A2-1	SK－1	T	燭台		(7,8)	6,0		密	良好	淡灰白色	底部外面糸切り	外面に鉄釉／登9小
27	A2-1-2	SK－29	T	鐵絡茶碗	9,5	5,1	4,8		密	良好	淡乳褐色	高台部削り出し	灰釉＋鉄釉／登9小
28	A2-1-2	SK－29	T	鍋	17,6	6,0	7,7		密	良好	淡乳褐色	体部外面下半回転ヘラケズリ	内外面に鉄釉＋絵釉鍋
29	A2-1-2	SK－29	Z	丸皿	14,0	7,0	4,0		密	良好	淡灰白色	底部外面回転ヘラケズリ	染付丸皿／登9・10小
30	A2-1-2	SK－29	N	軒丸瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
31	A2-1-2	SK－29	N	軒平瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
32	A2-1-2	SK－29	N	軒平瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
33	A2-1-2	SK－29	N	軒平瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
34	A2-2	SK－18	H	皿	16,2	3,2	9,6		密	良好	赤褐色	底部外面糸切り	
35	A2-2	SK－18	H	皿	15,2	(1,9)		最大径6,4	密	良好	淡乳褐色	口縁部ヨコナデ	
36	A2-2	SK－18	H	焼塩壺		(6,3)			密	良好	淡褐色	内面に布目痕	外面に刻印
37	A2-2	SK－18	N	軒丸瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
38	A2-2	SK－18	N	軒平瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
39	A2-2	SK－18	N	軒平瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
40	A2-3	SK-6BB-01	H	鍋	28,8	(11,9)			密	良好	淡褐色	体部外面下半ヘラケズリ	外面に煤付着
41	A2-3	SK－8	T	瓶		(10,7)			やや粗雑	良好	暗褐色	口縁部回転ナデ	常滑窯産
42	A2-3	SK－8	H	皿	12,0	2,1	8,0		密・精良	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
43	A2-3	SK－8	H	皿	15,2	(2,4)	11,4		密	良好	淡褐色	内外面摩滅著しい	
44	A2-3	SK－39	1	不明	縦3,0	幅0,75						青銅製一金メッキ	
45	A2-3	SK－46	T	天目茶碗	10,9	6,2	4,2		密	良好	淡赤褐色	体部外面下半回転ヘラケズリ	内外面に鉄釉／古瀬戸後Ⅳ新
46	A2-3	SK－46	T	丸皿	11,8	(4,2)			密	良好	淡褐色	口縁部回転ナデ	内外面に灰釉／大窯3
47	A2-3	SK－46	H	鍋	18,8	(8,7)			密	良好	淡褐色	体部内面板ナデ	外面に煤付着
48	A2-3	SK－46	H	鍋	31,0	(7,6)			密	良好	淡褐色	口縁端部ヨコナデ	外面に煤付着
49	A2-3	SK－46	H	皿	12,4	(2,2)			やや粗雑	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
50	A2-3	SK－46	D	とべり	8,4	(2,4)			粗雑	良好	淡灰色	ナデ・指押さえによる整形	内面黒鉄色、銅鏡付着
12－51	A2-3-4	SK－47	T	天目茶碗	11,4	(5,3)			密	良好	淡乳褐色	体部外面下半回転ヘラケズリ	内外面に鉄釉／大窯4前
52	A2-3-4	SK－47	T	天目茶碗		(5,3)	4,3		密	良好	淡乳褐色	高台部削り出し	内外面に鉄釉／大窯4前
53	A2-3-4	SK－47	T	大皿	30,4	6,7	14,8		密	良好	灰色	体部外面下半ヘラケズリ	全面に鉄釉／大窯3前～物山窯
54	A2-3-4	SK－47	T	縁釉小皿		(1,5)			密	良好	淡乳褐色	口縁部回転ナデ	口縁端部に灰釉／古瀬戸後Ⅳ新
55	A2-3-4	SK－47	T	折縁皿	10,3	1,9	5,3		密	良好	淡乳褐色	高台部削り出し	全面に灰釉／大窯4後
56	A2-3-4	SK－47	Z	桃花瓶	13,8	3,7	5,9		やや良好	良好	淡褐色	高台部削り出し	白磁、焼成甘い
57	A2-3-4	SK－47	H	皿	11,4	2,3	6,2		やや不良	良好	淡褐色	底部外面糸切り	
58	A2-3-4	SK－47	H	皿	11,0	2,9	5,6		密	良好	暗灰色	底部外面糸切り	口縁端部に油煙付着
59	A2-3-4	SK－47	H	皿	11,3	2,5	6,4		密	良好	暗茶灰色	底部外面糸切り	
60	A2-3-4	SK－47	H	皿	10,6	1,7			密	やや不良	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
61	A2-3-4	SK－47	H	皿	11,0	2,0			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
62	A2-3-4	SK－47	H	皿	13,2	1,9			密	やや不良	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
63	A2-3-4	SK－47	H	皿	13,6	2,1			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
64	A2-4	SK－6	H	小皿	10,4	(1,6)			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
65	A2-4	SK－6	H	鍋	28,7	(10,4)			密	良好	淡褐色	体部内面ナデ・板ナデ	外面に煤付着
66	A2-4	SD－08	T	天目茶碗		(2,8)	4,1		密	良好	淡褐色	高台部削り出し	内外面に鉄釉／大窯3・4
67	A2-4	SD－08	H	鍋		(5,3)			密	良好	淡褐色	口縁端部ヨコナデ	外面に煤付着
68	A2-4	SD－08	N	軒丸瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
69	A2-4	SK－5	H	小皿	11,4	(2,2)			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
70	A2-4	SK－5	H	鍋		(3,4)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	外面に煤付着

SB№—遺物№	地区	遺構	器種	分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等	備考
12—71	A2-4	SK—5	T	甕		(7.0)			密	良好	暗赤褐色	口縁部回転ナデ	常滑窯産
72	A2-4	SK—5	H	皿	10.3	1.7			密	良好	淡褐色	口縁部ココナデ	
73	A2-4	SK—5	H	鍋		(5.8)			密	良好	淡茶褐色	口縁端部ココナデ	外面に煤付着
74	A2-4	SK—5	I	金具	長4.2	幅1.5		重量36.2g				青銅製	蝶番状
75	A2-4	SK—5	R	上臼	27.0	(11.5)		重量6.5kg					石質—凝灰質砂岩
76	A2-4	SK—5	R	下臼		10.6		重量11.0kg					石質—凝灰質砂岩
13—77	A3-1	SD—08	Z	皿		(1.4)	8.6		細密	良好	淡灰白色	高台部削り出し	染付皿
78	A3-1	SD—08	Z	皿		(1.5)	10.0		細密	良好	淡灰白色	高台部削り出し	染付皿
79	A3-1	SD—08	N	軒桟瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	内側に刻印あり
80	A3-3	SD—01	T	小天目	8.6	(2.2)			密	良好	淡灰褐色	口縁部回転ナデ	内外面に鉄釉／登5小
81	A3-3	SD—01	T	稜鉢	10.2	2.6	4.7		密	良好	淡黄白色	体部外面下半回転ヘラケズリ	全面に鉄釉、印花文／大窯2
82	A3-3	SD—01	T	瀬戸皿	11.0	2.5	6.0		密	良好	淡灰色	体部外面下半回転ヘラケズリ	全面に灰釉／大窯4
83	A3-3	SD—01	T	卸皿		(1.1)	9.0		密	良好	淡黄褐色	底部外面糸切り	内外面に薄く灰釉／古瀬戸後Ⅰ-Ⅱ
84	A3-3	SD—01	T	擂鉢		(3.7)			密	良好	淡褐色	横方向にも擂目	内外面に鉄釉／大窯3前
85	A3-3	SD—01	T	擂鉢		(5.3)			密	良好	淡孔褐色	口縁部回転ナデ	内外面に鉄釉／大窯3前
86	A3-3	SD—01	H	小皿	11.5	2.4			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
87	A3-3	SD—01	H	小皿	12.0	(2.0)			密	良好	淡赤褐色	外面ナデ・指押さえ	
88	A3-3	SD—01	H	鍋	12.3	(5.1)			密	良好	淡褐色	口縁部内面ナデ・指押さえ	茶釜形
89	A3-3	SD—01	H	鍋	24.6	(9.8)			密	良好	淡茶褐色	体部内面ナデ	外面に煤付着
90	A3-2	SD—01	H	鍋	28.9	(14.0)			密	良好	淡茶褐色	体部内面下半ヘラケズリ	外面に煤付着
91	A3-3	SD—01	T	加工円盤	径2.7	厚0.8—0.5			密	良好	淡孔褐色	断面を残って整形	陶器擂鉢片を転用
92	A3-2	SD—01	I	銭貨	径2.5			重量4.4g					永楽通寶
93	A3-2	SD—01	I	銭貨	径2.5			重量3.2g					永楽通寶
94	A3-2	SD—01	I	銭貨	径2.45			重量3.0g					永楽通寶
95	A4-1	SD—08	Z	丸皿	14.7	3.8	8.1		密	良好	淡灰白色	高台部削り出し	染付丸皿
96	A4-1	SD—08	T	桶		(6.5)			密	良好	淡灰褐色	口縁部回転ナデ	内外面に鉄釉／古瀬戸後Ⅳ
97	A4-1	SD—08	N	軒丸瓦					やや粗雑	良好	淡灰色	内面ナデ調整	外面に煤付着
98	A4-1	SD—08	N	軒平瓦					やや粗雑	良好	灰色	内面ナデ調整	
99	A4-2	SD—13	Z	瀬戸皿	11.6	2.4	7.0		密	良好	淡灰白色	高台部削り出し	中国陶磁、内底面に染付
100	A4-2	SD—13	Z	皿		(1.8)	4.3		密	良好	白色	挽り高台	中国陶磁、
101	A4-2	SD—13	H	皿	10.8	(1.7)			密	良好	淡褐色	口縁部ココナデ	
102	A4-2	SD—13	H	鍋		(2.1)			密	良好	淡褐色	口縁部ココナデ	外面に煤付着
103	A4-2	SD—14	H	焼塩壺蓋	5.1	(1.3)		最大径6.4	密	良好	淡褐色	内面に布目痕	
104	A4-2-3	SK—14	H	蓋	12.8	(1.8)		最大径15.2	密	良好	淡褐色	天井部外面回転ヘラケズリ後ナデ	口縁端部に油煙付着
105	A4-2-3	SK—14	H	皿	14.0	(2.2)			密	良好	淡灰褐色	口縁部ココナデ	
106	A5-1	SD—08	N	軒丸瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
107	A5-1	SD—08	N	軒平瓦					密	良好	暗灰色	内面ナデ調整	
108	A5-2	SD—08	N	鬼瓦	縦(6.8)	横(7.5)			密	良好	淡灰色	ヘラによる隅の整形	
109	A5-2	SD—08	R	上臼	径25.4	9.8		重量2.5kg					石質—凝灰質砂岩
14—110	A5-2	SK—1	S	壺		(6.4)	14.4		密	良好	淡灰色	体部外面回転ヘラケズリ	
111	A5-2	SK—1	H	皿	12.8	(2.3)			密	良好	淡孔褐色	口縁部ココナデ	
112	A5-2	SK—1	H	小皿	9.2	(1.7)			密	良好	淡赤褐色	外面ナデ・指押さえ	
113	A5-2	SK—1	H	鍋		(4.4)			密	良好	淡孔褐色	口縁部ココナデ	
114	A6-1	SD—09	T	甕		(5.7)	13.8		密	良好	淡赤褐色	体部内面ココナデ	常滑窯産
115	A6-1	SD—09	H	小皿	10.6	2.2			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	穿孔2ヵ所あり
116	A6-1	SK—4	T	水注		(9.1)	11.2		密	良好	淡褐色	体部外面下半回転ヘラケズリ	外面に鉄釉／古瀬戸後Ⅳ新
117	A6-1	SK—1	T	瀬戸皿	8.8	(1.7)			密	良好	淡灰白色	口縁部回転ナデ	内外面に灰釉／大窯1
118	A6-1	SK—1	H	小皿	8.8	1.2			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
119	A6-1	SK—1	H	小皿	10.2	(1.9)			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
120	A6-1	SK—1	H	鍋	12.2	(4.5)			密	良好	淡赤褐色	口縁部ココナデ	茶釜形
121	A6-1	SK—1	H	鍋	25.0	(5.1)			密	良好	淡孔褐色	体部内面板ナデ	
122	A6-1	SK—1	H	鍋	25.0	(4.2)			密	良好	淡孔褐色	体部内面板ナデ	外面に煤付着
123	A6-1	SK—1	H	鍋		(1.5)		最大径27.6	密	良好	淡褐色	鍔部ココナデ	茶釜形鍋の鍔部
124	A6-2	SD—01	H	小皿	11.2	1.8			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
125	A6-2	SD—01	H	鍋	32.2	(7.7)			密	良好	淡褐色	体部内面板ナデ	外面に煤付着
126	A6-2	SK—1	P	碗		(2.7)			密	良好	淡灰色	底部外面糸切り後ナデ	高台部に胡粉痕
127	A6-2	SK—1	P	碗	12.8	4.8	7.1		密	良好	淡灰色	底部外面糸切り後ナデ	
128	A6-2	SK—1	P	碗	13.8	(4.6)	6.7		密	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ	
129	A6-2	SK—1	P	小皿	8.5	1.8			密	良好	淡灰色	底部外面糸切り後ナデ	
130	A6-2	SK—1	H	皿	12.2	(2.4)	5.7		やや粗雑	良好	淡赤褐色	口縁部ココナデ	
131	A6-2	SK—2	P	小皿	8.1	1.7			やや粗雑	良好	淡灰色	底部外面糸切り	
132	A6-2	SK—2	T	甕		(3.6)	4.8		密	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ	常滑窯産
133	A6-2	SK—2	T	甕		(5.7)			密	良好	暗灰色	口縁部回転ナデ	常滑窯産
134	A6-2	SK—2	H	皿	10.2	2.0			密	良好	淡褐色	口縁部ココナデ	
135	A6-2	SK—2	H	小皿	10.8	1.4			密	良好	赤褐色	外面ナデ・指押さえ	
136	A6-2	SK—2	H	鍋		(6.5)			密	良好	淡褐色	口縁端部ココナデ	外面に煤付着
137	A7-1	SK—1	T	擂鉢		(2.7)			密	良好	淡孔褐色	口縁部回転ナデ	内外面に鉄釉／大窯2
138	A7-1	SK—1	T	壺か	24.2	(6.1)			密	良好	淡褐色	口縁部回転ナデ	頸部は厚感著しい
139	A7-1	SK—1	N	軒丸瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
140	A7-1	SK—1	N	軒丸瓦					密	良好	暗灰色	内面ナデ調整	

10%～20%…	地区	遺構	器種	分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等	備考
15-141	A7-1	SK-1	N	軒桟瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
142	A7-1	SK-1	N	軒平瓦					密	良好	灰色	内面ナデ調整	
143	A7-1	SK-1	N	軒平瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
144	A7-1	SK-1	N	軒桟瓦					密・	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
145	A7-1	SK-1	N	軒桟瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
146	A7-1	SK-1	N	鬼瓦	縦(27.2) 横(23.1)				密	良好	淡灰色	裏面に幅5㎝程の把手が付く	家紋?
147	A7-2	SD-11	H	小皿	11.4	1.4			密	やや不良	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
148	A7-2	SD-11	H	鍋	22.4	(12.5)			密	良好	淡赤褐色	体部外面下手ヘラケズリ	体部外面に煤付着
149	A8-1	SK-2	H	皿	14.1	1.9			密	やや不良	淡乳褐色	口縁部ヨコナデ	
150	A8-2	SK-1	H	小皿	9.2	(1.3)			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
151	A8-2	SK-1	H	鍋		(2.7)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	外面に煤付着
152	A8-2	SK-1	H	鍋	20.9	(6.5)			密	良好	淡褐色	体部内面板ナデ	外面に煤付着
153	A8-2	SK-2	H	皿	12.2	2.1			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
154	A8-3	SK-1	T	擂鉢		(2.6)	9.8		密	良好	淡褐色	底部外面糸切り後未調整	内外面に鉄釉／大窯2
155	A8-3	SK-9	H	鍋		(5.9)			密	良好	淡灰色	口縁端部ヨコナデ	外面に煤付着
156	A9-1	SK-13	H	鍋	26.2	(6.6)			密	良好	淡褐色	口縁端部ヨコナデ	外面に煤付着
157	A9-1	SK-14	Z	碗	6.6	4.1	2.8		密	良好	白色	高台部削り出し	18朝隊関連
158	A9-1	SK-14	Z	坏	6.4	8.5	4.3		密	良好	白色	台部削り出し	18朝隊関連
159	A9-1	SK-14	Z	壺		(5.8)	5.2		密	良好	白色	底部回転ヘラケズリ	18朝隊関連
160	A9-1	SK-14	Z	皿	16.8	4.7	12.8		密	良好	白色	高台部削り出し	18朝隊関連
161	A9-2	SD-04	T	小鉢	10.0	(1.3)			密	良好	淡乳褐色	口縁部回転ナデ	内外面に灰釉／古瀬戸後期
162	A9-2	SD-04	H	皿	12.8	(2.4)			密	良好	淡乳褐色	口縁部ヨコナデ	
163	A9-2	SD-04	H	皿	14.4	2.1			密	良好	淡乳褐色	口縁部ヨコナデ	内面に煤付着
164	A9-2	SD-04	H	鍋		(6.0)			密	良好	淡褐色	体部内面ナデ	外面に煤付着
165	A9-2	SD-04	H	鍋		(4.2)			密	良好	淡褐色	体部内面板ナデ	
16-166	A9-2	SD-05	H	皿	13.8	(2.5)			密	良好	淡乳褐色	口縁部ヨコナデ	
167	A9-2	SD-05	H	小皿	9.8	1.6			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
168	A9-2	SD-05	H	小皿	7.6	1.2			密	良好	淡乳褐色	外面ナデ・指押さえ	
169	A9-2	SD-05	H	鍋	28.0	(5.4)			密	良好	淡灰褐色	体部内面板ナデ	体部外面に煤付着
170	A9-2	SD-05	H	鍋	23.6	(8.9)		最大径27.0	密	良好	淡褐色	体部内面板ナデ	
171	A9-2	SD-05-07	H	鍋	25.2	(12.4)			密	良好	淡褐色	体部内面板ナデ	外面に煤付着
172	A9-2	SD-05-07	D	土錘	長(6.5)	径2.3	孔径0.8	重量31.2g	密	良好	淡赤褐色	ナデ・指押さえによる整形	
173	A9-2	SK-1	P	碗		(3.5)	7.8		密	良好	淡灰色	底部外面糸切り	口縁部に灰釉
174	A9-3	SD-08	Z	大碗	20.8	6.9	9.6		密	良好	淡灰白色	高台部削り出し	染付大碗
175	A9-3	SD-08	N	軒丸瓦					密	やや不良	淡灰色	内面ナデ調整	
176	A11-1	SD-08	N	軒丸瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
177	A11-1	SD-08	N	軒平瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
178	A11-1	SD-08	N	軒平瓦					密	やや不良	淡灰色	内面ナデ調整	
179	A11-3	SK-12	H	焼塩壺		(3.7)			密	良好	淡赤褐色	内面に布目痕	
180	A11-3	SK-16	H	小皿	11.1	1.8			密	不良	淡乳褐色	外面ナデ・指押さえ	
181	A11-3	SK-16	H	鍋		(3.7)			密	やや不良	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
182	A11-3	SK-16	H	鍋		(6.9)			密	やや不良	淡褐色	内外面摩滅著しい	外面に煤付着
183	A12-1	SD-15	I	不明	長3.5	幅0.8		重量4.3g				青銅製一金メッキ	
184	A12-1	SD-15	I	鎹貨	径2.4			重量2.5g					淳祐元寶
185	A12-1	SD-16	T	天目茶碗	11.5	(5.0)			密	良好	淡乳褐色	体部外面下半回転ヘラケズリ	内外面に鉄釉／古瀬戸後期新
186	A12-1	SD-16	T	擂鉢		(3.4)			密	良好	淡褐色	口縁部回転ナデ	内外面に鉄釉／大窯2
187	A12-1	SD-16	H	小皿	10.6	2.3			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
188	A12-1	SD-16	H	皿	12.4	(1.9)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
189	A12-1	SD-16	H	皿	14.4	2.5			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
190	A12-1	SD-16	H	鍋		(4.4)			密	良好	淡褐色	体部内面板ナデ	外面に煤付着
191	A12-1	SD-16	H	鍋	29.6	(12.7)			密	良好	淡茶褐色	体部内面ナデ・板ナデ	外面に煤付着
17-192	A12-1	SD-16	H	皿	12.9	(1.9)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
193	A12-1	SD-16-2	H	鍋	20.8	(4.4)			密	良好	淡褐色	体部内面板ナデ	
194	A12-2	SD-17	H	小皿	9.8	2.0			密	やや不良	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
195	A12-2	SD-17	H	皿	16.1	(2.3)			密	やや不良	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
196	A12-2	SD-17	H	鍋	20.8	(5.6)			密	良好	淡褐色	体部内面板ナデ	外面に煤付着
197	A12-3	SK-3	T	広東碗		(3.6)	5.9		密	良好	淡灰白色	高台部削り出し	美濃産／登10小
198	A12-3	SK-3	T	丸碗	11.8	(5.3)			密	良好	淡褐色	口縁部回転ナデ	内外面に灰釉
199	A12-3	SK-3	Z	端反碗	11.2	6.2	4.6		密	良好	淡灰白色	高台部削り出し	染付端反碗／登11小
200	A12-3	SK-3	N	軒平瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
201	A12-3	SK-3	N	軒桟瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
202	A12-3	SK-3	N	軒平瓦					密	良好	淡褐色	内面ナデ調整	
203	A12-3	SK-3	N	軒丸瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
204	A12-3	SK-3	N	軒丸瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
205	A12-3	SK-3	N	軒丸瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
206	A13-1	SD-08	D	煙瓦	長22.6	幅11.2	厚(4.6)		やや粗	良好	淡褐色	平面が端縁状を呈す	刻印あり
207	A13-1	表土	D	煙瓦	長23.0	幅11.3	厚5.8		密	良好	淡赤褐色	平面が端縁状を呈す	刻印ムが両平面にあり

※器種記号　H－土師器　S－須恵器　K－灰釉陶器　D－土製品　R－石器・石製品　P－灰釉系陶器　T－陶器　Z－磁器　I－金属製品　N－瓦・瓦質土器
法量の単位は㎝。（　）は残存数値。底径には、脚部径や高台径を含む。

第４章　Ｂ区の遺構と遺物

１．遺構（第４・９・18～21図）

Ｂ区では、近世の堀以外に戦国期の堀・溝（ＳＤ）が見つかり、鉄滓や鋳型片を含んだ土壙（ＳＫ）なども検出されている。また、整地層や遺物包含層（２層）なども部分的に確認されている。なお、Ａ区ほどではないが聯隊に関連した遺構も検出している。このうち、聯隊の配置図（注１）にはないが、B23－２・３区で検出された一辺60～80cm程の方形掘方を持ち内部に拳大の根石や40～50cmの平石（礎石）のある柱穴群については、一部にコンクリート片が入るものがあり聯隊に関連した建物となろう。

溝・堀

ＳＤ－０１（B22－１・２区）

溝は東西方向に多少曲がりながら延びており、ＳＤ－０２やB22－１区ＳＫ－２を掘り込んでいる。

規模は、幅が0.7ｍ程で、長さは3.0ｍを測る。溝の断面は浅い「Ｕ」字状で、深さは38cm程となる。溝底の傾斜は西から東に向かって僅かに低くなる。埋土は、暗茶褐色砂質土である。出土した遺物には土師器くの字形鍋・小皿などの小片があり、遺構は16世紀後半以降のものであろう。

ＳＤ－０２（B22－１～３区）

東西方向に延びた非常に大きな堀と推測され、B22－３区あたりで多少折れ曲がり北東－南西方向に向きを変えているようである。ＳＤ－０１やB22－１区ＳＫ－２は、この埋土を掘り込んでいる。

規模については、完全に掘り切っていないためはっきりしないが、幅が13～15ｍで、長さは復元で15ｍ程が確認される。堀の断面は、側面の傾斜が緩やかで底面は広く平坦となるようで、深さは1.9ｍ程を測る。堀の埋土は、砂礫を含んだ暗灰色砂質土や暗茶灰色砂質土などで、その堆積状況から堀の北西側にあったと考えられる土塁が埋められたのであろう。出土遺物は灰釉系陶器片、陶器皿・盤、土師器くの字形鍋・小皿、銭貨など（第31図251～255）で、遺構は15世紀後半～16世紀前葉であろう。

なお、B22－３区ではこの堀に伴うと考えられる土塁が高さ90cm程残っていた。盛土は、茶・灰・黄白色の各粘質土がブロック状に入る。土塁内からは須恵器片、灰釉系陶器碗、陶器碗・擂鉢・甕、土師器くの字形鍋・小皿など（第31図246～249）が出土し、15世紀後半と考えられる遺物を含んでいる。

ＳＤ－０３（B21－２区／B23－２・３区）

南北方向に延びた大きな堀と推測され、B21－２区で検出されたものとB23－２・３区で確認されたものは規模や堆積状況から同一の遺構と判断した。

規模は、幅が5.5ｍ程で、長さは推定で19ｍを測る。堀の断面は、部分的な重機の断ち割りからであるが「Ｕ」字状と推測され、深さは2.6ｍ（現地表から2.9ｍ）程となる。堀底は、両地点でそれぞれ標高7.3ｍ程であることから、傾斜はほとんど見られない。埋土は、砂礫土混じりの茶灰色粘質土や暗灰色粘質土などで、砂礫混じりで粘質土のものが多い。なお、B21－２区の断面に見られるように僅かに土塁状のものが堀の西側に残る。出土した遺物には陶器皿・鉢、土師器半球形鍋・小皿、瓦片・

木製品など(第30図217～222、第32図264～266)があり、遺構は16世紀後半のものであろう。

ＳＤ－０４（B16－１区／B16－２区／B19－１区）

溝は、南北方向(Ｎ－７～８°－Ｅ)にほぼ直線的に延び、北側では包含層を掘り込んでいる。

規模は、幅が0.7～0.8ｍと比較的一定で、長さは22.4ｍを測る。溝の断面は「Ｕ」字状で、深さは60㎝程となる。溝底は、両端に比べて中央付近が10㎝程深くなっている。埋土は、炭混じりの淡灰色砂質土や暗灰色砂質土が主体となる。出土した遺物には灰釉系陶器片、陶器碗・皿・鉢、青磁片、土師器くの字形鍋・半球形鍋・小皿、鉄滓など(第23図42～48、第24図72～79、第27図151～153)があり、遺構は16世紀後半のものであろう。

ＳＤ－０５（B15－１・２区）

東西方向に比較的まっすぐに延びた非常に大きな堀と推測されるが、調査区を横切るだけで全体形ははっきりしない。規模や方向性からB22－１～３区のＳＤ－０２につながる可能性がある。

規模は、幅が11.5ｍ程で、長さは復元で６ｍ程が確認された。堀の断面形は不明であるが、北側の傾斜はやや緩やかで南側は急となり、深さは現地表より2.7ｍ以上を測る。埋土は、灰褐色砂礫土や淡赤褐色砂礫土などが主体となる。堀の北側には土塁の残存と考えられる土層が厚さ30㎝程残っているが、堀は土塁を崩して埋めたようである。なお、堀や土塁の上面には水平堆積した土層があり、このうち第21図B15－１～３区断面の４層や第19図B20－１・２区断面の６層より上が聯隊による整地と考えられる。出土遺物には陶器碗・皿・擂鉢・甕、土師器くの字形鍋・半球形鍋・小皿、土錘、獣骨、銭貨、鉄滓、羽口など(第22図１～10、第33図286)があり、遺構は16世紀前半のものであろう。

ＳＤ－０６（B18－１区）

溝は北東－南西方向に比較的まっすぐに延び、ＳＤ－０７に壊されている。

規模は、幅が0.6～0.8ｍで、長さは2.6ｍを測る。溝の断面は浅い皿状で、深さは10㎝程となる。両端の高低差はほとんどなく、溝底は平坦である。埋土は、淡灰褐色砂質土である。出土した遺物は灰釉系陶器片と土師器小皿片のみで、遺構は中世のものであろう。

ＳＤ－０７（B18－１区）

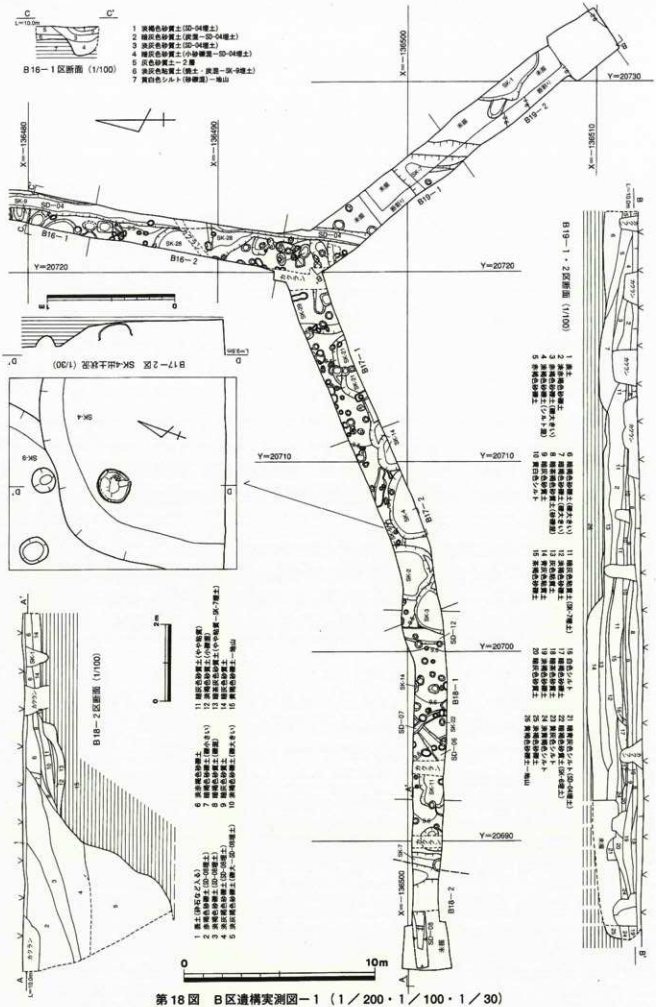
溝は北西－南東方向に少し曲がりながら延び、ＳＤ－０６を切っている。

規模は、幅が0.4ｍ程で、長さは2.1ｍを測る。溝の断面は浅い皿状で、深さは７㎝程となる。両端の高低差はほとんどなく、溝底は平坦である。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物は陶器片と土師器鍋・小皿片のみで、遺構はＳＤ－０６よりも新しいと言えるだけである。

ＳＤ－０８（B18－２区）

南北方向に延びる非常に大きな堀で、絵図との位置関係から「二の丸堀」の一部と考えられ、A8－１区ＳＤ－０８から続くものである。

規模は幅が6.3ｍ以上で、長さは2.4ｍを測る。堀の断面は深さ1.5ｍ程までは傾斜30°程の緩やかで、それより下は60°程の急傾斜となり、深さは現地表から3.9ｍまで掘り下げたが堀底まで確認できていない。なお、石垣は確認していない。埋土は、赤褐色砂礫土や淡赤褐色砂礫土などで、東側にあった土塁を一気に崩して埋めたものと考えられる。遺物は出土していないが、遺構の時期はＡ区のＳＤ－０８同様に池田照政による吉田城大改修に伴う16世紀末以降であろう。



第18図　B区遺構実測図－1（1／200・1／100・1／30）

ＳＤ－０９（B15－２区）

溝は東西方向に比較的まっすぐに延びているようで、包含層を除いた後に検出された。

規模は、幅が0.2～0.5ｍとあまり一定せず、長さは2.5ｍを測る。溝の断面形は、側面が垂直気味で底面は狭く平坦となる。深さは40㎝程で、西端と東端との高低差はほとんどない。埋土は、地山土混じりの暗灰色砂質土である。出土した遺物には須恵器無台坏・壺・甕、土師器碗・皿、焼土など（第22図13～16）があり、遺構は９世紀前半のものであろう。

ＳＤ－１０（B23－１区）

溝は東西方向（Ｎ－85°－Ｅ）にほぼ直線的に延び、ＳＤ－１１とはほぼ並行する。包含層を除いた後に検出された。

規模は、幅が0.7～0.8ｍで、長さは2.3ｍを測る。溝の断面は浅い「Ｕ」字状で、深さは15㎝程となる。西端と東端との高低差は４㎝で、溝底は西から東に向かって少しずつ低くなる。埋土は、黒灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器甕、陶器卸皿、土師器小皿、炉壁などがある。このうち卸皿が古瀬戸後期のものであることから、遺構は15世紀代であろう。

ＳＤ－１１（B23－１区）

包含層を除いた後に検出されたもので、溝は東西方向（Ｎ－90°－Ｅ）にほぼ直線的に延びる。

規模は、幅が0.5～0.6ｍで、長さは2.4ｍを測る。溝の断面は浅い皿状で、深さは10㎝程となる。東端と西端との高低差は５㎝で、溝底は東から西に向かって少しずつ低くなる。埋土は、黒灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗（第31図256）のみで、遺構は13世紀後半のものであろう。

ＳＤ－１２（B18－１区）

溝は南北方向に比較的まっすぐに延び、B17－２区ＳＫ－３に切られている。

規模は、幅が0.6～0.8ｍ程で、長さは2.1ｍを測る。溝の断面は浅い皿状で、深さは10㎝程となる。両端の高低差はほとんどなく、溝底は平坦である。埋土は、淡灰褐色砂質土である。出土した遺物は瓦質土器片と土師器鍋・小皿片のみで、遺構はB17－２区ＳＫ－３より古いものである。

土壙

B15－２区ＳＫ－19

土壙としたが、北東－南西方向に延びる堀の可能性が高く、幅広の部分が折れ曲がって狭くなる箇所と推測される。規模は、幅が広い部分で4.5ｍ、狭くなる部分で2.5ｍ、長さが2.3ｍ以上で、断面形は箱堀状となり深さは現地表から2.5ｍ程を測る。埋土は、砂礫混じりの暗茶褐色粘質土や粘質土混じりの灰褐色砂礫土などである。出土遺物には灰釉系陶器片、陶器擂鉢・甕、磁器碗、土師器くの字形鍋・茶釜形鍋・羽釜・小皿、土錘、鉄滓、焼土など（第22図17～21）がある。

なおこの遺構は、出土遺物から16世紀前葉に位置付けられるが、土層断面図ではＳＤ－０５に伴うと考えられる土塁を掘り込んでおり、ＳＤ－０５より新しくなる。

B15－２区ＳＫ－28・B15－２区ＳＫ－30

包含層を取り除いて検出されたもので、当初は別遺構と考えていたが遺物が接合することから同一遺構とした。平面形は細長いもの（ＳＫ－28）と不整な楕円形（ＳＫ－30）とが接しており、規模は幅

1.1ｍ、長さ1.6ｍ程で、底面はあまり一定せず深さは10～20㎝を測る。埋土は、地山土や炭混じりの暗灰色砂質土である。出土した遺物には須恵器無台坏・摘み蓋・碗・甕、土師器碗、製塩土器など(第22図22～25、26～32)があり、遺構は９世紀前半のものであろう。

Ｂ15－２区ＳＫ－18

包含層を取り除いて検出されたもので、平面形は長方形と推測され、規模は2.4ｍ以上×1.4ｍ以上で、底面は比較的平坦で深さは35㎝程を測る。埋土は、焼土・炭混じりの暗灰色砂質土である。出土した遺物には須恵器片、灰釉系陶器碗・甕、土師器碗・小皿・羽釜など(第22図33～38)があり、遺構は15世紀後半のものであろう。

Ｂ15－２区ＳＫ－31

包含層を取り除いて検出されたもので、ＳＤ－０９やB15－２区ＳＫ－18に切られている。

平面形ははっきりせず、規模は幅2.3ｍ以上、長さ2.4ｍ以上で、底面は比較的平坦で深さは10㎝程を測る。埋土は、淡灰色砂質土である。出土した遺物には須恵器無台坏・摘み蓋・甕、製塩土器など(第22図39～41)があり、遺構は９世紀前半のものであろう。

Ｂ15－２区ＳＫ－20

B15－３区との境で検出されたもので、平面形は円形で、規模は径0.7～0.8ｍ、深さ152㎝程を測る柱穴状の土壙である。埋土は礫混じりの茶褐色砂質土であるが、掘方埋土と柱痕跡埋土の区別はできなかった。出土した遺物は灰釉系陶器片と土師器小皿片のみで遺構の時期ははっきりしなが、B15－２区ＳＫ－19を掘り込んでいることから16世紀以降のものであろう。なお、遺構の規模や検出位置などから、冠木門に関連したものである可能性が高い。

Ｂ16－１区ＳＫ－９

平面形はＳＤ－０４や他の土壙に壊されているためはっきりしないが、規模は幅0.2ｍ以上、長さ0.8ｍ以上で、深さ９㎝程を測る。埋土は、焼土・炭混じりの淡灰色粘質土である。出土した遺物には土師器くの字形鍋・皿、炉壁など(第23図49～53)があり、遺構は16世紀前半のものであろう。

Ｂ16－１区ＳＫ－14

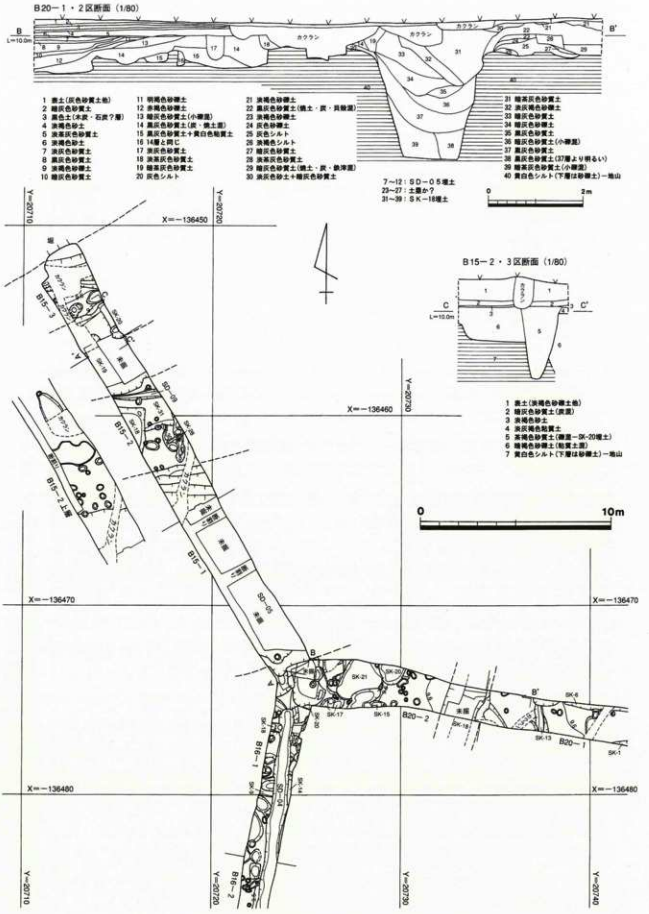
ＳＤ－０４を掘り込んでおり、平面形は円形に近いものと推測される。規模は幅0.2ｍ以上、長さ1.7ｍ以上、深さ22㎝程を測る。埋土は、焼土混じりの灰色砂質土である。出土した遺物には土師器小皿、不明土製品、炉壁など(第23図54・55)があり、遺構は16世紀後半以降のものであろう。

Ｂ16－１区ＳＫ－18

平面形は二つの柱穴が重複したような形となるが、ＳＤ－０４に壊されているためはっきりしない。規模は幅0.45ｍ、長さ0.6ｍ以上で、深さは浅い部分で30㎝程、深い部分で36㎝程を測る。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器片、土師器鍋・小皿など(第23図56・57)があり、遺構は16世紀代であろう。

Ｂ16－１区ＳＫ－20

B15－１区やB20－２区に広がり、一部はＳＤ－０５に切られる。平面形は不整な楕円形と推測され、規模は長径2.6ｍ以上×短径1.6ｍで、底面は比較的広く平坦で深さは50㎝程を測る。埋土は、焼土・炭混じりの暗灰色砂質土である。出土遺物は灰釉陶器碗、灰釉系陶器碗、土師器伊勢型鍋・小皿、不



第19図　Ｂ区遺構実測図－２（１／200・１／80）

明土製品、鋳型、炉壁など(第23図58～63・第33図282)で、遺構は13世紀後半～14世紀であろう。

B16－2区ＳＫ－28

平面形は不整な楕円形と推測されるが、ＳＤ－０４に切られるなどではっきりしない。規模は長径3.0ｍ以上×短径2.5ｍで、底面は平坦な部分が２段に分かれ、深さは浅い部分で25㎝程、深い部分で40㎝程を測る。埋土は、やや粘質の灰色砂質土である。出土遺物には灰釉系陶器片、陶器片、土師器茶釜形鍋・くの字形鍋・小皿、炉壁など(第24図80～89)があり、遺構は16世紀前半であろう。

B17－1区ＳＫ－21

平面形は不整な楕円形と推測され、中央付近は別の土壙に壊されている。規模は長径3.3ｍ以上×短径1.1ｍ以上で、底面は広く平坦で深さは26㎝程を測る。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には陶器擂鉢・甕、土師器半球形鍋・くの字形鍋・蓋・盤・小皿など(第25図90～93)があり、遺構は16世紀後半のものであろう。

B17－1区ＳＫ－29

平面形は楕円形と推測されるが、反対側の立ち上がりが攪乱により壊されているためはっきりしない。規模は長径2.2ｍ以上×短径2.0ｍ以上で、底面は東側に向かってやや低くなり最も深い部分で22㎝程を測る。埋土は、暗灰色砂質土である。出土遺物には陶器碗・皿・擂鉢・甕、土師器半球形鍋・くの字形鍋・蓋・小皿、炉壁など(第25図94～110)があり、遺構は15世紀末葉～16世紀前葉であろう。

B17－2区ＳＫ－4

平面形は不整な楕円形と推測されるが、半分以上は調査区外となる。規模は長径3.8ｍ×短径1.5ｍ以上で、底面は広く平坦で深さは25㎝程を測る。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には陶器皿・擂鉢・壺、土師器半球形鍋・くの字形鍋・小皿、不明土製品など(第25・26図111～121)があり、遺構は15世紀末葉～16世紀前葉のものであろう。

B17－2区ＳＫ－2

多量の瓦類が捨てられた廃棄土壙で、平面形は不整な楕円形と推測され一部はB17－2区ＳＫ－3と重複する。規模は長径3.0ｍ×短径1.8ｍ以上で、底面は南側に浅い部分があるがいずれも広く平坦で深さは浅い部分で10㎝程、深い部分で18㎝程を測る。埋土は、灰色砂質土である。出土遺物には瓦類、陶器甕、土師器くの字形鍋・皿など(第26図122～128)があり、遺構は18世紀後半以降であろう。

B17－2区ＳＫ－3

B18－1区にかけて広がる多量の瓦類が捨てられた廃棄土壙で、平面形は不整な楕円形と推測される。規模は長径3.2ｍ以上×短径1.4ｍ以上で、底面は東側に一部浅い部分があるがいずれも広く平坦で深さは浅い部分で30㎝程、深い部分で40㎝程を測る。埋土は、灰色砂質土である。出土遺物には瓦類、陶器擂鉢・甕、土師器小皿など(第26図129～132)があり、遺構は18世紀後半以降であろう。

B17－2区ＳＫ－9

平面形は不整な楕円形と推測され、一部はB17－2区ＳＫ－2や同区ＳＫ－4に切られている。規模は長径1.3ｍ以上×短径0.7ｍ以上で、底面は比較的平坦で深さは10㎝程を測る。埋土は、灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器片、土師器茶釜形鍋・くの字形鍋・小皿など(第27図133～135)があり、遺構は16世紀前半のものであろう。

B17－２区ＳＫ－14

平面形は楕円が二つ連続した形で、規模は長さ2.8ｍ、幅0.9ｍ以上で、底面は平坦な部分が２段で、深さは浅い部分で20㎝程、深い部分で35㎝程を測る。埋土は、灰色砂質土である。出土遺物には陶器碗・皿・擂鉢、土師器くの字形鍋・小皿など(第27図136～145)があり、遺構は16世紀前半であろう。

B18－１区ＳＫ－14

平面形は楕円形と推測され、規模は長径0.6ｍ×短径0.2ｍ以上、深さ28㎝程を測る柱穴状の土壙である。埋土は、地山土混じりの暗灰色砂質土である。出土した遺物には青磁碗、土師器鍋・小皿など(第27図146)があり、遺構は15世紀後半以降のものであろう。

B18－１区ＳＫ－22

平面形は楕円形で、規模は長径0.4ｍ×短径0.3ｍ、深さ48㎝程を測る柱穴状の土壙である。埋土は、地山土混じりの暗灰色砂質土である。出土した遺物には土師器くの字形鍋・小皿など(第27図147・148)があり、遺構は16世紀前半のものであろう。

B18－２区ＳＫ－７

平面形は細長い溝状であるが、ＳＤ－０８に切られるなどしてはっきりしない。規模は長さ1.5ｍ以上、幅0.7ｍ以上で、底面は比較的平坦で深さは34㎝程を測る。埋土は、やや粘質の暗茶灰色砂質土である。出土した遺物には陶器碗・鉢、土師器くの字形鍋・小皿など(第27図149・150)があり、遺構は15世紀中葉のものであろう。

B19－１区ＳＫ－７

B19－２区にかけて包含層を掘り込んでいるが、多くが調査区外で平面形ははっきりしない。規模は長さ4.3ｍ以上、幅2.0ｍ以上、底面は緩やかに傾斜し最も深い部分で25㎝程を測る。埋土は、暗灰色粘質土である。出土遺物には瓦片、陶器碗・鉄皿・擂鉢、磁器皿、土師器くの字形鍋・小皿、土錘、鉄滓など(第27図154・155)があるが、瓦片が含まれることから遺構は17世紀以降であろう。

B19－２区ＳＫ－１

包含層を掘り込んで検出されているが、多くが調査区外となり平面形ははっきりしない。規模は長さ4.0ｍ以上、幅1.3ｍ以上、底面は比較的平坦で深さは15㎝程を測る。埋土は、炭・貝殻混じりの灰色砂質土である。出土した遺物には軒瓦、陶器皿・擂鉢、土師器小皿・焼塩壺蓋、鉄釘、小柄、鉄滓など(第27図158～164)があり、遺構は17世紀前半のものであろう。

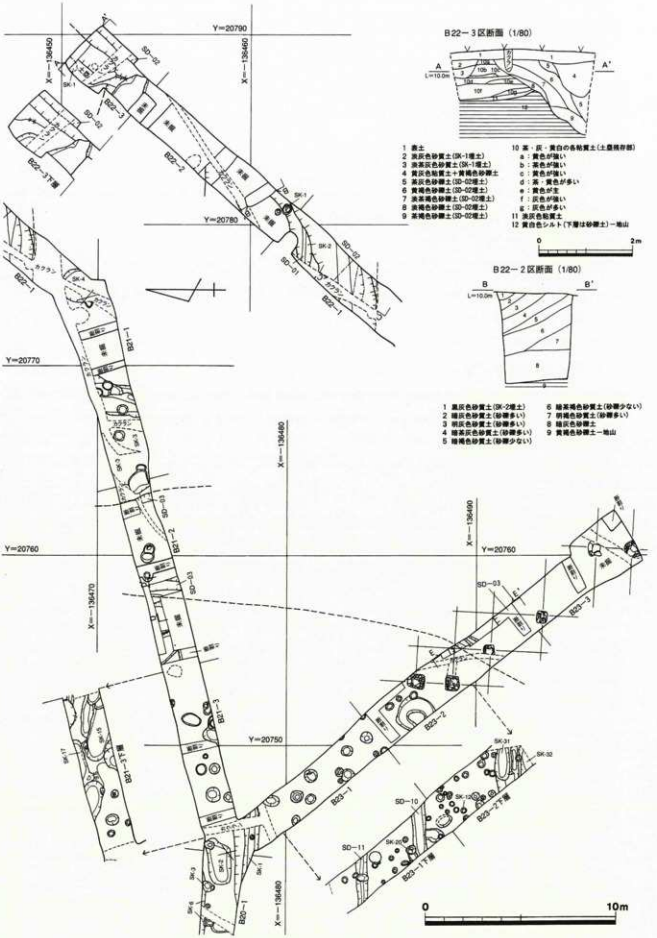
B20－１・２区ＳＫ－18

土壙としたが、南北方向に延びる堀の可能性が高く、その東側には土塁の残存(高さ0.6ｍ、幅2.5ｍ以上)と考えられる土層が確認される。

規模は幅2.4ｍ、長さ1.7ｍ以上で、断面形は箱堀状で深さは2.2ｍ程を測る。埋土は、暗灰色砂質土や黒灰色砂質土などである。出土遺物には陶器碗・鉢・甕、土師器茶釜形鍋・くの字形鍋・小皿、漆椀、鋳型、獣骨など(第28図165～168・第33図284)があり、遺構は15世紀後半のものであろう。

B20－１区ＳＫ－１

平面形は細長い溝状で、B23－１区へ続いている。規模は幅1.3ｍ、長さ4.5ｍ以上で、断面の傾斜は非常に緩やかで深さは25㎝程を測る。埋土は、焼土・炭混じりの暗灰色砂質土である。出土遺物に



第20図　Ｂ区遺構実測図－３（１／200・１／80）

は灰釉系陶器片、陶器水注・甕、土師器小皿、不明土製品、鋳型、鉄製品、炉壁など(第28図169～174)があり、遺構は13世紀後半のものであろう。

B20－１区ＳＫ－２

平面形は不整な長方形で、規模は長さ2.5ｍ、幅1.2ｍで、底面は広く平坦で深さは12㎝程を測る。埋土は、焼土・炭混じりの暗灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器小皿・鉢、炉壁、鋳型など(第33図277)があり、遺構は13～14世紀のものであろう。

B20－１区ＳＫ－３

平面形は円形で、規模は径0.5～0.6ｍ、深さ76㎝程を測る柱穴状の土壙である。埋土は、焼土・炭混じりの暗灰色砂質土である。出土遺物は不明土製品(第28図175)だけで、遺構の時期は不明である。

B20－１区ＳＫ－６

平面形はほとんどが調査区外となるためはっきりしないが、規模は長さ4.4ｍ以上、幅0.2ｍ以上、深さ30㎝以上を測る。埋土は、焼土・炭混じりの暗灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗・鉢、炉壁、不明土製品など(第28図176～178)があり、遺構は13世紀後半のものであろう。

B20－１区ＳＫ－13

平面形は細長い溝状で、規模は長さ1.4ｍ以上、幅0.4～0.6ｍで、底面は比較的平坦で深さは10㎝程を測る。埋土は、焼土・炭混じりの暗灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗、土師器片、炉壁など(第28図179・180)があり、遺構は13世紀代のものであろう。

B20－２区ＳＫ－17

平面形は不整な楕円形と推測されるが、多くは調査区外ではっきりしない。規模は長径1.2ｍ以上×短径0.5ｍ以上で、底面はかなり凹凸があり、深さは最も深い部分で49㎝程を測る。埋土は、焼土・炭混じりの暗灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗・片口鉢、土師器小皿・鍋、炉壁、不明土製品など(第28図181～185)があり、遺構は13世紀代のものであろう。

B20－２区ＳＫ－15

平面形は不整な楕円形と推測され、一部はB20－２区ＳＫ－21に切られる。規模は長径0.9ｍ×短径0.4ｍ以上で、底面は平坦で深さは38㎝程を測る。埋土は、淡灰色砂質土である。出土遺物には灰釉系陶器碗や土師器伊勢型鍋など(第28図186・187)があり、遺構は13世紀後半であろう。

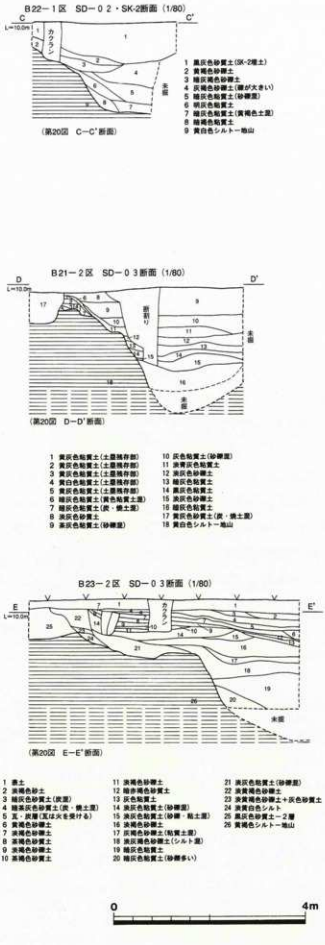
B20－２区ＳＫ－20

平面形は不整な楕円形で、規模は長径1.4ｍ以上×短径1.0ｍ以上で、底面は広く平坦で深さは32㎝程を測る。埋土は、焼土・炭混じりの暗灰色砂質土である。出土遺物には灰釉系陶器碗・小皿、土師器碗、炉壁、鉄滓、鋳型など(第28図188～190、第33図285)があり、遺構は13世紀後半であろう。

B20－２区ＳＫ－21

平面形は不整な楕円形と推測され、規模は長径2.5ｍ以上×短径2.3ｍで、底面は多少の凹凸があり深さは26～54㎝程を測る。埋土は、焼土・炭混じりの暗灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗・小皿・甕、土師器小皿・鍋、炉壁、鉄滓、不明土製品、鋳型など(第29図191～196)があり、遺構は13世紀後半のものであろう。

B21－１区ＳＫ－３



第21図　Ｂ区遺構実測図－４（１／80）

ＳＤ－０３と接するように検出されたが、聯隊のコンクリート基礎などに壊され平面形ははっきりしない。長さ2.5ｍ以上、短径2.2ｍ以上、深さ30㎝程の大きさで、その内側には一段深くなった楕円形の部分があり、その規模は長径1.2ｍ×短径1.0ｍ、深さ18㎝程を測る。埋土は、上層が黄白色粘質土がブロック状に入った黒灰色砂質土で、下層が淡灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗・甕、土師器くの字形鍋・小皿、陶器鉢・壺、鉄滓、不明土製品など(第29図199 ～ 211、第33図287)があり、遺構は15世紀中葉～後半のものであろう。

B21 － 3 区ＳＫ－ 15

包含層を取り除いて検出されたもので、平面形は長楕円形となる。規模は長径4.8ｍ以上×短径1.2ｍで、底面は広く平坦で深さは48㎝程を測る。埋土は、焼土・炭混じりの暗灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗、陶器甕、炉壁、鉄滓、不明土製品など(第30図223 ～ 225)があり、遺構は14世紀代のものであろう。

B21 － 3 区ＳＫ－ 17

包含層を取り除いて検出されたもので、平面形はB21－３区ＳＫ－15と同じような長楕円形と推測される。規模は長径2.5ｍ以上×短径0.4ｍ以上で、底面は広く平坦で深さは40㎝程を測る。埋土は、焼土・炭混じりの暗灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗、土師器鍋、鋳型、不明土製品など(第33図279)があり、遺構は13 ～ 14世紀のものであろう。

B22－ 1 区ＳＫ－ 1

B22－１区としたが実際にはB22－２区で検出されたもので、ＳＤ－０１・０２を掘り込んでいる。平面形は円形で、規模は径0.5 ～ 0.55ｍ、深さ66㎝程を測る柱穴状の土壙となり、底面には一辺30㎝程の礎石が見られる。埋土は、暗灰褐色砂質土である。出土した遺物には陶器碗・皿、土師器鍋・小皿など(第30図226)があり、遺構は16世紀中葉～後半のものであろう。

B22－ 1 区ＳＫ－ 2

土壙としたが東西方向に延びた溝である可能性が高く、ＳＤ－０１に切られＳＤ－０２を掘り込んでいる。幅は2.8ｍ程と推測され、長さは3.0ｍを測る。断面は側面の傾斜が非常に緩やかで、深さは60㎝程となる。西端と東端との高低差は７㎝で、西から東に向かって少しずつ低くなる。埋土は、黒灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器片、陶器碗・皿・擂鉢・甕、中国製磁器碗、土師器くの字形鍋・半球形鍋・羽釜・小皿、土錘、炉壁、鉄滓、貝殻など(第30・31図227 ～ 241)があり、遺構は15世紀末葉～ 16世紀前葉のものであろう。

B22－ 1 区ＳＫ－ 4

B21－１区にかけて検出され、平面形は楕円形と推測される。規模は長径2.1ｍ以上×短径1.7ｍ、底面は広く平坦で深さは50㎝程を測る。埋土は、上層が黄白色粘質土、下層が暗灰色粘質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗・甕、陶器碗、土師器くの字形鍋・小皿、鉄滓、炉壁など(第31図242 ～ 245)があり、遺構は15世紀後半のものであろう。

B22 － 3 区ＳＫ－ 1

ＳＤ－０２に伴うと考えられる土塁を掘り込んでいるもので、平面形は楕円形と推測される。規模は長径0.7ｍ以上×短径0.5ｍ以上で、深さ38㎝程を測る。埋土は、淡灰色砂質土や淡茶灰色砂質土で

ある。出土した遺物は軒平瓦(第31図250)のみで、遺構は17世紀以降のものであろう。

B23－１区ＳＫ－20

包含層を取り除いて検出されたもので、平面形は円形で、規模は径0.5ｍ、深さ45㎝程を測る柱穴状の土壙である。埋土は、黒灰色砂質土である。出土した遺物には陶器鉢、土師器鍋・小皿など(第31図257)があり、遺構は14世紀末葉～15世紀初頭のものであろう。

B23－２区ＳＫ－31

包含層下で検出されたもので、平面形は不整な楕円形が複数重なった形状となる。規模は長さ2.3ｍ以上、幅1.4ｍで、底面は多少凹凸があり深さは浅い部分で20㎝程、深い部分で34㎝程を測る。埋土は、暗灰色砂質土である。出土遺物には灰釉系陶器碗・片口鉢・甕、陶器鉢・壺、土師器伊勢型鍋・くの字形鍋・小皿、鉄滓、鋳型など(第32図267～270)があり、遺構は13世紀後葉～14世紀前葉であろう。

B23－２区ＳＫ－32

包含層を取り除いて検出されたもので、B23－２区ＳＫ－31とほぼ並行しているが全体形は不明である。規模は長さ1.5ｍ以上、幅0.6ｍで、底面は比較的平坦で深さは23㎝程を測る。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗・甕、陶器甕、鉄滓、炉壁など(第32図271～273)があり、遺構は14世紀代のものであろう。

B23－２区ＳＫ－12

包含層を取り除いて検出されたが、本来はその上から掘り込んでいる。平面形は円形で、規模は径0.3ｍ、深さ32㎝程を測る柱穴状の土壙である。埋土は、地山土混じりの暗灰色砂質土である。出土した遺物は煉瓦(第32図274)のみで、遺構は明治期のものであろう。

２．遺物（第22～33図、第２表）

溝・堀

ＳＤ－０２（251～255）

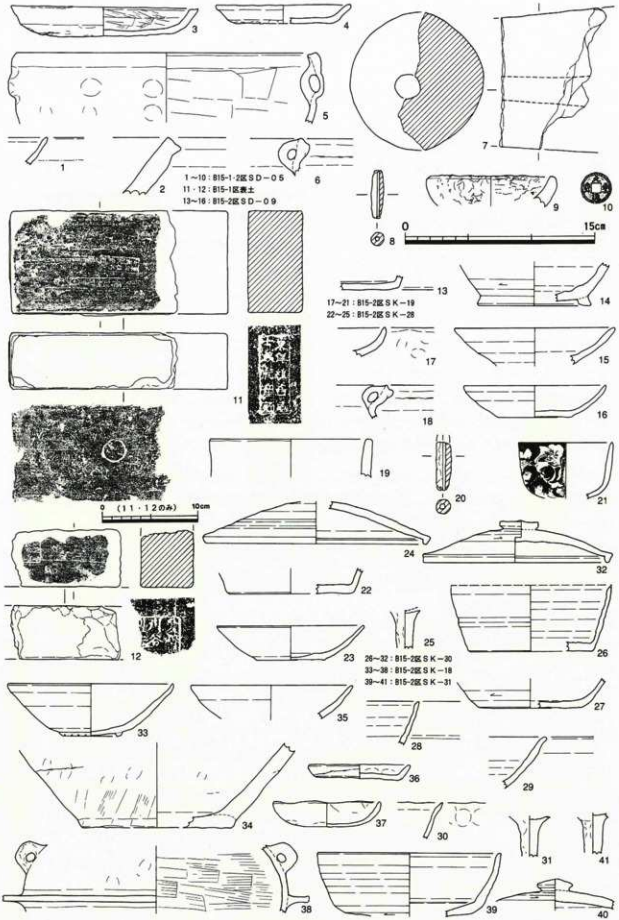
251は陶器縁釉小皿で、底部は平坦で外面は糸切り。外面には僅かに灰釉。古瀬戸後Ⅲ・Ⅳ。これ以外に陶器盤類(古瀬戸Ⅰ～Ⅳ)の破片が出土している。

252は土師器くの字形鍋で、頸部は大きく屈曲する。端部近くは外方へ突出し端部は摘み上げたようになる。ヨコナデによる調整。253・254は同皿で、口縁部は強いヨコナデにより屈曲する。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。これらは、15世紀後半のものであろう(注２)。

ＳＤ－０３（217～222・264～266）

217は陶器稜皿で、高台部は僅かに削り込み。全面に鉄釉。大窯３後。218は土師器半球形鍋で、口縁部は内弯気味に伸び端部は面となる。口縁端部ヨコナデ、内面板ナデ、外面はナデ・指押さえで煤が付着。16世紀後半のものであろう。220～222は木製品である。220は箸で、先端に向かって少しずつ細くなる。221・222は曲物の底板であろう。221は竹釘による接合が見られる。

219は軒桟瓦の丸瓦部で、右巻の巴文は太く短い。内面に「○」の刻印。混入品であろう。



第22図　Ｂ区出土遺物実測図－１（１／３・１／４）

264は大皿で、底部は平底で口縁端部は摘み上げたようになる。内外面に鉄釉。これ以外に陶器徳利・茶壺などの小片があり、いずれも古瀬戸後期のものである。

265は土師器皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。266は木製品で、桶の側板であろう。

ＳＤ－０４（42～48・72～79・151～153）

42～44は陶器である。42は天目茶碗で、端部近くが小さく屈曲する。高台付近は錆釉の化粧掛け、これ以外は鉄釉。大窯２。43は縁釉小皿で、口縁端部は僅かに外反する。口縁端部に灰釉。古瀬戸後Ⅳ古。44は甕で、口縁部は楕円形となる。内外面に鉄釉。18～19世紀のものと考えられ、混入品であろう。45～47は土師器小皿で、45は内弯気味に立ち上がり端部は細くなる。46・47は、緩やかに立ち上がる。内面ナデ・外面ナデ・指押さえ。48は同くの字形鍋で、頸部は屈曲し端部は摘み上げるようになる。体部外面にハケメが見られる。

72～74は陶器である。72は中皿で、高台部は削り出し。全面に鉄釉。大窯３。73は丸皿で、口縁部は内弯気味となる。内外面に鉄釉。初山窯。大窯３後。74は天目茶碗で、口縁端部は僅かに屈曲する。高台付近は露胎、これ以外は鉄釉。登第１小期のもので、混入品であろう。75～79は土師器である。75・76・79は皿で、口縁端部はヨコナデにより僅かに屈曲する。79は側面に焼成後の穿孔。77はくの字形鍋で、頸部は屈曲し端部は摘み上げるようになる。体部外面にハケメが見られる。78は羽釜で、口縁部は内弯気味に伸び端部は面となる。体部外面の上位に鍔が付く。口縁端部及び鍔部はヨコナデ、体部内面ナデ・板ナデ、外面はナデ・指押さえで下半がヘラケズリ。

151は陶器端反皿で、高台部は僅かに削り出し。全面に灰釉。152は同丸皿で、口縁部は小さく立ち上がる。内外面に灰釉。大窯３。153は土師器焼塩壺で、口縁端部は平坦で体部は樽型に近い。外面ナデ・指押さえ、内面は摩滅して不明。混入品の可能性が高い。

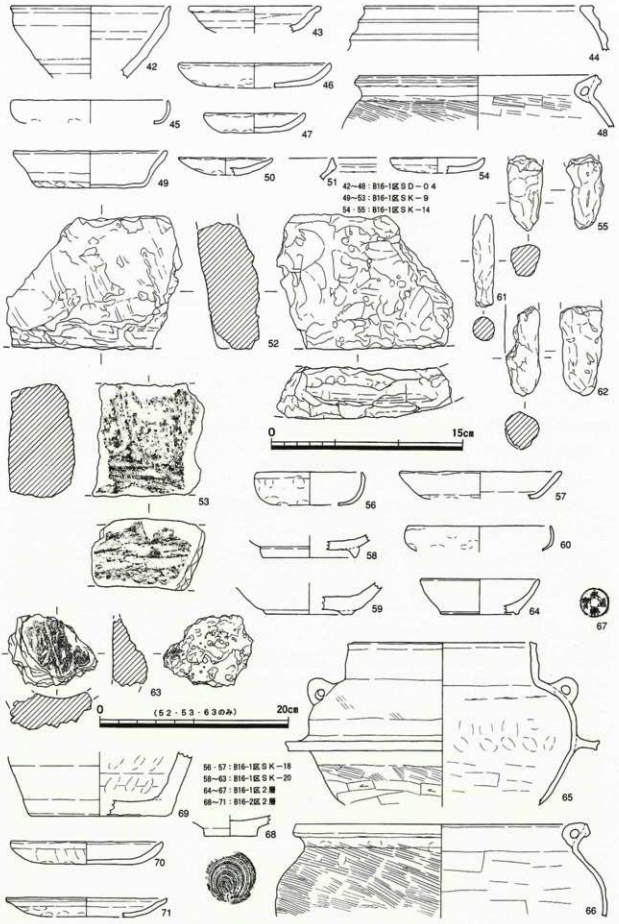
これら以外には陶器平碗・天目茶碗・擂鉢・盤類などの小片が出土しており、多くは古瀬戸後期～大窯３段階までのものである。ＳＤ－０４出土遺物は、16世紀後半を主体としたものであろう。

ＳＤ－０５（１～10・286）

１は陶器緑釉小皿で、口縁端部は小さく屈曲する。端部に灰釉。古瀬戸後Ⅱ。２は同片口鉢で、端部は外傾した面となる。常滑窯産で、素焼きに近い。この他大窯１段階の擂鉢が出土。３～６は土師器である。３・４は皿で、口縁部は明確に立ち上がる。３の口縁端部は内傾面となり、４は丸く収める。口縁部ヨコナデ、外面ナデ・指押さえ。内面は３が板ナデ、４はナデで端部に油煙が付く。５は半球形鍋で、口縁部は内弯気味で端部は面となる。口縁端部ヨコナデ、内面板ナデ、外面はナデ・指押さえで煤が付着。６はくの字形鍋で、頸部は屈曲し端部はやや丸く収める。７は羽口で、外面はナデ成形。被熱しているが、あまり変質せず付着物もない。８は土錘で、ナデ・指押さえによる成形。９はとりべで、器壁の厚い小皿状で焼成は灰釉系陶器に近い。端部から内面は、被熱などで変質したり黒紫色に変色している。10は銭貨「元豊通寶」（北宋銭）で、渡来銭である。286は椀形滓で、径８cm程の大きさとなる。これらＳＤ－０５出土遺物は、16世紀前葉を主体としたものである。

ＳＤ－０９（13～16）

13は須恵器無台坏で、底部外面は回転ヘラケズリ。14は同壺で、高台は断面台形となる。体部外面



第23図　B区出土遺物実測図－２（1／3・1／4）

回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデ。15・16は土師器碗で、底部は平坦で口縁部は内弯気味に立ち上がる。いわゆるロクロ成形で、底部外面は糸切り。これらは、９世紀前半のものであろう。

ＳＤ－１１（256）

256は灰釉系陶器碗で、高台は低く偏平である。底部外面糸切り後ナデ、これ以外は回転ナデ。13世紀後半のものであろう。

土壙

B15－２区ＳＫ－19（17～21）

17は土師器小皿で、口縁部は比較的高く立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。18は同くの字形鍋で、頸部は大きく屈曲し端部は摘み上げたようになる。口縁部ヨコナデで、外面には煤が付着。19は同茶釜形鍋で、口縁部は垂直気味に伸び端部は丸味を帯びた面となる。ヨコナデによる調整。20は土錘で、ナデ・指押さえによる成形。なおこれ以外に、陶器平碗・祖母懐茶壺・盤類などの破片が出土し、いずれも古瀬戸後Ⅰ～古窯１まで。21は磁器染付碗で、花文の染付。混入品と考えられる。

B15－２区ＳＫ－28（22～25）

22～24は須恵器である。22は無台坏で、底部外面は回転ヘラケズリ。24は摘み蓋と考えられ、端部は小さく折り返して丸く収める。天井部外面回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデ。23は碗で、底部外面は糸切り。焼成は土師質に近い。25は製塩土器で、細い棒状の脚部片である。ナデ・指押さえによる成形。これらは、９世紀前半のものであろう。

B15－２区ＳＫ－30（26～32）

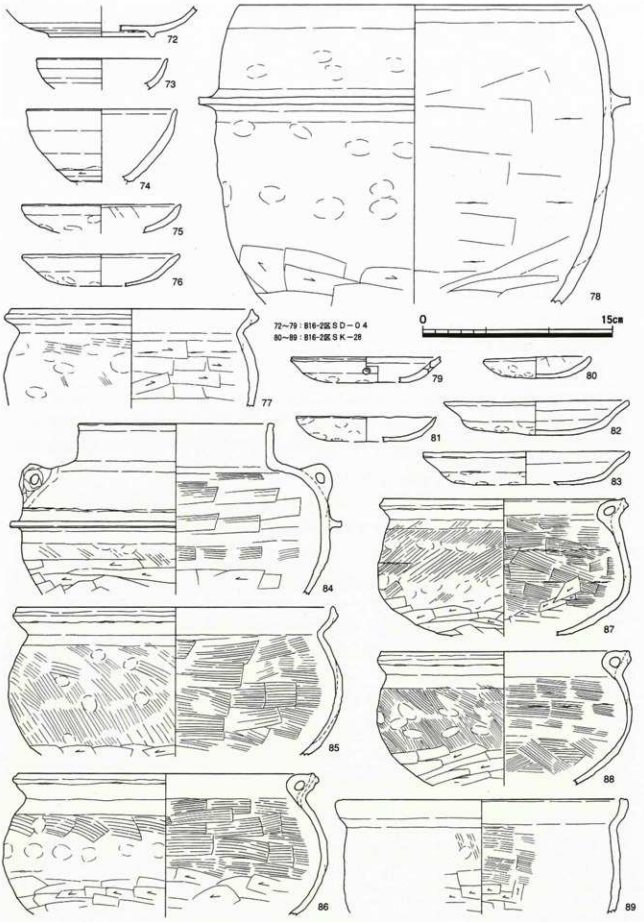
26～29・32は須恵器である。26・27は無台坏で、26は底部外面回転ヘラケズリ、27は体部から底部にかけて回転ヘラケズリで部分的に不定方向のヘラケズリ。28は坏の口縁部、29は碗の口縁部でいずれも内外面は回転ナデ。32は摘み蓋で、端部は短く屈折する。頂部には偏平な摘みが付く。天井部外面回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデ。30・31は製塩土器で、口縁部は外反気味で端部はやや尖る。脚部は細い棒状となる。いずれもナデ・指押さえによる成形。これらは、９世紀前半のものであろう。

B15－２区ＳＫ－18（33～38）

33は灰釉系陶器碗で、高台部は低く小さく、口縁部は内弯気味に立ち上がる。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。東濃型。14世紀末～15世紀初頭。34は常滑窯産片口鉢で、底部は平坦で体部は外上方へ直線的に伸びる。内面は、使用のためか非常に滑らかとなる。35は土師器皿で、いわゆるロクロ成形。36・37は同小皿で、36の口縁部は明確に立ち上がり、ヨコナデが施される。口縁端部を打ち欠いているようである。37は口縁部が緩やかに立ち上がる。内面ナデ・外面ナデ・指押さえ。38は同茶釜形鍋で、体部は丸味を帯び最大径付近に短い鍔が付く。肩部には把手が付く。鍔部ヨコナデ、外面ナデ、内面板ナデ。鍔部から下は煤が付着。これら土師器は、15世紀後半のものであろう。

B15－２区ＳＫ－31（39～41）

39は須恵器無台坏で、底部は回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデ。40は同摘み蓋で、天井部外面回転ヘラケズリ。41は製塩土器で、脚部は細い棒状となる。ナデ・指押さえによる成形。これらは、９世紀前半のものであろう。



第24図　Ｂ区出土遺物実測図－３（１／３）

B16－1区SK－9（49～53）

49～51は土師器である。49は皿で、底部は平坦で口縁部は明確に立ち上がる。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。50は小皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。51はくの字形鍋で、頸部は屈曲し端部は摘み上げるようになる。口縁部ヨコナデ。これらは、16世紀前半のものであろう。

52は炉壁で、平坦となる接合部が見られ、溶解炉の一部であろう。内面は部分的に白くなり、鉄分が付着する。53は鋳型の外壁の可能性があり、側面に指ナデの痕が見られる。胎土はやや粗雑である。

B16－1区SK－14（54・55）

54は土師器小皿で、口縁部は僅かに立ち上がる。口縁端部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。16世紀代のものであろう。55は不明土製品で、棒状粘土を握るようにして成形。表面は被熱により白色化している。鍛冶・鋳造関係のものであろう。

B16－1区SK－18（56・57）

56は土師器小皿で、器壁が薄く口縁部は内弯気味に立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。57は同皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。口縁部ヨコナデ。これらは、16世紀代のものであろう。

B16－1区SK－20（58～63・282）

58は灰釉陶器碗で、高台は低い三角形状となる。底部外面糸切り。10世紀後半。59は灰釉系陶器碗で、高台は低く偏平となる。底部外面糸切り後ナデ、これ以外は回転ナデ。13世紀後半。60は土師器小皿で、器壁が薄く口縁部は内弯気味に立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。15～16世紀のものであろう。61・62は不明土製品で、棒状粘土を握るようにして成形。いずれも被熱により変色している。63は炉壁で、弧状になった部分に羽口が接していたと考えられる。表面は融解したものや鉄分が付着する。282は鋳型片で、角となる部分や沈線が僅かに残る。胎土は精良。

B16－2区SK－28（80～89）

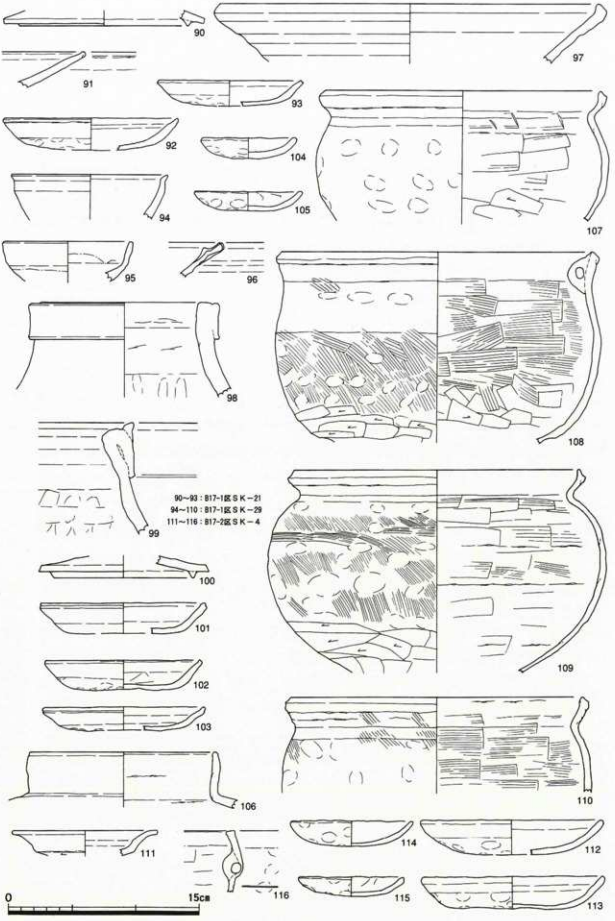
80～89は土師器である。80・81は小皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。82・83は皿で、口縁端部は外反気味となる。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。84は茶釜形鍋で、口縁部は垂直気味に伸び端部は面となる。体部最大径付近には短い鍔が、肩部には把手が付く。口縁部と鍔部はヨコナデ、体部外面下半はヘラケズリ。85～89はくの字形鍋で、頸部は屈曲し端部は丸く収めるものが多い。89は体部がやや四角くなり頸部の屈曲は弱い。口縁部ヨコナデ、内面板ナデ、外面ハケメ・指押さえで、内外下半部はヘラケズリするものが多い。いずれも体部外面には煤が付着している。これら土師器は、16世紀前半のものであろう。

B17－1区SK－21（90～93）

90～93は土師器である。90は蓋で、端部は面となり内面には断面三角形の返りが付く。天井部外面はヘラケズリ後ナデ。91は盤で、口縁部は直線的に伸び端部は丸く収める。口縁部ヨコナデ、内外面ナデで、内面は焦げている。92・93は皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。92の内面は焦げている。これらは、16世紀後半のものであろう。

B17－1区SK－29（94～110）

94～99は陶器である。94は天目茶碗で、口縁端部を小さく屈曲させる。内外面に鉄釉。大窯1。



第25図　Ｂ区出土遺物実測図－４（１／３）

95は縁釉小皿で、口縁部は内弯気味に立ち上がる。口縁端部に灰釉。96・97は擂鉢で、口縁端部が受け口状に屈曲したり(96)、摘み上げるようになる(97)。内外面に錆釉。95 ～ 97は古瀬戸後Ⅳ新。98は常滑窯産広口壺で、口縁端部は薄く折り返す。なお、これら以外に陶器平碗・端反皿・擂鉢・盤類などの小片があり、いずれも古瀬戸後期～大窯１段階までである。

100～110は土師器である。100は蓋で、端部は面となり内面には断面三角形の返りが付く。天井部外面はヘラケズリ後ナデ。端部に煤が付着。101～103は皿で、口縁部は強いヨコナデにより屈曲する。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。104・105は小皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。106は茶釜形鍋で、口縁部は短く垂直気味に伸び、端部は丸く収める。107～110はくの字形鍋で、頸部は屈曲し端部は丸く収めるものが多い。108はほとんど屈曲せず、また109は大きく屈曲し端部は摘み上げるようになる。体部外面は107を除いてハケメが見られる。これらは、94～99に伴う15世紀末葉～16世紀前葉のものであろう。

B17－２区ＳＫ－４（111～121）

111は陶器腰折皿で、口縁部は大きく外反する。高台付近を除いて灰釉。古瀬戸後Ⅳ新。これ以外に陶器擂鉢の小片があり、大窯１。

112～120は土師器である。112・113は皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。114・115は小皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。114は口縁端部に僅かに煤が付着。116は半球形鍋で、端部は面となり外面にはヘラ描きの沈線が施される。口縁端部ヨコナデで、外面には煤が付着。117～120はくの字形鍋で、頸部は屈曲し端部は僅かに摘み上げるようになる。117を除いて外面にハケメが見られる。いずれも外面に煤が付着。これらは、111などの陶器に伴う15世紀末葉～16世紀前葉のものであろう。

121は不明土製品で、手捏ねによる成形で上部は指で摘んでいる。被熱などにより変色・変質している。鍛冶・鋳造に関連したものであろう。

B17－２区ＳＫ－２（122～128）

122・123は常滑窯産甕である。122は「Ｎ」字状の口縁端部となる赤物で、16世紀前半。123は口縁端部が「┌」状でより素焼きに近く、18世紀後半以降のものであろう。124は土師器皿で、いわゆるロクロ成形。底部外面糸切りで、口縁端部には油煙。

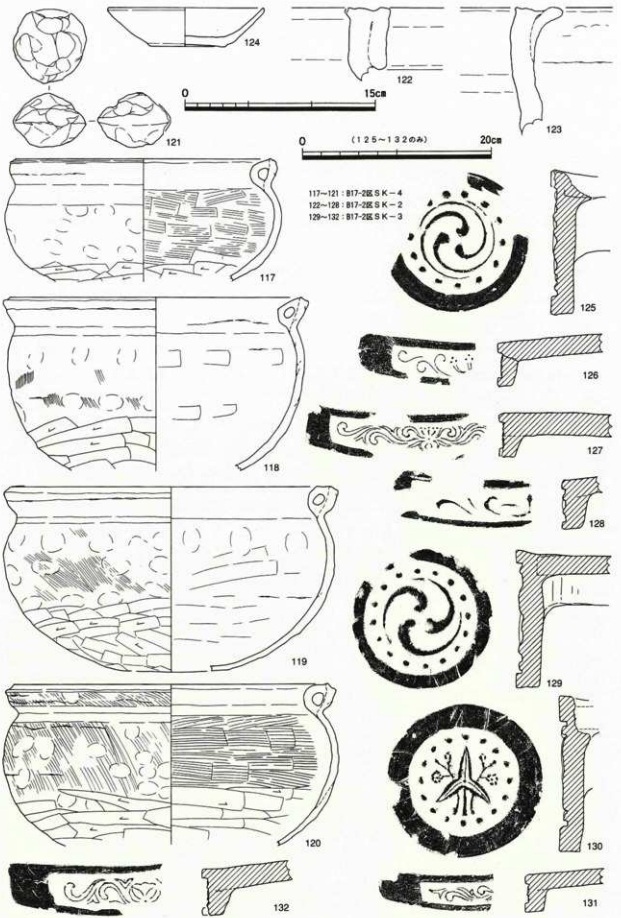
125は軒丸瓦で、珠文は小さく巴文は右巻で細く長い。126～128は軒平瓦で、126・127は中心飾りが３葉で先に文様を付け、両側の唐草文は単線や複線となる。128は、太い線で雲状の表現となる。

B17－２区ＳＫ－３（129～132）

129･130は軒丸瓦で、129の珠文は小さく巴文は右巻でやや太く長い。130は水野家(忠清)の家紋「丸に沢瀉」をかたどった家紋瓦。131・132は軒平瓦で、中心飾りは先の開いた花文様(132)で、両側には２反転した複線の唐草文が見られる。

B17－２区ＳＫ－９（133 ～ 135）

133は土師器小皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。134は同くの字形鍋で、頸部は屈曲し端部は摘み上げるようになる。体部外面にはハケメが見られる。135は同茶釜形鍋で、口縁部は短く垂直気味に立ち上がり、端部は僅かに面となる。肩部に把手が付く。口縁部



第26図　B区出土遺物実測図－5（1／3・1／4）

ヨコナデ、体部内面板ナデ、外面ナデ・指押さえ。これらは、16世紀前半のものであろう。

B17－２区ＳＫ－14（136～145）

136は陶器腰折皿で、高台部は削り出しで口縁部は大きく外反する。高台付近を除いて灰釉。古瀬戸後Ⅳ新。137は同天目茶碗で、高台部は低く削り出し。高台付近は錆釉の化粧掛け、これ以外は鉄釉。古瀬戸後Ⅳ新～大窯１。138は同擂鉢で、口縁端部は上下に肥厚する。内外面に錆釉。大窯１・２。

139～141は土師器皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。141は内外面が全体的に焦げている。142・143は同小皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。144・145は同くの字形鍋で、頸部は緩やかに屈曲し端部は摘み上げるようになる。144の体部外面にはハケメ。これらは、136～138に伴う16世紀前半のものであろう。

B18－１区ＳＫ－14（146）

146は青磁碗で、口縁部は内弯気味に立ち上がり端部は丸く収める。外面には線描きの蓮弁文が施される。中国製磁器で、15世紀後半のものであろう。

B18－１区ＳＫ－22（147・148）

147は土師器皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。148は同くの字形鍋で、頸部は屈曲し端部は摘み上げるようになる。体部外面にはハケメが施される。これらは、16世紀前半のものであろう。

B18－２区ＳＫ－７（149・150）

149は陶器平碗で、口縁部は緩やかに屈曲して外上方へ伸びる。高台付近を除いて灰釉。古瀬戸後Ⅳ古。150は土師器くの字形鍋で、頸部は屈曲し端部はやや肥厚して角張る。口縁部ヨコナデ、内面板ナデ、外面ナデ・指押さえで下半はヘラケズリ。これらは、15世紀中葉のものであろう。

B19－１区ＳＫ－７（154・155）

154は白磁皿で、底部は平底となる。中国製磁器で、14世紀代のものであろうか。155は土錘で、ナデ・指押さえによる成形。時期は不明。

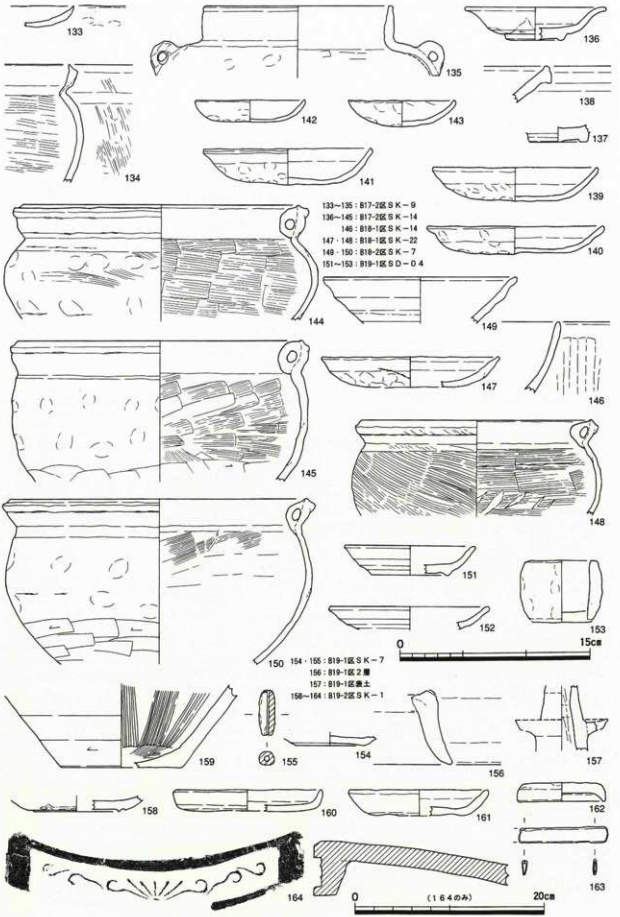
B19－２区ＳＫ－１（158～164）

158は陶器丸碗で、高台部は僅かに削り出し。全面に灰釉。大窯４前。159は同擂鉢で、体部は直線的に外上方へ伸びる。全面に錆釉。登第１・２小。160・161は土師器皿で、160は端部近くが垂直気味に立ち上がる。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。162は同焼塩壺蓋で、上面はやや曲面的で側面が緩やかに外側に開く。内面はナデで布目痕はなく、外面はナデ・指押さえ。163は銅製の小柄鞘で、表面に文様などは見られない。164は軒平瓦で、瓦当の中心飾りは５葉で、その両側に３反転した単線の唐草文が配される。これらは、17世紀前半のものであろう。

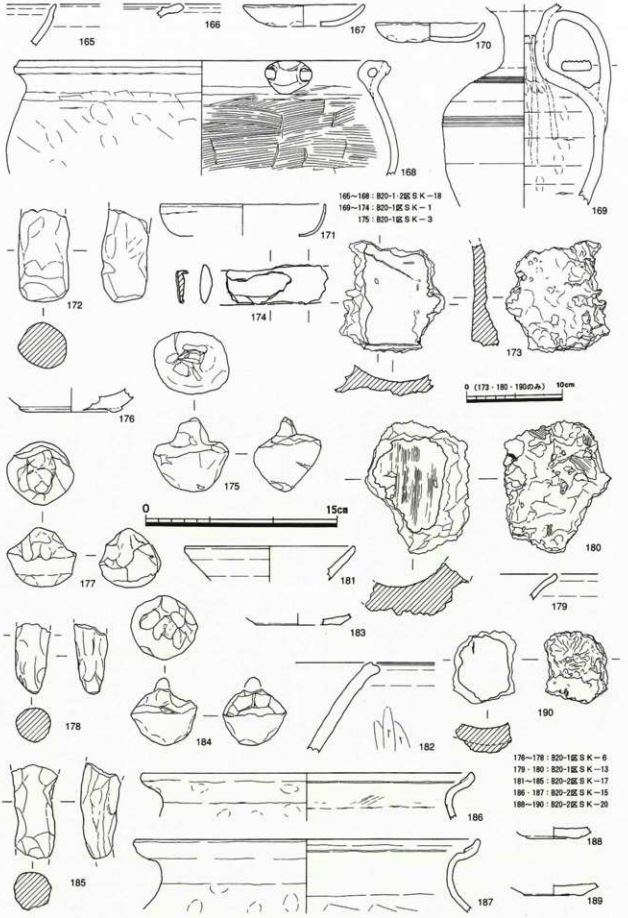
B20－１・２区ＳＫ－18（165～168・284）

165は陶器天目茶碗で、口縁端部は僅かに屈曲する。内外面は鉄釉。古瀬戸後Ⅱ。166は同折縁深皿で、口縁端部は水平気味となる。内外面に灰釉。古瀬戸後Ⅳ新。これ以外に、陶器は平碗・擂鉢などの小片があり、いずれも古瀬戸後期のものである。

167は土師器小皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。168は同くの字形鍋で、頸部は緩やかに屈曲し端部はやや丸くなる。内耳が３方向に付く。口縁部ヨコナデ、内面



第 27 図　Ｂ区出土遺物実測図－６（１／３・１／４）



第28図　Ｂ区出土遺物実測図－７（１／３・１／４）

板ナデ、外面ナデ・板ナデ。これらは、165などの陶器に伴う15世紀後半のものであろう。

284は鋳型で、段となった部分が僅かに残る。胎土は精良。

B20－１区ＳＫ－１（169～174）

169は陶器水注で、肩部に３～４条の櫛描横線文が施され、把手部には５条の小突線を配す。外面から口縁部内面に灰釉。古瀬戸前Ⅳ。13世紀後半のものであろう。170・171は土師器小皿で、170の口縁部は緩やかに立ち上がる。171の口縁部は内弯気味に高く立ち上がる。いずれも内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。このうち171は169に伴う可能性がある。170は15～16世紀のものと考えられ、混入であろう。

172は不明土製品で、棒状粘土を手で握ったような形となる。表面は被熱などにより変色・変質。173は炉壁で、内側は羽口が接した部分となる。外側は被熱などにより変質、黒紫色に変色し、部分的には白いものが付着する。174は鉄刀の刃部と考えられるが、錆による膨らみが著しい。

B20－１区ＳＫ－２（277）

277は鋳型で、比較的大きく平坦な破片である。表面は黒色に変色している。胎土は精良。

B20－１区ＳＫ－３（175）

175は不明土製品で、上部は指で摘んだようになる。被熱のため変色。下部には籾殻痕が見られる。

B20－１区ＳＫ－６（176～178）

176は灰釉系陶器碗で、高台は低く偏平となる。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。13世紀後半のものであろう。177・178は不明土製品で、いずれも被熱により変色・変質。

B20－１区ＳＫ－13（179・180）

179は灰釉系陶器碗で、口縁端部は僅かに外反気味となる。13世紀代のものであろう。

180は炉壁で、内側は羽口が接した部分となり、外側は被熱などにより変質し鉄分も付着している。

B20－２区ＳＫ－17（181～185）

181は灰釉系陶器碗で、口縁部は直線的に外上方に伸びる。182は同片口鉢で、口縁端部は凹線状に窪む。口縁部回転ナデで、外面は不定方向のヘラケズリ。183は土師器碗で、いわゆるロクロ成形。底部は平坦で、外面糸切り。これらは、13世紀代のものであろう。

184・185は不明土製品で、いずれも被熱などにより変質・変色。184の下部には籾殻痕が見られる。

B20－２区ＳＫ－15（186・187）

186・187は土師器伊勢型鍋で、口縁部は大きく外反し端部は薄く折返し受け口状となる。口縁部ヨコナデ、内面ナデ・板ナデ、外面ナデ・指押さえ。13世紀後半～14世紀前半のものであろう。

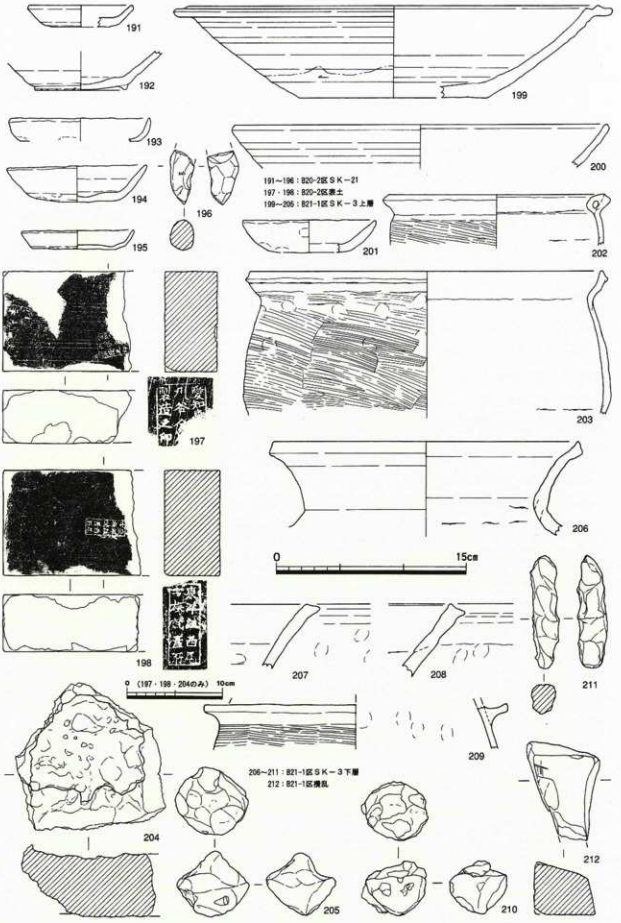
B20－２区ＳＫ－20（188～190・285）

188は灰釉系陶器小皿で、底部は広く平坦で口縁部は小さく立ち上がる。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。189は土師器碗で、いわゆるロクロ成形。これらは、13世紀後半のものであろう。

190は炉壁の羽口が接した部分であるが、外側はあまり被熱していない。炉外に当たる部分であろう。285は鋳型と考えられ、断面円形の小さいものである。胎土は精良。

B20－２区ＳＫ－21（191～196）

191は灰釉系陶器小皿で、底部は平坦で口縁部は小さく立ち上がる。底部外面糸切り、これ以外は回



第29図　B区出土遺物実測図－8（1／3・1／4）

転ナデ。192は同碗で、高台は小さな断面三角形となる。いわゆる東濃型。13世紀後半のものであろう。

193～195は土師器小皿で、193の口縁部は内弯気味に立ち上がる。194・195の口縁部はヨコナデで緩やかに立ち上がる。これらは、191・192に伴うものであろう。

196は不明土製品で、ナデ・指押さえによる成形。被熱による変質・変色は少ない。

B21－１区ＳＫ－３上層（199～205）

199は陶器折縁深鉢で、口縁端部は水平気味に屈折する。底部外面回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデ。底部外面付近を除いて灰釉。なお、削れ口には補修用の漆が見られる。古瀬戸後Ⅱ。200は同直縁大皿で、口縁端部は丸く収める。内外面に灰釉。古瀬戸後Ⅳ古。

201は土師器小皿で、口縁部は比較的高く立ち上がる。器壁がやや厚い。202・203は同くの字形鍋で、頸部は屈曲し体部は偏平で四角に近い。口縁端部は、摘み上げたようになるもの(202)や丸くなるもの(203)がある。いずれも、体部外面にハケメが見られる。これらは、15世紀中葉～後半のものであろう。

204は溶解炉の炉壁と考えられ、内面は溶解し鉄分なども付着する。205は不明土製品で、下部には耕盤痕が見られる。被熱により淡灰色となる。

B21－１区ＳＫ－３下層（206～211・287）

206は灰釉系陶器壺と考えられるが、内外面は摩滅が著しい。口縁部は外反し、端部は肥厚して外傾面となる。13世紀代のものであろう。207・208は陶器片口鉢で、いずれも常滑窯産。口縁端部は外傾した面となる。これらは、14世紀代であろう。209は土師器羽釜で、鍔部はやや斜めで端部は摘み上げたようになる。体部外面はハケメで、鍔部下半には煤が付着。14世紀～15世紀前半のものであろう。

210・211は不明土製品で、いずれも被熱している。211は棒状粘土を手で握ったような形となる。287は椀形滓で、径８～９㎝程の大きさである。

B21－３区ＳＫ－15（223～225）

223は陶器甕で、常滑窯産。底部は未調整。224は灰釉系陶器碗で、無高台。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。14世紀代のものであろう。

225は溶解炉の炉壁と考えられ、内面は溶解し鉄分なども付着している。

B21－３区ＳＫ－17（279）

279は鋳型で、「く」の字状に屈曲した部分が残るが、黒色に変色している。胎土は精良。

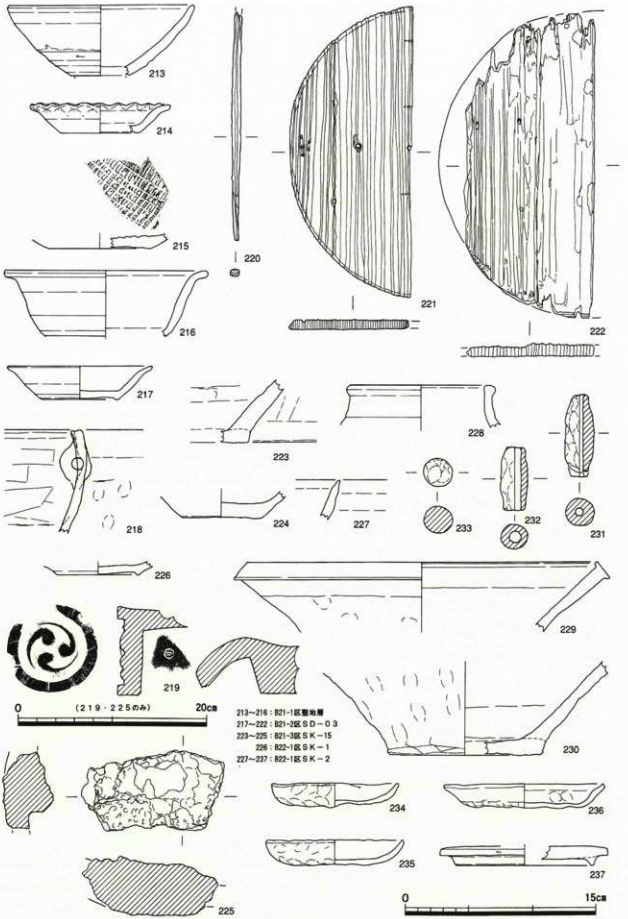
B22－１区ＳＫ－１（226）

226は陶器丸皿で、高台部は削り込み。全面に灰釉。大窯２・３。16世紀中葉～後半のものであろう。

B22－１区ＳＫ－２（227～241）

227～230は陶器である。227は天目茶碗で、口縁端部は僅かに屈曲する。内外面に鉄釉。228は口広有耳壺で、口縁端部はやや肥厚して丸く収める。内外面に鉄釉。古瀬戸後Ⅳ。229は常滑窯産片口鉢で、口縁端部は上下に広げた面となる。口縁端部は丁寧なヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。230は常滑窯産甕で、底部外面は未調整。これら以外に、陶器平碗・腰折皿・緑釉小皿・擂鉢・盤類・桶などの小片があり、一部古瀬戸中期のものもあるが、主体は古瀬戸後期～大窯１段階までである。

231・232は土錘で、いずれもナデ・指押さえによる成形。233は陶丸で、ナデ・指押さえによる成形。



第30図　B区出土遺物実測図－9（1／3・1／4）

234～241は土師器である。234・235は小皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。内面ナデ・外面ナデ・指押さえ。236は皿で、口縁部はヨコナデにより屈曲する。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。237は蓋で、端部は面となり内面には断面三角形の返りが付く。天井部外面は丁寧なナデ。238・239はくの字形鍋で、頸部の屈曲は緩やかとなり、端部は摘み上げたようになるもの(238)や外側につまみ出すもの(239)が見られる。口縁部ヨコナデ、内面板ナデ、外面ナデ・指押さえ。240・241は半球形鍋で、口縁部は内弯気味に伸び端部は面となる。体部最大径付近に、ヘラ描き沈線が施される(241)。口縁端部ヨコナデ、内面板ナデ、外面ナデ・指押さえで、両下半部はヘラケズリ。これらは、陶器に伴う15世紀末葉～16世紀前葉のものであろう。

B22－１区ＳＫ－４（242～245）

242は陶器天目茶碗で、口縁端部はやや肥厚するが屈曲はほとんどない。高台付近は露胎、これ以外は鉄釉。古瀬戸後Ⅲ。244は同常滑窯産玉縁口縁壺で、肩部が張り口縁部は短く立ち上がる。玉縁状の折返しは小さく丸味が強い。15世紀後半。

243・245は土師器くの字形鍋で、頸部は屈曲し端部は摘み上げるようになる。体部外面にハケメが目立つ。これらは、15世紀後半のものであろう。

B22－３区土壁内（246～249）

246は天目茶碗で、口縁端部近くが僅かに屈曲する。高台付近は薄い錆釉の化粧掛け、これ以外は鉄釉。古瀬戸後Ⅳ古。これ以外に折縁深皿(古瀬戸中Ⅲ・Ⅳ)や擂鉢(古瀬戸後Ⅳ古)の小片が見られる。

247は灰釉系陶器碗で、高台は四角くしっかりしている。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。12世紀後半～13世紀前半。248は須恵器甑などの把手であろう。ナデ・指押さえによる成形。249は土師器くの字形鍋で、頸部は屈曲し端部はやや丸く収める。口縁部外面にもハケメが見られる。246などの陶器に伴う15世紀後半のものであろう。

B22－３区ＳＫ－１（250）

250は軒平瓦で、瓦当の中心飾りは５葉で、その両側に２あるいは３反転した単線の唐草文。なお、焼成前に外縁の角が斜めに削られている。

B23－１区ＳＫ－20（257）

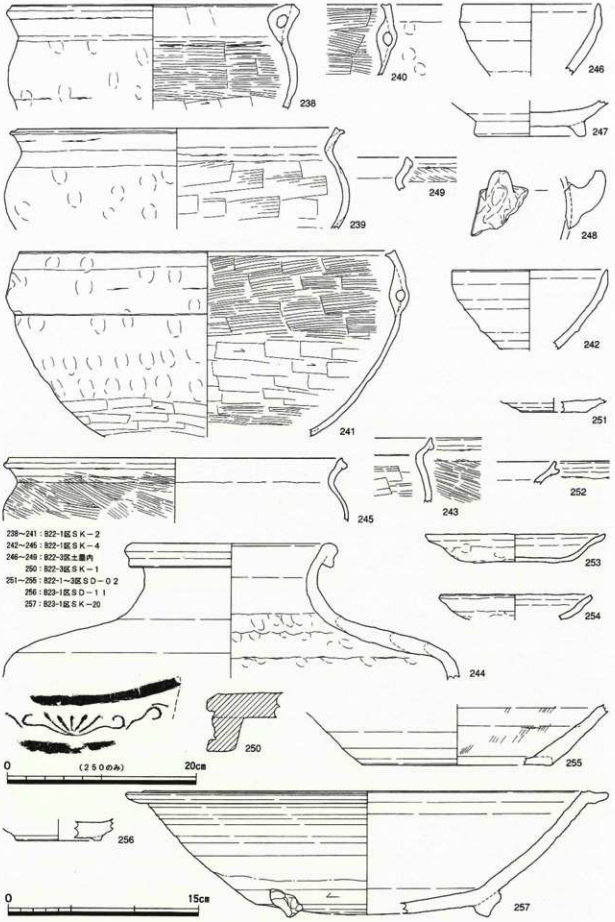
257は陶器折縁深鉢で、口縁端部は水平気味となる。底部外面には三方に脚が付く。底部外面を除いて灰釉。古瀬戸後Ⅱ。14世紀末葉～15世紀初頭のものであろう。

B23－２区ＳＫ－31（267～270）

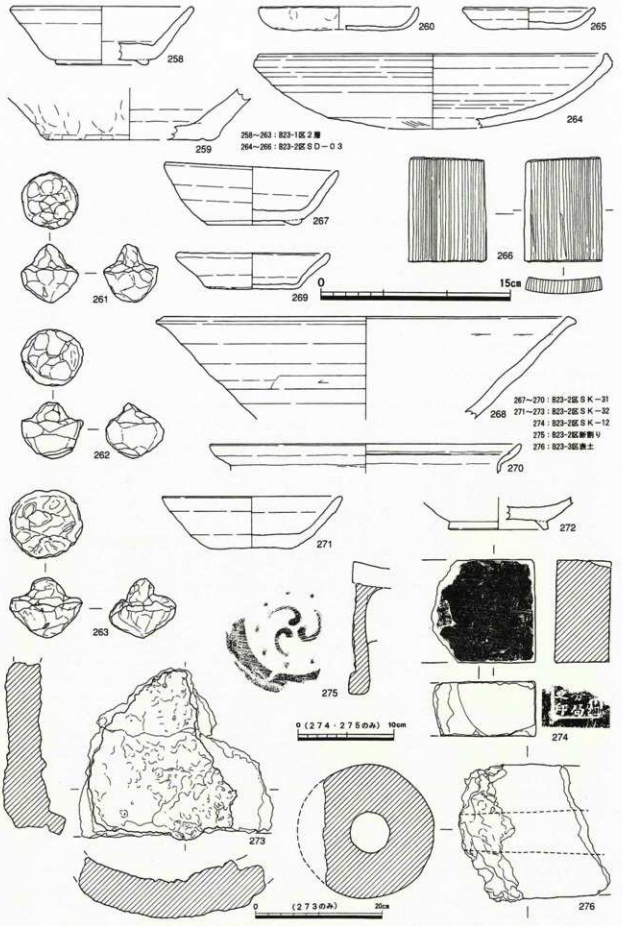
267は灰釉系陶器碗で、高台は低く丸味を帯びる。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。268は同片口鉢で、口縁部は直線的に伸び端部は外傾した面となる。体部外面下半回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデ。これ以外に陶器折縁Ⅲ・水注の小片があり、いずれも古瀬戸中Ⅰ・Ⅱ。これらは、13世紀後葉～14世紀前葉のものであろう。269は土師器皿で、底部は平坦で口縁部は高く立ち上がる。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。270は同伊勢型鍋で、口縁部は大きく外反し端部は薄く折返し受け口状となる。口縁部ヨコナデ。これらは、267・268に伴う時期のものであろう。

B23－２区ＳＫ－32（271～273）

271は灰釉系陶器碗で、無高台となる。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。14世紀代。272は同



第 31 図　Ｂ区出土遺物実測図－10（1／3・1／4）



第32図　Ｂ区出土遺物実測図－11（1／3・1／4・1／6）

碗で、高台は高くしっかりとしている。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。13世紀前葉。

273は溶解炉の炉壁で、水平に剥離した部分は炉の継ぎ目であろう。また、右上部分は壁が内側に立ち上がり、この部分に羽口が取り付くのであろう。内面は溶解し黒紫色となり、銅滴なども付着。

B23－２区ＳＫ－12（274）

274は煉瓦で、平面に刻印あり。「愛知東洋組刈谷分局製造之印」であろう。明治15～20年頃製造。

表土地

表土（11・12／157／197・198／276）

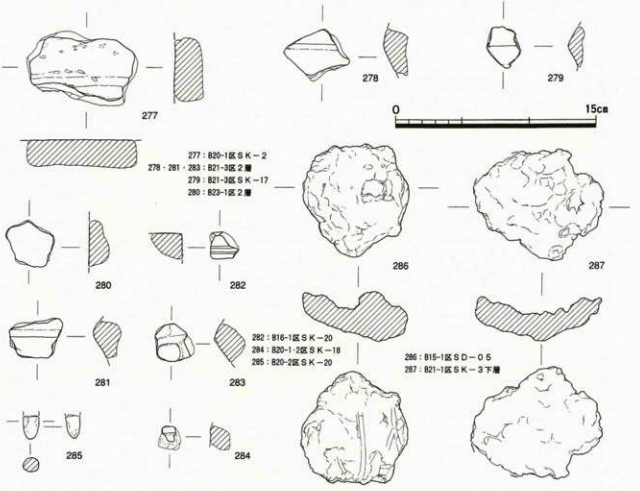
11・12は煉瓦で、平面に刻印が見られる。11の一面には「東洋組西尾士族就産所」、もう一面には「○」、12は欠けているが「愛知東洋組刈谷分局製造之印」であろう。明治15～20年頃製造。

157は陶器燭台で、外面には受皿状のものが付く。外面に灰釉。古瀬戸後Ⅰ・Ⅱ。

197・198は煉瓦で、平面に刻印。197は「愛知東洋組刈谷分局製造之印」、198は「東洋組西尾士族就産所」で、明治15～20年頃製造。276は羽口で、外径10.6cm、内径3.0～3.5cmで、表面はナデによる調整。端部には溶解した付着物が見られる。

２層（64～67／68～71／156／278・281・283／258～263・280）

64は陶器丸皿で、高台部は僅かに削り出し。全面に灰釉。大窯３前。65は土師器茶釜形鍋で、口縁



第33図　Ｂ区出土遺物実測図－12（1／3）

部は垂直気味で端部は面となる。体部最大径付近に鍔、肩部に把手が付く。体部外面下半ハケメ・ヘラケズリ。66は同くの字形鍋で、頸部は大きく屈曲し端部は摘み上げるようになる。外面にハケメが目立つ。67は銭貨「永樂通寶」。68は陶器仏供で、底部は突出し、その外面は糸切り。内面に鉄釉。古瀬戸後Ⅳ古。69は同壺で、底部は平坦で口縁部は直線的に外上方へ伸びる。常滑窯産。70・71は土師器皿で、口縁端部はヨコナデで窪んだり屈曲する。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。

156は陶器煜炉と考えられ、脚部はやや開き気味となる。外面は火を受けている。素焼きに近い焼成で、調整はヨコナデ。18～19世紀のものであろう。

278・281・283は鋳型で、「く」の字状の部分が残る。表面は黒色に変色(278・283)。胎土は精良。

258は灰釉系陶器碗で、高台は低く丸味を帯びる。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。259は常滑窯産甕で、底部外面は未調整。260は土師器小皿で、底部は広く端部近くが僅かに立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。261 ～ 263は不明土製品で、上部はいずれも指で摘むようになる。下部には籾殻痕などが見られる。被熱などによって表面は変質・変色している。280は鋳型で、平坦な部分が残っている。表面は黒色に変色している。胎土は精良。

B21－１区攪乱（212）

212は砥石で、石質は凝灰岩。破面以外は使用痕が見られるが、火を受けて焦げている。

B21－１区整地層（213～216）

213～216は陶器である。213は平碗で、高台付近は露胎、これ以外は灰釉。古瀬戸後Ⅳ古。214は稜皿で、口縁端部はひだ状になる。全面に鉄釉。大窯３後。215は卸皿で、底部外面は糸切り。内面に灰釉。古瀬戸後。216は中鉢で、口縁端部は外反する。内外面に灰釉。古瀬戸中Ⅰ・Ⅱ。

B23－２区断割り（275）

275は軒丸瓦で、珠文は小さく少ない。右巻の巴文は細くそのまま圏線につながるようである。瓦当面の凹凸は少なく、笵の木目が目立つ。ＳＤ－０３から出土した可能性が高い。

注１　豊橋市教育委員会　1999『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第50集　吉田城址（Ⅲ）』第８図参照

注２　出土遺物の編年的な位置付けについては、第３章の注２で示した文献を主に参考にしている。

第２表　Ｂ区出土遺物観察表

出No.・遺物No.	地区	遺構	器種	分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等	備考
22－1	B15-1-2	SD－05	T	縄輪小皿		(2,1)			密	良好	淡灰白色	口縁部回転ナデ	内外面に灰釉／古瀬戸後Ⅱ
2	B15-1-2	SD－05	T	片口鉢		(4,5)			やや粗	良好	淡赤褐色	口縁部回転ナデ	常滑窯産
3	B15-1-2	SD－05	H	皿	14,7	2,3			密	良好	淡褐色	口縁部ココナデ	
4	B15-1-2	SD－05	H	皿	10,6	1,5			密	良好	暗褐色	口縁部ココナデ	口縁端部に油煙付着
5	B15-1-2	SD－05	H	鍋	23,6	(5,6)			密	良好	暗褐色	体部内面板ナデ	外面に煤付着
6	B15-1-2	SD－05	H	鍋		(2,8)			密	良好	淡乳褐色	口縁部ココナデ	
7	B15-1-2	SD－05	D	羽口	長(8,2)	径10,6	孔径1.9-2.3		密	良好	淡赤褐色	外面ナデ整形	
8	B15-1-2	SD－05	D	土錘	長(3,8)	径1,0	孔径0,3	重量3.5g	密	良好	淡褐色	ナデ・指押さえによる整形	
9	B15-1-2	SD－05	D	とべり	9,2	(2,4)			やや粗	良好	暗灰色	ナデ・指押さえによる整形	口縁部発泡、内面黒紫色
10	B15-1-2	SD－05	I	銭貨	径2,5			重量2.7g					元豊通寶
11	B15-1	表土	D	煉瓦	長(17,5)	幅10,9	厚5,7		密	良好	赤褐色	平面が細編状を呈す	刻印、○印あり
12	B15-1	表土	D	煉瓦	長(11,4)	幅(6,1)	厚5,6		密	良好	淡赤褐色	平面が細編状を呈す	刻印あり
13	B15-2	SD－09	S	無台坏		(1,0)			密	良好	淡灰色	底部外面回転ヘラケズリ	
14	B15-2	SD－09	S	壺		(3,2)	8,8		密	良好	淡灰色	体部外面下半回転ヘラケズリ	
15	B15-2	SD－09	H	碗	12,6	(2,9)			密	良好	明褐色	口縁部回転ナデ	
16	B15-2	SD－09	H	碗	11,2	2,5	5,8		密	良好	淡乳褐色	底部外面糸切り	
17	B15-2	SK－19	H	小皿		(2,2)			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	口縁端部に煤付着
18	B15-2	SK－19	H	鍋		(2,7)			密	良好	淡乳褐色	口縁部ココナデ	外面に煤付着
19	B15-2	SK－19	H	鍋	12,6	(3,1)			密	良好	淡褐色	口縁部ココナデ	茶筌形
20	B15-2	SK－19	D	土錘	長(3,9)	径1,2	孔径0,4	重量4.2g	密	良好	淡褐色	ナデ・指押さえによる整形	
21	B15-2	SK－19	Z	丸碗	7,4	(4,4)			密	良好	淡灰白色	口縁部回転ナデ	染付丸碗
22	B15-2	SK－28	S	無台坏		(2,0)	9,8		密	良好	淡青灰色	底部外面回転ヘラケズリ	
23	B15-2	SK－28	S	碗	11,4	2,7	5,4		密	不良	淡乳褐色	底部外面糸切り	土師器に近い色調
24	B15-2	SK－28	S	鍋み蓋	17,3	(3,3)			密	良好	淡灰色	天井部外面上／頂転ヘラケズリ	
25	B15-2	SK－28	H	製塩土器		(2,9)			やや粗	良好	淡赤褐色	外面ナデ・指押さえ	
26	B15-2	SK－30	S	無台坏		(5,1)	9,8		密	良好	淡青灰色	底部外面回転ヘラケズリ	
27	B15-2	SK－30	S	無台坏		(2,3)	8,2		密	良好	淡灰色	底部外面不定ヘラケズリ	
28	B15-2	SK－30	S	坏		(3,5)			密	良好	灰色	口縁部回転ナデ	
29	B15-2	SK－30	S	碗		(4,1)			密	ややｸﾞﾑ	淡灰色	口縁部回転ナデ	
30	B15-2	SK－30	H	製塩土器		(2,8)			やや粗	良好	淡赤褐色	内外面ナデ・指押さえ	
31	B15-2	SK－30	H	製塩土器		(3,2)			やや粗	良好	淡赤褐色	内外面ナデ・指押さえ	
32	B15-2	SK－30	S	鍋み蓋	14,4	3,3		鍋み径2,9	密	良好	暗灰色	天井部外面上／頂転ヘラケズリ	SK－28と接合
33	B15-2	SK－18	P	碗	12,8	4,1	4,2		密	良好	淡灰色	底部外面糸切り	北部系
34	B15-2	SK－18	T	片口鉢		(6,7)	11,6		密	良好	暗茶灰色	体部外面板ナデ	常滑窯産
35	B15-2	SK－18	H	碗	12,6	(2,7)			密	良好	淡褐色	口縁部回転ナデ	
36	B15-2	SK－18	H	小皿	7,7	1,2			密	良好	淡赤褐色	外面ナデ・指押さえ	
37	B15-2	SK－18	H	小皿	8,3	1,9			密	良好	淡乳褐色	外面ナデ・指押さえ	
38	B15-2	SK－18	H	鍋		(5,3)		最大径24,0	密	良好	淡乳褐色	体部内面板ナデ	茶筌形
39	B15-2	SK－31	S	無台坏	14,4	(5,0)			密	良好	淡灰色	底部外面回転ヘラケズリ	
40	B15-2	SK－31	S	鍋み蓋		(2,4)		鍋み径2,8	密	良好	淡灰色	天井部外面回転ヘラケズリ	
41	B15-2	SK－31	H	製塩土器		(3,2)			やや粗	良好	淡赤褐色	ナデ・指押さえによる整形	
23－42	B16-1	SD－04	T	天目茶碗	12,4	(5,7)			密	良好	淡赤褐色	体部外面下半回転ヘラケズリ	内外面に鉄釉／大窯2
43	B16-1	SD－04	T	縄輪小皿	9,8	(2,1)			密	良好	淡乳褐色	口縁部回転ナデ	口縁端部に灰釉／古瀬戸後Ⅱ古
44	B16-1	SD－04	T	壺	長径17,8	(3,6)		短径15,6	密	良好	灰色	口縁部回転ナデ	内外面に鉄釉
45	B16-1	SD－04	H	小皿	12,2	(1,8)			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
46	B16-1	SD－04	H	小皿	11,8	(1,9)			密	良好	淡赤褐色	外面ナデ・指押さえ	
47	B16-1	SD－04	H	小皿	7,8	1,5			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
48	B16-1	SD－04	H	鍋	18,6	(4,2)			密	良好	淡褐色	体部内面板ナデ	
49	B16-1	SK－9	H	皿	12,0	2,9			密	良好	淡褐色	口縁部ココナデ	
50	B16-1	SK－9	H	小皿	7,4	(1,4)			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
51	B16-1	SK－9	H	鍋		(1,8)			密	良好	淡乳褐色	口縁部ココナデ	
52	B16-1	SK－9	D	炉壁	縦(14,1)	横(18,6)	厚4,5-5,3		やや粗	良好	淡赤褐色他	ナデ・指押さえによる整形	内面溶解、鉄津付着
53	B16-1	SK－9	D	鞴型外型?	縦11,8	横(11,6)	厚6,0-6,8		やや粗	良好	淡赤褐色	ナデ・指押さえによる整形	表面にスサ・籾殻痕
54	B16-1	SK－14	H	小皿	7,4	(1,2)			密	良好	淡褐色	口縁端部を煤がにココナデ	
55	B16-1	SK－14	D	不明土製品	長(5,9)	幅2,8			やや粗	良好	淡赤褐色	ナデ・指押さえによる整形	被熱により変色
56	B16-1	SK－18	H	小皿	8,2	(2,6)			密	良好	淡灰白色	外面ナデ・指押さえ	
57	B16-1	SK－18	H	皿	12,4	(2,2)			密	良好	淡褐色	口縁部ココナデ	
58	B16-1	SK－20	K	碗		(1,8)	7,4		密	良好	淡灰色	高台部貼り付け	
59	B16-1	SK－20	P	碗		(2,5)	6,8		密	良好	淡灰色	高台部貼り付け	高台部に砂粒痕
60	B16-1	SK－20	H	小皿	11,2	(2,0)			密	良好	淡乳褐色	外面ナデ・指押さえ	
61	B16-1	SK－20	D	不明土製品	長(7,3)	幅1,6			やや粗	良好	淡赤褐色	ナデ・指押さえによる整形	被熱による変色
62	B16-1	SK－20	D	不明土製品	長(7,0)	幅3,3			やや粗	良好	淡赤褐色	ナデ・指押さえによる整形	被熱による変色
63	B16-1	SK－20	D	炉壁	縦(7,7)	横(9,3)	厚1,8-2,8		やや粗	良好	淡赤褐色他	内面に面を持つ	鉄津、炉壁、津付着
64	B16-1	2層	T	丸皿	9,2	2,8	5,7		密	良好	淡褐色	高台部削り出し	全面に灰釉／大窯3前
65	B16-1	2層	H	鍋	14,8	(12,8)		最大径24,6	密	良好	淡褐色	体部外面下半ヘラケズリ	底部一部赤で煤付着
66	B16-1	2層	H	鍋	22,8	(7,4)		最大径26,0	密	良好	淡褐色	体部内面板ナデ	外面に煤付着
67	B16-1	2層	I	銭貨	径2,4			重量3.9g					永楽通寶
68	B16-2	2層	T	仏供		(1,6)	4,2		密	良好	淡灰褐色	底部外面糸切り	口縁端部に灰釉／古瀬戸後Ⅱ古
69	B16-2	2層	T	壺		(5,1)	10,6		密	良好	淡赤褐色	体部外面板ナデ	常滑窯産
70	B16-2	2層	H	皿	11,8	1,8			密	良好	淡褐色	口縁部ココナデ	
71	B16-2	2層	H	皿	12,6	(1,5)			密	良好	淡乳褐色	口縁部ココナデ	
24－72	B16-2	SD－04	T	中皿		(2,4)	8,2		密	良好	淡褐色	高台部削り出し	全面に鉄釉／大窯3

挿図-遺物No.	地区	遺構	器種	分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等	備考
24-73	B162	SD-04	T	丸皿	10.2	(2.4)			密	良好	暗灰色	口縁部回転ナデ	初山窯／大窯3後
74	B162	SD-04	T	天目茶碗	11.7	(5.7)			密	良好	淡灰褐色	体部外面下半回転ヘラケズリ	内外面に鉄釉／登1小
75	B162	SD-04	H	皿	12.4	(2.2)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
76	B162	SD-04	H	皿	12.2	(2.5)			密	良好	淡乳褐色	口縁部ヨコナデ	
77	B162	SD-04	H	鍋	18.8	(7.6)		最大径20.0	密	良好	淡褐色	体部内面ヘラケズリ	体部外面に煤付着
78	B161-3	SD-04	H	羽釜	27.5	(23.5)		最大径34.0	密	良好	淡乳褐色	体部外面下半ヘラケズリ	煤は始だ見られない
79	B163	SD-04	H	皿	11.6	(2.0)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	焼成後穿孔あり
80	B162	SK-28	H	小皿	8.2	1.7			密	良好	淡灰褐色	外面ナデ・指押さえ	
81	B162	SK-28	H	小皿	10.9	(1.9)			密	良好	淡赤褐色	外面ナデ・指押さえ	
82	B162	SK-28	H	皿	14.5	2.7			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
83	B162	SK-28	H	皿	16.2	(2.6)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
84	B162	SK-28	H	鍋	15.2	(13.5)		最大径26.0	密	良好	淡褐色	体部外面下半ヘラケズリ	茶釜形
85	B162	SK-28	H	鍋	24.8	(11.7)		最大径26.3	密	良好	淡乳褐色	体部外面下半ヘラケズリ	体部外面に煤付着
86	B162	SK-28	H	鍋	23.2	(11.2)		最大径25.5	密	良好	淡乳褐色	体部外面下半ヘラケズリ	外面に煤付着
87	B162	SK-28	H	鍋	18.8	(10.7)		最大径19.8	密	良好	淡褐色	体部外面下半ヘラケズリ	外面に煤付着
88	B162	SK-28	H	鍋	19.3	(10.6)		最大径20.0	密	良好	淡褐色	体部外面下半ヘラケズリ	外面に煤付着
89	B162	SK-28	H	鍋	21.8	(9.1)			密	良好	淡灰褐色	体部外面下半ヘラケズリ	外面に煤付着
25-90	B174	SK-21	H	蓋	13.2	(1.2)		最大径15.8	密	良好	淡乳褐色	外面ヘラケズリ後丁寧なナデ	
91	B174	SK-21	H	盤		(2.8)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	内面に煤付着
92	B174	SK-21	H	皿	13.4	(2.5)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
93	B174	SK-21	H	皿	11.1	(2.0)			密	良好	淡乳褐色	口縁部ヨコナデ	
94	B174	SK-29	T	天目茶碗	12.2	(3.6)			密	良好	淡乳褐色	口縁部回転ナデ	内外面に鉄釉／大窯1
95	B174	SK-29	T	縁釉小皿	9.8	(3.1)			密	良好	淡黄褐色	口縁部回転ナデ	内外面に灰釉／古瀬戸後Ⅳ新
96	B174	SK-29	T	擂鉢		(2.7)			密	良好	淡褐色	口縁部回転ナデ	内外面に灰釉／古瀬戸後Ⅳ新
97	B174	SK-29	T	擂鉢	29.6	(4.6)			密	良好	淡乳褐色	口縁部回転ナデ	内外面に灰釉／古瀬戸後Ⅳ新
98	B174	SK-29	T	広口壺	14.2	(7.4)			密	良好	灰色	口縁部回転ナデ	常滑窯産
99	B174	SK-29	T	甕		(8.8)			密	良好	黒褐色	口縁部ヨコナデ	常滑窯産
100	B174	SK-29	H	蓋	11.0	(1.7)		最大径13.4	密	良好	淡乳褐色	外面ヘラケズリ後丁寧なナデ	口縁端部に煤付着
101	B174	SK-29	H	皿	12.8	(2.4)			密	良好	淡乳褐色	口縁部ヨコナデ	
102	B174	SK-29	H	皿	12.1	2.3			密	良好	淡乳褐色	口縁部ヨコナデ	
103	B174	SK-29	H	皿	12.6	(1.8)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
104	B174	SK-29	H	小皿	7.1	1.6			密	良好	淡赤褐色	外面ナデ・指押さえ	
105	B174	SK-29	H	小皿	8.4	1.5			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
106	B174	SK-29	H	鍋	14.6	(4.4)			密	良好	淡乳褐色	口縁部ヨコナデ	茶釜形
107	B174	SK-29	H	鍋	21.6	(10.2)		最大径23.0	密	良好	淡褐色	体部内面下半ヘラケズリ	外面に煤付着
108	B174	SK-29	H	鍋	24.4	(15.0)		最大径25.4	密	良好	淡乳褐色	体部内面下半ヘラケズリ	外面に煤付着
109	B174	SK-29	H	鍋	22.3	(15.9)		最大径26.6	密	良好	淡褐色	体部内面下半ヘラケズリ	体部外面に煤付着
110	B174	SK-29	H	鍋	22.8	(7.5)			密	良好	淡褐色	体部内面板ナデ	外面に煤付着
111	B172	SK-4	T	腰折皿	11.2	(2.0)			密	良好	淡灰白色	口縁部ヨコナデ	内外面に灰釉／古瀬戸後Ⅳ新
112	B172	SK-4	H	皿	13.8	(2.8)			密	やや不良	淡乳褐色	口縁部ヨコナデ	
113	B172	SK-4	H	皿	14.1	2.6			密	やや不良	淡乳褐色	口縁部ヨコナデ	
114	B172	SK-4	H	小皿	9.3	2.0			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
115	B172	SK-4	H	小皿	8.2	1.5			密	良好	淡赤褐色	外面ナデ・指押さえ	
116	B172	SK-4	H	鍋		(4.9)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	外面に煤付着
26-117	B172	SK-4	H	鍋	19.6	(9.6)		最大径21.6	密	良好	淡褐色	体部内面下半ヘラケズリ	体部外面に煤付着
118	B172	SK-4	H	鍋	22.8	(13.6)			密	良好	淡茶褐色	体部内面下半ヘラケズリ	外面全体に煤付着
119	B172	SK-4	H	鍋	25.0	(14.5)		最大径25.9	密	良好	淡灰褐色	体部内面下半ヘラケズリ	外面全体に煤付着
120	B172	SK-4	H	鍋	24.6	(12.8)		最大径26.4	密	良好	淡褐色	体部内面下半ヘラケズリ	外面全体に煤付着
121	B172	SK-4	D	不明土製品	縦4.2	横5.6			密	良好	淡灰褐色	ナデ・指押さえによる整形	被熱により変色、浮付着
122	B172	SK-2	T	甕		(5.8)			密	良好	淡赤褐色	口縁部回転ナデ	常滑窯産一赤物
123	B172	SK-2	T	甕		(10.1)			密	やや不良	淡褐色	口縁部ヨコナデ	常滑窯産一素焼き
124	B172	SK-2	H	皿	12.1	3.1	5.6		密	やや不良	淡茶褐色	口縁部回転ナデ	口縁端部全体に煤付着
125	B172	SK-2	N	軒丸瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
126	B172	SK-2	N	軒平瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
127	B172	SK-2	N	軒平瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
128	B172	SK-2	N	軒平瓦					密	良好	灰色	内面ナデ調整	
129	B172	SK-3	N	軒丸瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
130	B172	SK-3	N	軒丸瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	家紋瓦
131	B172	SK-3	N	軒平瓦					密	良好	淡灰色	内面ナデ調整	
132	B172	SK-3	N	軒平瓦					密	良好	淡灰白色	内面ナデ調整	
27-133	B172	SK-9	H	小皿		(1.7)			密	良好	淡乳褐色	外面ナデ・指押さえ	
134	B172	SK-9	H	鍋		(9.3)			密	良好	淡褐色	体部内面板ナデ	外面に煤付着
135	B172	SK-9	H	鍋	14.2	(5.5)			密	良好	淡乳褐色	口縁部ヨコナデ	茶釜形
136	B172	SK-14	T	腰折皿	10.9	2.6	4.6		密	良好	淡褐色	高台部際の出し	内外面に灰釉／古瀬戸後Ⅳ新
137	B172	SK-14	T	碗		(1.3)	4.5		密	良好	淡灰褐色	高台部際の出し	内面に鉄釉／後Ⅳ新一大窯1
138	B172	SK-14	T	擂鉢		(2.9)			密	良好	淡乳褐色	口縁部回転ナデ	内外面に鉄釉／大窯1・2
139	B172	SK-14	H	皿	12.8	2.6			密	良好	淡乳褐色	口縁部ヨコナデ	
140	B172	SK-14	H	皿	13.8	2.2			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
141	B172	SK-14	H	皿	13.1	2.8			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	外面に煤付着
142	B172	SK-14	H	小皿	8.5	1.7			密	やや不良	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
143	B172	SK-14	H	小皿	8.3	2.1			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
144	B172	SK-14	H	鍋	21.6	(9.0)		最大径24.6	密	良好	淡乳褐色	体部内面板ナデ	外面に煤付着

図版-遺物	地区	遺構	器種	分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等	備考
27-145	B17-2	SK-14	H	鍋	22.2	(11.1)		最大径23.3	密	良好	淡乳褐色	体部外面下半ヘラケズリ	外面に煤付着
146	B18-1	SK-14	Z	青磁碗		(5.6)			密・精良	良好	淡灰色	外面に蓮弁文	
147	B18-1	SK-22	H	皿	13.8	(2.3)			密	良好	淡乳褐色	口縁部ヨコナデ	
148	B18-1	SK-22	H	鍋	18.0	(7.4)		最大径19.6	密	良好	淡褐色	体部内面板ナデ	外面に煤付着
149	B18-2	SK-7	T	平碗	15.0	(3.6)			密	良好	淡灰褐色	口縁部回転ナデ	内外面に灰釉／古瀬戸後Ⅳ古
150	B18-2	SK-7	H	鍋	23.0	(13.1)		最大径24.2	密	良好	淡褐色	体部外面下半ヘラケズリ	外面に煤付着
151	B19-1	SD-04	T	瀬戸皿	10.1	2.3	6.0		密	良好	淡乳褐色	高台部削出し	全面に灰釉／大窯1
152	B19-1	SD-04	T	丸皿	12.2	(1.8)			密	良好	淡褐色	体部外面回転ヘラケズリ	内外面に灰釉／大窯3
153	B19-1	SD-04	H	焼塩壺	4.6	(4.6)			密	良好	淡赤褐色	内面摩滅－布目痕?	
154	B19-1	SK-7	Z	白磁皿		(0.7)	5.4		密	良好	淡灰白色	底部外面回転ヘラケズリ	
155	B19-1	SK-7	D	土師	長(3.4)	径1.2	孔径0.4	重量6.1g	密	良好	淡赤褐色	ナデ・指押さえによる整形	
156	B19-1	2層	H	焜炉?		(5.8)			やや粗雑	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	外面一部被熱
157	B19-1	表土	T	燭台		(5.2)			密	良好	淡灰色	外面回転ナデ	外面に灰釉／古瀬戸後Ⅱ-Ⅱ
158	B19-2	SK-1	T	丸皿		(1.3)			密	良好	淡乳褐色	高台部削出し	全面に灰釉／大窯4前
159	B19-2	SK-1	T	擂鉢		(6.6)	9.4		密	良好	淡乳褐色	体部外面下半回転ヘラケズリ	内外面に鉄釉／登1-2小
160	B19-2	SK-1	H	皿	11.4	1.7			密	良好	淡乳褐色	口縁部ヨコナデ	
161	B19-2	SK-1	H	皿	10.7	2.0			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
162	B19-2	SK-1	H	焼塩壺蓋	6.6	1.5			やや粗雑	良好	淡赤褐色	口縁部ヨコナデ	内面に布目痕無し
163	B19-2	SK-1	I	小柄鞘	長(6.9)	幅1.2	厚0.4	重量6.4g				銅製	
164	B19-2	SK-1	N	軒平瓦					密	良好	灰色	内面ナデ調整	
28-165	B20-1-2	SK-18	T	天目茶碗		(3.3)			密	良好	淡乳褐色	口縁部回転ナデ	内外面に鉄釉／古瀬戸後Ⅱ
166	B20-1-2	SK-18	T	折縁深皿		(1.1)			密	良好	淡灰褐色	口縁部回転ナデ	内外面に灰釉／古瀬戸後Ⅳ新
167	B20-1-2	SK-18	H	小皿	9.3	(1.7)			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
168	B20-1-2	SK-18	H	鍋	28.6	(9.0)		最大径30.8	密	良好	淡乳褐色	体部内面板ナデ	内耳3か所以上
169	B20-1	SK-1	T	水注		(15.9)	頸部径3.1	最大径12.8	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	外面に灰釉／古瀬戸前Ⅳ
170	B20-1	SK-1	H	小皿	8.4	1.5			密	良好	淡赤褐色	外面ナデ・指押さえ	
171	B20-1	SK-1	H	小皿	12.8	(2.5)			密	良好	淡乳褐色	外面ナデ・指押さえ	
172	B20-1	SK-1	D	不明土製品	長(7.3)	径3.5-4.0			やや粗雑	良好	淡赤褐色	ナデ・指押さえによる整形	被熱により変色
173	B20-1	SK-1	D	炉壁	縦(11.7)	横(10.6)	厚1.0-2.7		密	良好	黒禁色他	内側に面を持つ	羽口外壁、滓付着
174	B20-1	SK-1	I	刀子	長(7.9)	幅3.1	厚0.9					鉄製	錆が著しい
175	B20-1	SK-3	D	不明土製品	縦5.9	幅4.9-5.9			やや粗雑	良好	暗褐色	ナデ・指押さえによる整形	被熱により変色・変質
176	B20-1	SK-6	P	碗		(1.8)	6.6		密	良好	淡灰色	底部外面糸切り	高台部に砂粒痕
177	B20-1	SK-6	D	不明土製品	縦4.7	幅4.7-5.2			密	良好	淡赤褐色	ナデ・指押さえによる整形	被熱により変色
178	B20-1	SK-6	D	不明土製品	長(5.5)	径2.5-2.7			密	良好	淡褐色	ナデ・指押さえによる整形	被熱により変色
179	B20-1	SK-13	P	碗		(2.1)			密	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ	
180	B20-1	SK-13	D	炉壁	縦(14.0)	横(10.8)	厚3.0-3.5		やや粗雑	良好	黒灰色他	内面に面を持つ	羽口外壁、滓付着
181	B20-2	SK-17	P	碗	13.2	(2.7)			密	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ	
182	B20-2	SK-17	P	片口鉢		(7.1)			やや粗雑	良好	暗灰色	体部外面不定ヘラケズリ	
183	B20-2	SK-17	H	碗		(0.9)	6.6		密	良好	淡褐色	底部外面糸切り	
184	B20-2	SK-17	D	不明土製品	縦(4.4)	幅5.0-5.1			密	良好	淡褐色	ナデ・指押さえによる整形	被熱により変色・変質
185	B20-2	SK-17	D	不明土製品	長(7.3)	径2.8-3.0			密	良好	淡赤褐色	ナデ・指押さえによる整形	被熱により変色・変質
186	B20-2	SK-15	H	鍋	25.6	(3.7)		頸部径22.8	密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	伊勢型
187	B20-2	SK-15	H	鍋	26.8	(5.8)		頸部径22.8	密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	伊勢型
188	B20-2	SK-20	P	小皿		(0.9)	3.8		密	良好	淡灰色	底部外面糸切り	
189	B20-2	SK-20	H	碗		(0.9)	4.6		密	良好	淡褐色	底部外面糸切り	
190	B20-2	SK-20	H	炉壁	縦(7.7)	横(6.7)	厚1.5-2.5		やや粗雑	良好	淡褐色	内面に面を持つ	炉外の羽口外壁
29-191	B20-2	SK-21	P	小皿	7.9	1.7	4.6		密	良好	淡灰色	底部外面糸切り	
192	B20-2	SK-21	P	碗		(3.0)	7.0		密	良好	淡灰色	底部外面糸切り	高台部に初期痕
193	B20-2	SK-21	H	小皿	10.8	(1.8)			密	不良	淡赤褐色	外面ナデ・指押さえ	
194	B20-2	SK-21	H	皿	10.2-11.4	2.8			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
195	B20-2	SK-21	H	小皿	8.7	1.5			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
196	B20-2	SK-21	D	不明土製品	長(4.3)	径1.8-2.3			やや粗雑	良好	淡褐色	ナデ・指押さえによる整形	被熱により変色
197	B20-2	表土	D	煙瓦	長(13.4)	幅10.5	厚5.5		密	良好	淡赤褐色	平面が縞織状を呈す	刻印あり
198	B20-2	表土	D	煙瓦	長(14.3)	幅11.1	厚5.9		密	良好	淡褐色	平面が縞織状を呈す	刻印あり
199	B21-1	SK-3上層	T	折縁深鉢	32.2	7.2	14.8		密	良好	淡褐色	体部外面下半回転ヘラケズリ	内外面に灰釉／古瀬戸後Ⅱ
200	B21-1	SK-3上層	T	直縁大皿	28.2	(3.4)			密	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ	内外面に灰釉／古瀬戸後Ⅳ古
201	B21-1	SK-3上層	H	小皿	10.2	(2.5)			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
202	B21-1	SK-3上層	H	鍋	17.0	(4.1)			密	良好	淡褐色	体部内面ハケメ	外面に煤付着
203	B21-1	SK-3上層	H	鍋	27.6	(11.3)		最大径28.8	密	良好	淡褐色	体部内面ナデ	外面に炮ぜ煤無し
204	B21-1	SK-3上層	D	炉壁	縦(15.2)	横(15.4)	厚6.4		密	良好	茶褐色他	ナデ・指押さえによる整形	内面に滓付着
205	B21-1	SK-3上層	D	不明土製品	縦4.9	幅5.3-5.7			やや粗雑	良好	淡赤褐色他	ナデ・指押さえによる整形	被熱により変色・変質
206	B21-1	SK-3下層	P	壺	24.0	(7.4)		頸部径19.0	密	不良	淡灰色	口縁部摩滅著しい	
207	B21-1	SK-3下層	T	片口鉢		(5.0)			密	良好	淡灰褐色	口縁部ヨコナデ	常滑窯産
208	B21-1	SK-3下層	T	片口鉢		(5.7)			密	良好	暗褐色	口縁部ヨコナデ	常滑窯産
209	B21-1	SK-3下層	H	羽釜		(3.7)		最大径24.0	密	良好	淡灰褐色	体部内面ナデ・指押さえ	鍔部に煤付着
210	B21-1	SK-3下層	D	不明土製品	縦3.9	幅4.7-4.8			やや粗雑	良好	淡赤褐色他	ナデ・指押さえによる整形	被熱により変色、滓付着
211	B21-1	SK-3下層	D	不明土製品	長8.9	径1.8-2.3			密	良好	明褐色他	ナデ・指押さえによる整形	被熱により変色、滓付着
212	B21-1	撹乱	R	瓦石	長(7.8)	幅2.5-5.5						火を受けて焼ける	石質－凝灰岩
30-213	B21-1	整地層	T	平碗	14.5	(5.5)			密	良好	淡褐色	体部外面下半回転ヘラケズリ	内外面に灰釉／古瀬戸後Ⅳ古
214	B21-1	整地層	T	擂鉢	10.8	2.3	6.2		密	良好	淡乳褐色	口縁端部はひだ状	全面に鉄釉／大窯3後
215	B21-1	整地層	T	卸皿		(1.1)	7.8		密	良好	淡灰色	底部外面糸切り	内面に灰釉／古瀬戸後期
216	B21-1	整地層	T	中碗	15.8	(5.1)			密	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ	内外面に灰釉／古瀬戸中Ⅰ-Ⅱ

図No.-遺物No.	地区	遺構	器種	分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等	備考
30-217	B21-2	SD-03	T	稗田	11.2	2.6	6.0		密	良好	淡灰色	高台部削り込み	全面に鉄釉／大窯3後
218	B21-2	SD-03	H	鍋		(8.1)			密	良好	淡灰褐色	体部内面板ナデ	外面に煤付着
219	B21-2	SD-03	N	軒桟瓦					密	良好	灰色	内面ナデ調整	内面に刻印あり
220	B21-2	SD-03	W	箸	長17.9	径0.4~0.7						面取り加工あり	
221	B21-2	SD-03	W	曲物底板	径3.4~20.8	厚0.6						竹釘で板材をつなぐ	
222	B21-2	SD-03	W	曲物底板	径3.0~20.6	厚1.0						一部面取りあり	
223	B21-3	SK-15	T	甕		(4.9)			密	良好	淡灰色	体部外面板ナデ	常滑窯産
224	B21-3	SK-15	P	碗		(2.1)	6.1		やや粗雑	良好	淡灰色	底部外面糸切り後ヘラケズリ	
225	B21-3	SK-15	D	炉壁	縦(8.3)	横(14.5)	厚3.3~7.5		やや粗雑	良好	黒灰色他	ナデ・指押さえによる整形	内面に鉄滓付着
226	B22-1	SK-1	T	丸皿		(1.0)	6.4		密	良好	淡灰色	高台部削り込み	全面に灰釉／大窯2・3
227	B22-1	SK-2	T	天目茶碗		(3.1)			密	良好	淡灰褐色	口縁部回転ナデ	内外面に鉄釉／古瀬戸後Ⅱ-Ⅲ
228	B22-1	SK-2	T	口広有足皿	10.8	(3.3)			密	良好	淡灰褐色	口縁部回転ナデ	内外面に鉄釉／古瀬戸後期
229	B22-1	SK-2	T	片口鉢	27.4	(5.5)			密	良好	淡赤褐色	口縁端部ヨコナデ	常滑窯産
230	B22-1	SK-2	T	甕		(7.4)	11.8		密	良好	暗赤褐色	体部外面ナデ・指押さえ	常滑窯産
231	B22-1	SK-2	D	土錘	長(6.2)	径2.3	孔径0.6	重量25.5g	密	良好	淡黒褐色	ナデ・指押さえによる整形	
232	B22-1	SK-2	D	土錘	長5.0	径2.1	孔径0.9	重量18.4g	密	良好	淡黒褐色	ナデ・指押さえによる整形	
233	B22-1	SK-2	D	陶丸	径2.1~2.3			重量9.2g	密	良好	暗灰色	ナデ・指押さえによる整形	
234	B22-1	SK-2	H	小皿	9.8	1.9			密	良好	淡赤褐色	外面ナデ・指押さえ	
235	B22-1	SK-2	H	小皿	10.6	2.0			密	良好	淡黒褐色	外面ナデ・指押さえ	
236	B22-1	SK-2	H	皿	12.4	1.9			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
237	B22-1	SK-2	H	壺	10.8	(1.5)		最大径13.2	密	良好	淡乳褐色	天井部外面丁寧なナデ	
31-238	B22-1	SK-2	H	鍋	22.2	(8.2)		最大径22.7	密	良好	淡褐色	体部内面板ナデ	外面に煤付着
239	B22-1	SK-2	H	鍋	24.8	(7.9)		最大径27.0	密	良好	淡褐色	体部内面板ナデ	外面に煤付着
240	B22-1	SK-2	H	鍋		(5.5)			密	良好	暗褐色	口縁端部ヨコナデ	外面に煤付着
241	B22-1	SK-2	H	鍋	29.4	(14.5)			密	良好	淡褐色	体部外面下半ヘラケズリ	外面に煤付着
242	B22-1	SK-4上層	T	天目茶碗	12.2	(6.2)			密	良好	淡灰褐色	体部外面下半回転ヘラケズリ	内外面に鉄釉／古瀬戸後期
243	B22-1	SK-4上層	H	鍋		(5.0)			密	良好	淡褐色	体部内面板ナデ	
244	B22-1	SK-4上層	T	壺	15.6	(10.7)			密	良好	淡灰色	体部内面ナデ・指押さえ	常滑窯産
245	B22-1	SK-4下層	H	鍋	27.2	(4.9)			密	良好	淡褐色	体部内面摩滅	外面に煤付着
246	B22-3	土盛内	T	天目茶碗	10.6	(5.6)			密	良好	淡乳褐色	口縁部回転ナデ	内外面に鉄釉／古瀬戸後Ⅲ古
247	B22-3	土盛内	P	碗		(2.7)	8.0		密	良好	淡灰色	底部外面糸切り	高台部に砂粒痕
248	B22-3	土盛内	S	把手		(5.1)			密	不良	淡灰色	ナデ・指押さえによる整形	瓶などの把手
249	B22-3	土盛内	H	鍋		(2.6)			密	良好	淡乳褐色	口縁部ヨコナデ	
250	B22-3	SK-1	N	軒平瓦					密	良好	灰色	内面ナデ調整	
251	B22-1~3	SD-02	T	縁釉小皿		(1.0)	5.2		密	良好	淡灰色	底部外面糸切り	外面に灰釉／古瀬戸後期・Ⅳ
252	B22-1~3	SD-02	H	鍋		(1.8)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	外面に煤付着
253	B22-1~3	SD-02	H	皿	14.1	2.2			密	良好	淡乳褐色	口縁部ヨコナデ	
254	B22-1~3	SD-02	H	皿	11.8	(1.9)			密	やや不良	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
255	B22-1~3	SD-02	P	鉢		(4.8)	14.6		密	やや不良	淡灰色	体部内面下半回転ヘラケズリ	
256	B22-1	SD-11	P	碗		(1.7)	6.6		密	良好	淡灰色	底部外面糸切り後ヘラケズリ	高台部に砂粒痕
257	B22-1	SK-20	T	折縁深鉢	34.8	9.9			密	良好	淡灰色	体部外面下半回転ヘラケズリ	内外面に灰釉／古瀬戸後Ⅱ
32-258	B22-1	2層	P	碗	14.0	4.6	7.0		密	良好	淡灰色	底部外面糸切り後ヘラケズリ	
259	B22-1	2層	T	甕		(4.0)	13.0		やや粗雑	良好	淡茶褐色	体部外面ナデ・指押さえ	常滑窯産
260	B22-1	2層	H	小皿	12.4	1.9			密	良好	淡黄白色	外面ナデ・指押さえ	内外面に煤付着
261	B22-1	2層	D	不明土製品	縦4.5	幅3~4.5			やや粗雑	良好	淡褐色他	ナデ・指押さえによる整形	被熱により変色・変質
262	B22-1	2層	D	不明土製品	縦(4.2)	幅4.4~4.8			やや粗雑	良好	淡褐色	ナデ・指押さえによる整形	被熱、穴状痕などあり
263	B22-1	2層	D	不明土製品	縦4.7	幅3.3~5.5			やや粗雑	良好	淡赤褐色他	ナデ・指押さえによる整形	被熱により変色・変質
264	B22-2	SD-03	T	大皿	27.2	(5.8)			密	良好	暗灰褐色	体部外面回転ヘラケズリ後ナデ	内外面に鉄釉
265	B22-2	SD-03	H	皿	10.1	1.7			やや粗雑	やや不良	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
266	B22-2	SD-03	W	植物板	縦6.2	横6.1	厚1.1						
267	B22-2	SK-31	P	碗	13.5	4.6	7.0		密	良好	淡灰色	底部外面糸切り	
268	B22-2	SK-31	P	片口鉢	31.8	(8.0)			やや粗雑	良好	淡灰色	体部外面下半回転ヘラケズリ	
269	B22-2	SK-31	H	皿	11.6	2.8	6.8		密	良好	淡赤褐色	口縁部ヨコナデ	
270	B22-2	SK-31	H	鍋	24.2	(2.3)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	外面に煤付着～伊勢型
271	B22-2	SK-32	P	碗	13.9	4.1	6.2		密	良好	淡灰色	底部外面糸切り	
272	B22-2	SK-32	P	碗		(2.5)	7.2		密	良好	淡灰色	底部外面糸切り	
273	B22-2	SK-32	D	炉壁	縦(30.4)	横(27.0)	厚4.6~8.2		やや粗雑	良好	暗紫色他	ナデ・指押さえによる整形	内面に銅滴付着
274	B22-2	SK-12	D	煙瓦	長(11.0)	幅10.8	厚5.7		密	良好	淡褐色	平面が細縦状を呈す	刻印あり
275	B22-2	断割0	N	軒丸瓦					密	良好	暗灰色	内面ナデ調整	瓦の本目が目立つ
276	B22-3	表土	D	羽口	長(11.8)	径10.6	先端3.0~3.5		やや粗雑	良好	淡褐色他	外面ナデによる整形	被熱により変色・変質
33-277	B20-1	SK-2	D	錘型	縦(5.0)	横(8.2)	厚(2.0)		精良	良好	淡褐色	平坦な面	表面 黒灰色～淡灰色
278	B21-3	2層	D	錘型	縦(3.8)	横(4.9)	厚(1.8)		精良	良好	淡赤褐色	屈折した面	表面 黒灰色～淡橙褐色
279	B21-3	SK-17	D	錘型	縦(3.2)	横(2.5)	厚(1.2)		精良	良好	淡褐色	屈折した面	表面 黒灰色
280	B22-1	2層	D	錘型	縦(3.5)	横(3.6)	厚(1.5)		精良	良好	淡褐色	平坦な面	表面 黒灰色
281	B22-1	2層	D	錘型	縦(2.7)	横(4.0)	厚(2.0)		精良	良好	淡褐色	屈曲した面	表面 淡橙褐色
282	B16-1	SK-20	D	錘型	縦(1.8)	横(2.2)	厚(2.3)		精良	良好	淡褐色	一面に沈線2条	表面 淡灰色
283	B21-3	2層	D	錘型	縦(2.8)	横(3.0)	厚(2.2)		精良	良好	淡赤褐色	平坦な面が2面	表面 黒灰色～淡灰色
284	B20-1~2	SK-18	D	錘型	縦(1.8)	横(1.7)	厚(1.5)		精良	良好	淡赤褐色	縦やや凸段を有する	表面 黒灰色
285	B20-2	SK-20	D	錘型?	縦(1.7)	横(1.1)	厚(1.0)		精良	良好	淡褐色	ナデ・指押さえによる整形?	表面 淡褐色
286	B15-1	SD-05	I	梅形弾	縦6.5	横7.7	厚2.0~3.5					上面に白い石粒付着	
287	B21-1	SK-17層	I	梅形弾	縦6.3	横9.7	厚1.8~2.0					上面に白い石粒付着	

※器種記号 H－土師器 S－須恵器 K－灰釉陶器 D－土製品 R－石器・石製品 P－灰釉系陶器 T－陶器 Z－磁器 I－金属製品 N－瓦・瓦質土器
法量の単位は㎝。（ ）は残存数値。底径には、脚部径や高台径を含む。

第５章　総括

１．近世以前の吉田城（第34図）

今回の発掘調査地は、近世吉田城の二の丸・三の丸にあたる部分で、絵図からの復元とほぼ一致する場所で二の丸堀（ＳＤ－０８）が確認されたが、これに伴う土塁は堀内に埋められるなど既に削平されていた。これ以外では、B15－２区ＳＫ－20、B19－２区ＳＫ－７、B19－１区ＳＫ－１などが17世紀代の遺構である可能性が高い。また、瓦類が多量に出土している土壙（A2－１・２区ＳＫ－29、A2－２区ＳＫ－18、A7－１区ＳＫ－１、A12－３区ＳＫ－３、B17－２区ＳＫ－２、同区ＳＫ－３等）については、18世紀以降のものがほとんどであるが、地震による建物倒壊などに伴うような一時的な廃棄土壙であろう。いずれにしても近世の遺構や遺物は非常に少ないが、当然これは二の丸・三の丸という空間的な性格によるものと考えられる。

一方、近世以前の状況は、堀・溝・土壙などが重複するように掘られており、比較的短期間の中で著しい変化があったことが推測される。以下では、近世以前の吉田城の状況を大きくⅠ～Ⅲ期に分けて見ていくことにする。なお、Ⅰ期以前については、B15－２区あたりに９世紀代の溝（ＳＤ－０９）や土壙（ＳＫ－28・30、ＳＫ－31）が比較的まとまって見られる。古代官衙の存在が推測される鮑海遺跡に関連したものであろう。

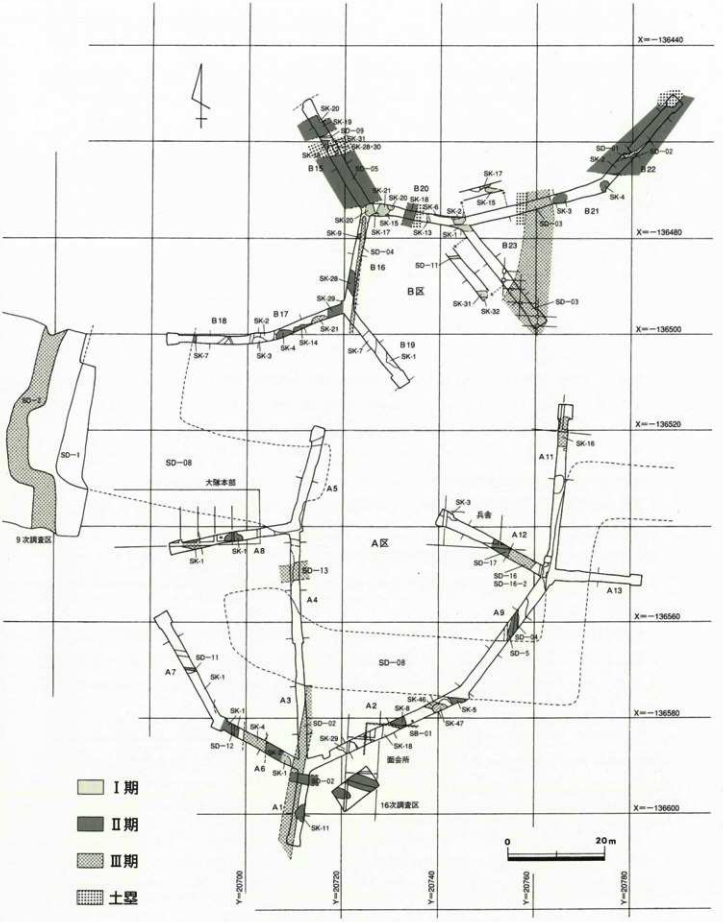
Ⅰ期（13世紀後半～14世紀）

Ⅰ期の遺構は、A区ではA6－２区ＳＫ－１のみであるが、B区ではＳＤ－１１、B16－１区ＳＫ－20、B20－１区ＳＫ－１・２・６・13、B20－２区ＳＫ－15・17・20・21、B21－３区ＳＫ－15・17、B23－２区ＳＫ－31・32などがあり、調査地の北側により多くの遺構がまとまっている。

これらの遺構の多くは、灰釉系陶器・古瀬戸・土師器などと共に鉄滓・鉄塊（系遺物）・炉壁・焼土・炭・鋳型・不明土製品のいずれかが含まれている。また、他遺構に混じって羽口やとりべも出土しているため、鍛冶・鋳造に関係した遺構が存在した可能性が高い（注１）。但し、いずれも鍛冶・鋳造後に廃棄されたものであるため、遺構として確認できるものはない。

炉壁については、剥離した部分が水平な面となるものが多く見られることから、それを積み重ねて筒状に造る溶解炉があったと考えられる。この炉壁やとりべには、鉄分以外に銅滴が付着したものもあり、また炉壁が黒紫色に変色しているものがあることから、鉄だけでなく銅の鋳造も行っていたようである。鋳型については、点数が少なく破片も小さなものが多いため製品の特定はできないが、大型品の鋳造とは考えにくい。なお不明土製品には、棒状のものとコマ状のものがみられるが、いずれも用途ははっきりしない。

これら鍛冶・鋳造関係遺構を伴う集落は、一般的な集落とは異なる性格を有していた可能性が高い。「鮑海神戸」や「吉田御園」が調査地周辺に設置され、形態を変えながらも14世紀代までは続いたようである（注２）ことから、こうしたものとの関連性を推測してみたい。



第34図　近世以前の主要遺構（1／800）

Ⅱ期（15世紀後半～16世紀前半）

Ⅱ期は、牧野古白による今橋城築造から初期の吉田城の時期に位置付けられる。主な遺構としては、A区ではＳＤ－０２、ＳＤ－０４、ＳＤ－０５、ＳＤ－１１、ＳＤ－１２、ＳＤ－１７、A1－１・２区ＳＫ－11、A2－３区ＳＫ－８、A2－４区ＳＫ－５、A6－１区ＳＫ－１、A6－２区ＳＫ－２、A8－２区ＳＫ－１、B区ではＳＤ－０２、ＳＤ－０５、B15－２区ＳＫ－18・19、B16－１区ＳＫ－９、B16－２区ＳＫ－28、B17－１区ＳＫ－29、B17－２区ＳＫ－４・９・14、B18－１区ＳＫ－14・22、B18－２区ＳＫ－７、B20－１・２区ＳＫ－18、B21－１区ＳＫ－３、B22－１区ＳＫ－２・４などが確認されている。

これらの遺構のうちB区のＳＤ－０２、ＳＤ－０５、B15－２区ＳＫ－19、B20－１・２区ＳＫ－18など(注３)は、いずれも断面が箱堀状の堀になると考えられる。また、これらは幅の広いもの(ＳＤ－０２、ＳＤ－０５)と幅の狭いもの(B15－２区ＳＫ－19、B20－１・２区ＳＫ－18)とが存在し、B15－２区ＳＫ－19を除いて土塁を伴うようである。土塁の位置や堀の位置・規模などからすれば、今橋城(初期吉田城)は近世吉田城本丸付近に主郭を配した複郭構造となる可能性が高い。

土壙については、径２～４ｍ程の円形や楕円形のものが主体で、土師器くの字形鍋・半球形鍋・皿・小皿など日常的な土器が多く出土している。これらは、家臣の屋敷地に伴うものと考えられ、南側のA区でも多くが確認されていることから、今橋城(初期吉田城)の範囲がかなり広いことを推測させる。なお、小規模な溝が検出されているが、これが屋敷地を区画するものかは判然としない。

Ⅲ期（16世紀後半～16世紀末葉）

Ⅲ期は城主酒井忠次を中心とした時期で、池田照政による大改修の直前までに位置付けられる。主な遺構としては、A区ではＳＤ－０１、ＳＤ－１３、ＳＤ－１６、ＳＤ－１６－２、ＳＢ－０１、A2－３区ＳＫ－46、A2－３・４区ＳＫ－47、A6－１区ＳＫ－４、A8－３区ＳＫ－１・９、A11－３区ＳＫ－16、B区ではＳＤ－０１、ＳＤ－０３、ＳＤ－０４、B17－１区ＳＫ－21、B22－１区ＳＫ－１などが確認されている。

堀と考えられる遺構は、B区でＳＤ－０３(西側に土塁を伴う可能性がある)、A区ではＳＤ－１３が確認されている。このうちＳＤ－１３は、９次調査区で検出されたＳＤ２と形態的に近い箱堀状であることからこれにつながる可能性がある(注４)。なおＳＤ－０３は、幅の広い堀であるが断面形は確認できず、その位置付けについてもはっきりしない。

堀以外では、B区ＳＤ－０４やA区ＳＤ－０１などが規模や規格性から家臣屋敷地を区画した溝と考えられる。ＳＤ－０４は南北方向に均一の幅・深さで直線的に延び、ＳＤ－０１も同じように南北方向に延びている。また、これらの区画溝と堀との位置関係からすれば、家臣屋敷地が堀で区画された内側にも配された可能性がある。

土壙については、Ⅱ期と同様な規模・遺物内容であることから家臣屋敷地に伴うものと考えられるが、北側のB区に少なく南側のA区に多い傾向が読み取れる。家臣屋敷地の配置が、Ⅱ期とは異なって整理されてきたことを示すのであろう。

2．まとめにかえて

今回の発掘調査は、排水管埋設に伴うものであるため調査区はまるで細長い試掘トレンチ状となり、また公園内に張り巡らされた配線や排水管等に悩まされながらの調査であった。そうした中でも、想像以上に遺構の遺存状況は良好で、多くの成果を得ることができた。

調査地は、近世吉田城の二の丸・三の丸にあたり、絵図からの復元とほぼ一致する場所で二の丸堀が確認された。また、二の丸口に近い部分では堀内に石垣が検出され、絵図(三州吉田城図－豊橋市中央図書館蔵)に示されたものと一致すると共に、使用された石材からは池田期のものと推測された。

一方、絵図にはない近世以前の吉田城の姿も徐々に見えてきた。これまでに検出された堀や土塁の配置からすれば、複郭構造で近世吉田城本丸付近に主郭が存在した可能性が高い。池田照政によって近世城郭へと大きく姿を変えながらも、その基本形は戦国期の城郭配置が根底にあったものと推測される。

また、中世の鍛冶・鋳造関係の遺物が多数出土し、遺構の存在も推測された。市内では類例のないもので、今後の調査に期待される。

注1　(財)愛知県埋蔵文化財センター鈴木正貴氏のご教示によると、B区ＳＤ－０５（Ⅰ期）などで出土している椀形滓などの鉄滓は気泡が多くスカスカしたものであることから、Ⅰ期とは別に何らかの鍛冶がⅡ期以降に行われていたことを示しているという。

注2　豊橋市史編集委員会　1973『豊橋市史　第一巻』

注3　これらの遺構のうち、ＳＤ－０２とB20－１・２区ＳＫ－18は古瀬戸後Ⅳ新までの陶器で大窯１段階の遺物を含んでいない。古い時期の陶器が引き続いて使われた可能性が高い。

注4　豊橋市教育委員会他　1994『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第21集　吉田城址（Ⅰ）』

報告書抄録

ふりがな	よしだじょうし（ろく）
書名	吉田城址（Ⅵ）
副書名	
巻次	
シリーズ名	豊橋市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第85集
編著者名	小林久彦
編集機関	豊橋市教育委員会
所在地	〒440−0801　豊橋市今橋町３番地の１　TEL0532−51−2879
発行年	西暦２００６年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
よしだじょうし 吉田城址	とよはししいまはしちょう 豊橋市今橋町 ３番地他	23201	79393	34度 45分 8秒	137度 23分 34秒	20040123 ～ 20040329	939㎡	公園整備 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉田城址	城館	中世～近世	堀 掘立柱建物 溝 土壙	陶器、磁器、土師器 灰釉系陶器、木製品 鉄滓、炉壁	吉田城二の丸～三の丸にかけての新旧の堀が検出される。

写 真 図 版

写真図版１

１．A1－１・２区全景（北から）

２．A1－１・２区SK－11断面（西から）

３．A1－１区SD－０２断面（東から）

４．A2－３～１区全景（北東から）

５．A2－１～３区全景（南西から）

１．A2－２～４区全景（南西から）

２．A2－４～１区全景（北東から）

３．A2－２・３区SB－０１柱穴他（北から）

４．A2－４区SK－5遺物出土状況（北東から）

５．A2－４区SD－０８断面（南東から）

写真図版 3

1．A6－2・1区全景（南東から）

2．A6－1区柱穴等（北西から）

3．A6－1・2区SK－4断面（南から）

4．A7－3～1区全景（北から）

5．A7－3区SK－6断面（南から）

1．A3－1～3区全景（北から）

2．A3－3・2区全景（南から）

3．A3～A4区SD－08（北から）

4．A4－1区SD－08断面（西から）

5．A4－2区SD－13（北西から）

写真図版5

1．A4－3～1区全景（北から）

2．A4－1～3区全景（南から）

3．A5－1・2区全景（南から）

4．A5－2・1区全景（北から）

1．A8－1区SD－08石垣（北東から）

2．A8～A5区SD－08石垣（南から）

3．A5－1区SD－08石垣（西から）

4．A8－1～3区全景（東から）

5．A8－3～1区全景（西から）

写真図版７

１．A9－１・２区全景（北東から）

２．A9－２～４区全景（北東から）

３．A9－２・３区SD－０８（南から）

４．A11－４～１区全景（北から）

５．A12－３区全景（西から）

1．A11－1～3区全景（南から）

3．A12－1～3区全景（東から）

4．A13－1・2区全景（西から）

2．A12－3～1区全景（西から）

5．A13－1区SD－08（南西から）

写真図版 9

1．B15－1～3区全景（南から）

2．B15－3・2区全景（北から）

3．B15－2区SK－20（西から）

5．B15－2・1区SD－05（北から）

4．B15－1区西壁土層（東から）

6．B15－2区SK－19断面（東から）

1．B16－1～3区全景（北から）

2．B16－3・2区全景（南から）

3．B16－1区SD－04断面（南から）

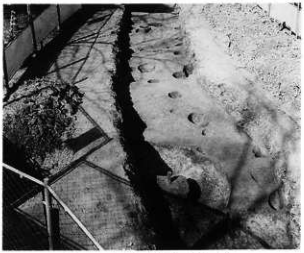
4．B17－2・1区全景（西から）

5．B17－2区SK－4遺物出土状況（西から）

写真図版11

1．B17－1・2区全景（東から）

2．B18－2・1区全景（西から）

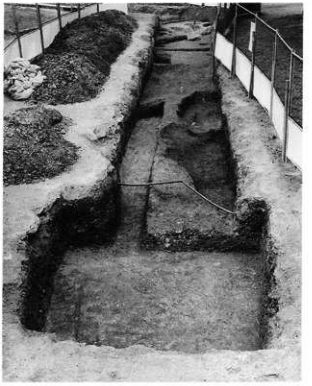


3．B18－1区全景（東から）

4．B18－2区SD－08（西から）

5．B18－2区SD－08断面（南から）

1．B19－1・2区全景（北西から）



2．B19－2・1区全景（南東から）

3．B20－2・1区全景（西から）

4．B20－1・2区SK－18断面（南から）

5．B20－2区北壁土層（南から）

写真図版13

1．B20－1・2区全景（東から）

3．B21－3～1区全景（西から）

2．B21－1～3区全景（東から）

4．B21－3区下層全景（西から）

5．B21－2区SD－03断面（南から）

1．B22－３～１区全景（北東から）

2．B22－１～３区全景（南西から）

3．B22－３区土塁検出状況（南西から）

4．B22－１区SD－０２・ＳＫ－2断面（南東から）

5．B23－３～１区全景（南東から）

写真図版15

1．B23－1～3区全景（北西から）

2．B23－2・1区下層全景（南東から）

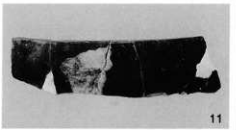
3．B23－2区SK－1・2（東から）

4．B23－2区SK－31・32（北東から）

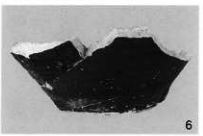
5．B23－2・3区SD－03（南から）

6．B23－2・3区SD－03断面（南西から）

2


11

25


6

15

26

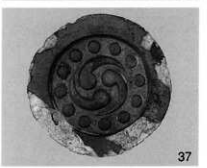
8

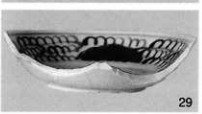
27

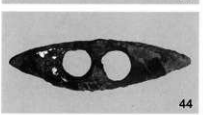
28

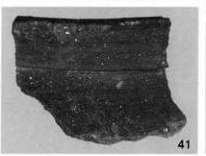
21

40


37


29

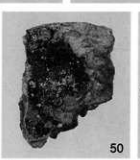

44


41

38

45

36


50

74

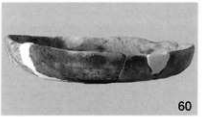
A区出土遺物－1

53

56

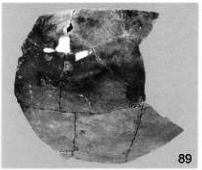
55

58


60

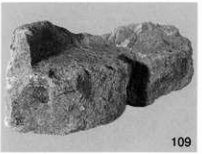
75

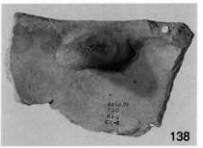
76


89

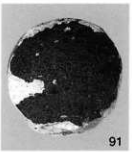
79

82


109

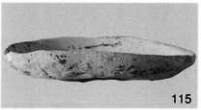

138

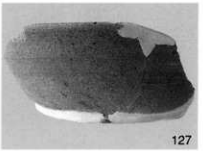
97

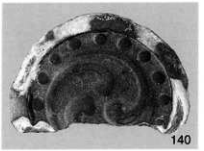

91

103

108

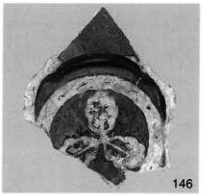

115


127


140

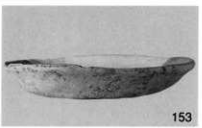
129

A区出土遺物ー2


146

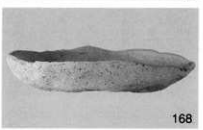
142

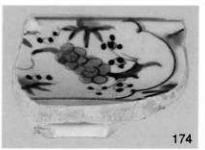
157

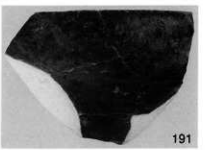

153

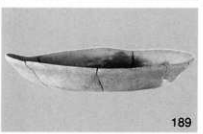
148

158

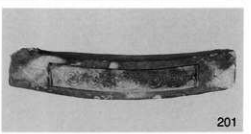

168

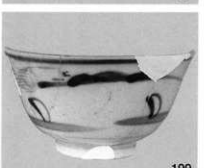

174

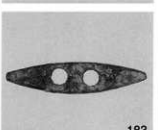

191


189

172


201


199

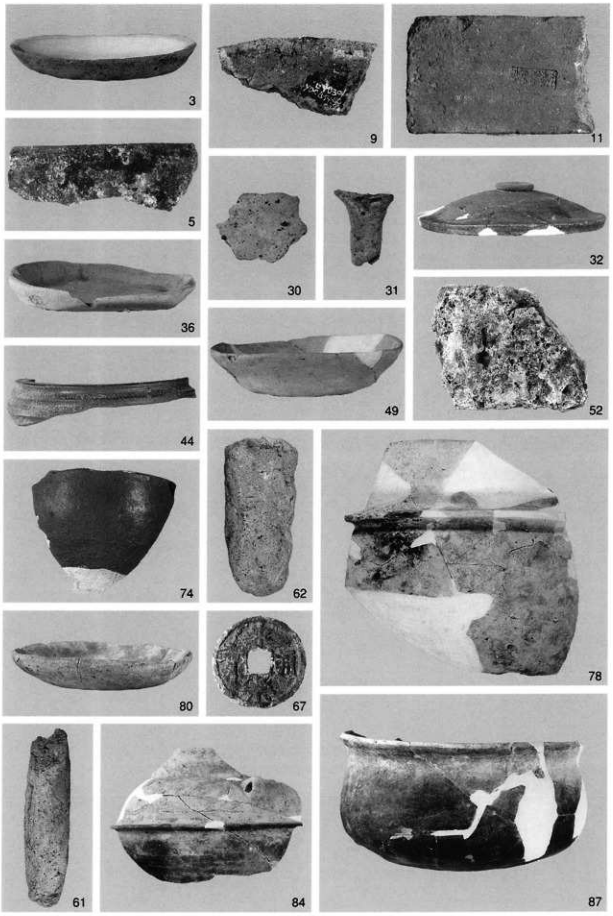

183

203

206

207

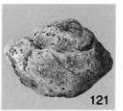
A区出土遺物－3



B区出土遺物－1

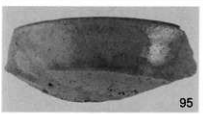
88

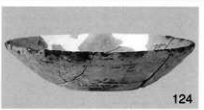
82


121

127

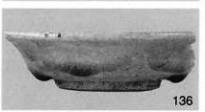
119

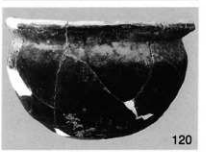

95

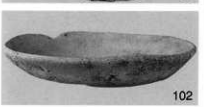

124

113

99

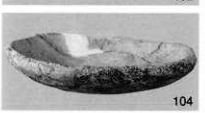

136


120

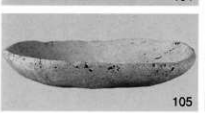

102

129

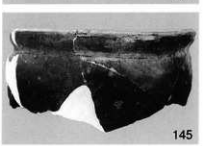
139


104

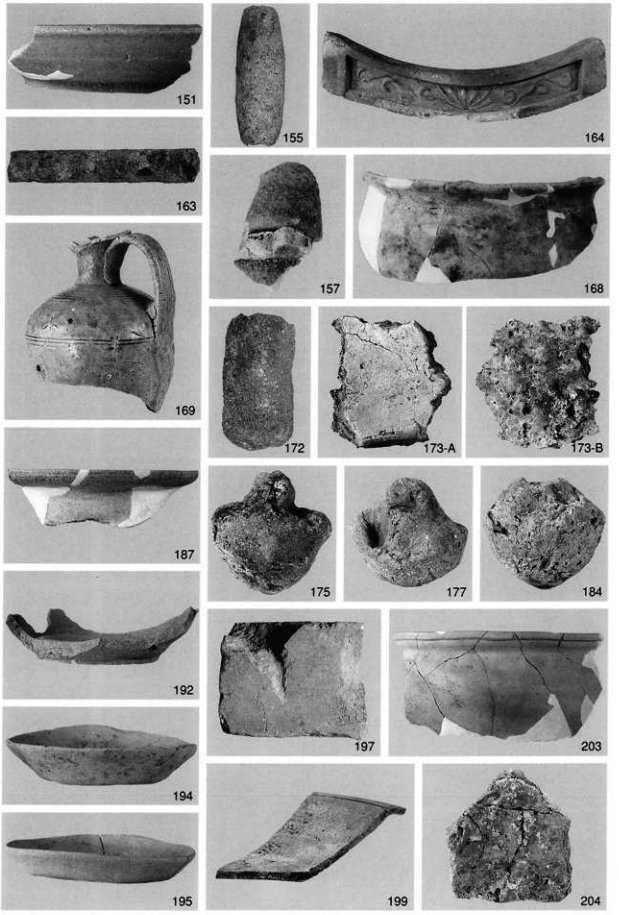
141


105

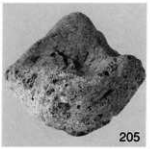
130


145

B区出土遺物－2

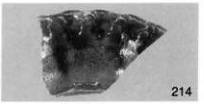

151
155
164
163
157
168
169
172
173-A
173-B
187
175
177
184
192
197
203
194
195
199
204

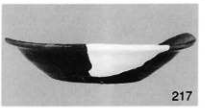
B区出土遺物－3


205

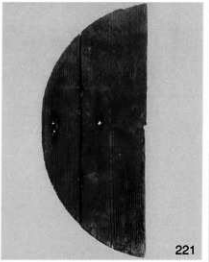
213

211


214


217

220


221

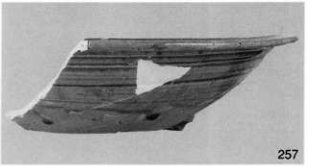
231

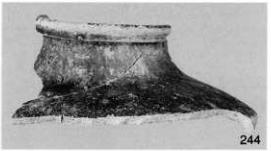
235

232

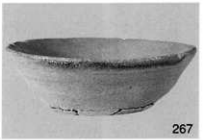
250

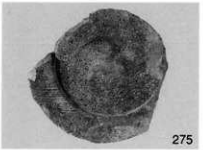
241


257

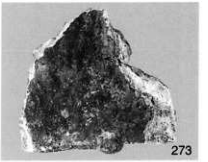

244

263


267

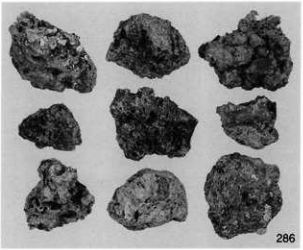

275

276

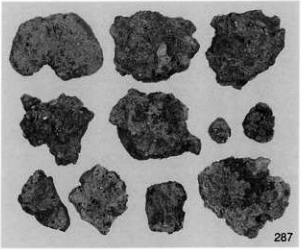

273

B区出土遺物－4

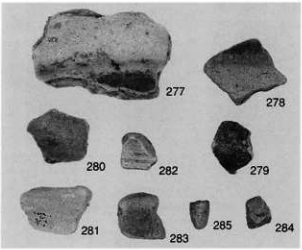
写真図版23



B15－１区SD－０５出土　鉄滓他



B21－１区SK－3下層出土　鉄滓他



B区出土　鋳型片

B区出土遺物－５

豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第85集

吉 田 城 址 (VI)

２００６年３月３１日

発　行　豊橋市教育委員会©
美術博物館
〒440-0801　豊橋市今橋町３番地の１

印　刷　吉田印刷株式会社